

酔つたやうな足取だ、と刑事が心着く時、夫人の駒下駄は入交つて、再び欄干に臨むたと思ふと、男の形が衝と寄つて、其の繩に手を掛けたが、釣瓶はふらくと左右に揺れて、井戸ならなくに朝顔に、月夜鴉の纏れた風情、雪の頸も黒髪も、袖も裳も靡いたのである。

さては、汲かへむとする程に、否我こそとや争ふ、と見ると男はつかくと、ものゝ二尺衝と退つた。

釣瓶は潑と落込む。綱は手に控へながら、お美波は水を汲まうともしないで、斜に男を見遣る、肩つきが細りと、髪に風の添ふ状で、鼻筋の通つた立姿は、氷りついたものゝやう。

二三分経つてから、急に言が入交つて、嘔くともなく語らう聲。聲の響が影になつて、空に雁の描かれたやう。言の音に浪あつて、水に文字の映るやう。俯し且つ仰いで、漫に其の言語が見たくなつた、刑事の耳には、偏に流の音が哄と高くなつたばかり、却つて風を傳ふ妙なる薫が、ほんのりと来て、其の面を打つた、二人の聲は、花の香の迷ふに似て。

堪らず、穿物を脱いで、刑事は跣足で、蹠ると、身體を押して橋詰から、欄干の外へ廻つて、板の端を流の上。

五寸には足りない處を、烏打帽の庇の下に、袖口を組んで押立膝、拱いた腕を支へ、欄の達磨さんを一寸、熱いもの。

摺足の音を忍んで、目ばかり光らし、むくくと尻で渡りはじめた。

固より氣取られるやうな手練でない。首尾よく、二人が右に立つた其の左の欄干の外まで辿つて占めた顔に差出した、聞く耳に、ざぶり水の音。

釣瓶は夫人の手にきりくさり、聲はハタと止む。

話合が着いたらしい、釣瓶は川水を湛へたま、髪すなほな、日鼻立の好い、學生上りらしい(刑事の目に)羽織、袴の薩張した扮装の、三十格好の男の手に渡つて、婦人は夜風に袖を組む。髪は飾りのない、しかし、鬚のふつくりした銀杏返で、帽子を脱つた天窓とや、對丈に並んで、肩を合はせて、早や歩行き出す足音、水の流の音。

(チヨツ。)

舌打を袖で包むで、其ま、蛙で二三間。溢れて一文字が月下に長い、釣瓶の傾くの横さまに見た時、男の、其の左手の腕に引掛つた——外套であつた——持物が、はらりと橋を引摺つた。

第九

あとで見ると夫人が月下に着て居た羽織は、中古ちやあつたが紫紺に、白で細い雨縹の、お召縮緬であつた。其の右の肩がしなつて、今、引摺つた外套の下へ、袖を差入れて捲けて遣る時、あらぬ方を見向いたのが、人なき様子を伺つて、其處で手を握つたやうに考へられる。

憊う云ふことは、黙りするの事で、唯双方の掌へ心が籠るのだ、と看取つて、刑事も拳を握りざまに二足三足あとをつけた。

二人は橋を渡果て、何もものは言はなかつた。同じ姿勢で、橋詰を左へ切れ、筋道に見える、低い格子戸の前へ留まつて、唯葎戸でないばかり、婦人も屈まねば潜られまい。軒の低い茅屋で、表の部は夜だから下してあるが、大な樂書が薄汗平相合傘だの、變なものだの、中にも天狗の面などは、月に俤がうかぶくらゐ。恐らく三十年五十年前の古筆であらう、今時こんな處へ立つて、悪戯をするものはありさうにも思はれぬ。

晝間は其處を店にして、一人住みの婆さんが、墓参りの、花、線香などを商ふ、傍ら、草履、鼻紙など。此の春此の邊へ白首が立廻るといふ噂があつて、夥伴が目を附けた事があつた。此の花屋なども、納戸が怪しまれたものだつたが、何事なく沙汰が止むで、やがて暗夜になる。と、又人魂が出ると云つて、橋向ふへわや／＼と人ばかり。五人七人真夜中まで固まつた影さへ残つたが、

卯の花くだちが降りはじめには、背から提灯の影も消える、丁ど今が間の節で、最う些と經つて、螢の一番が顯れるまでは、蝙蝠を追ふ長棒も、此處までは届かない。

門口で、又言が交はされた。美しい男女が、憊うして口を利く時は、動かぬ姿も薫のする時、花の何となく揺れるやうな氣勢があるのと、視める目には似るのである。

刑事は、弊の移香の、手に取られぬのがもどかしかつたが、生憎身を忍ぶ樹立も隈もなかつたので、橋の外に躡んだまゝ、睨み詰めて居ると、男の手が、釣瓶をばつたり、落した、いや、擲つたと看取られた。

横倒れになつて、軒の下へざつと流れかゝると見るや、怪飛んだやうに、橋へ上つた、男の姿は星の精の飛ぶ如く、欄干の間を縫つて、町の方の、土手の松へ消え込むだ。

裳をすらすら二三間、門口から跡を追つた夫人の手は、ハタと橋詰の欄干にかゝつて、足が留つて、仲上るやうにして、對手の馳走つた方を視めた時、同一其方を見送つて、むつくり頭を擡げて居た刑事は、ハツと心着いて、サンクに腹道になつて忍んだ、蛇の如く長く。

知られて憚るわけではないが、何故憊うしたか、自分にも分らない。恐らくお美波の天命の、然らしめたものであらう、と刑事は後に語るのであつた。

背姿しほくと、お美波は力なげな足取で、差俯向きつゝ元の門口。しばらく寂しさうにイビだが、漸々倒れた鈎瓶を起し、片手で地を掻探るやうに、繩の端を拾ひ取るまで、如何なる時にも其の氣高き、此の世の人とは思はれず、たゞ月に描けるものゝやうであつたが、がたくと格子戸を開けた時は、恐ろしく影が凄れた。世話女房の風采だ。

騎虎の勢、刑事は、其の消えたあとの門口へ密と寄つた。

足袋が冷りと踏込んだは、今の水のこぼれたので、手で掴んで、月明に踵を透かして、泥だらけになつたのに、又舌打しつゝ、びたりと格子に附着いた。恰も其の小店の蔀の樂書の影に髣髴として。

對手は云ふまでもなく、其の夫であらう。刑事が此處で聞いたしめやかに詰らう聲音は、戸の内だけに極めて陰氣で、先刻のが、ほんのりと唇を撫でる花の香なら、これはしんくと眉を敷うて霜夜の露の凍る氣勢。

第十

時間に積ると餘程であつたらう。納戸の話聲がぱつたり止むでからも、未だ立離れることをしな

いで、戸口に附着いた刑事は、引入れられさうな心地がした。

最も、此の人たちに、露ばかり嫌疑があつたのではなく、餘り夫人の美しさに、偶然其の話聲を間近に聞いて見たかつたに過ぎなかつたのが、思はず恐ろしい犯罪の、現場を見る事になつたのは刑事が所謂天命であらう。

あゝ、茫乎して眠氣がさした、馬鹿々々しい、と生欠伸を噛んで、最う去かうとした耳を抉つて然も苦しげな呻吟聲が、納戸から糸を震つて、ぶる／＼と刑事を驚かした。

ヒイと忍び泣きに悲鳴を包むた婦人の聲。昨夜夜あがりの、又雨催ひか、月に暈のかつたのも折から尋常事にてはあるべからず。

(御免)

と刑事は、對手の身分を知つたに、相應に會釋はしたが、格子戸を蹴開く勢。暗がりに馴れた目にも土間に躍込むで何にか躓いて、はずみを食つて、ぱつたり突當ると、襖が倒れる。

一間は陰々とした燈火に、藁の中を透す光景。月も花も穴藏の底に沈むだかと、二人は頭を入違ひに、はたと破畳に俯向き伏した。

瀬戸ものゝ火鉢に、火はあるが、瓦の色に火氣が弱つて、鐵瓶の湯氣も絶々で。

其の鐵瓶の蓋を外して、柄杓が斜ッかけに乗つて居た。火鉢の前に、黒塗の棗の茶入、茶筌が並んで、其處へ突のめつたのは山名藤次。羽織は着ず。慌しい場合なれば、品物は氣がつかかなかつたが、鼠の茶の縦縞の、さすがに小薩張した袴を着て、帯腰の形素直に、角帯を締めた、衣紋がうしろへ脱げて、黒八の袴袴の半襟が見えた。

横へ、前髪を落し合はせて、身體は疊のへりをかけ、眞白な手首で額を疊に擦つけて、片袖胸へ搔込むで、袴と乳のあたりを壓すらしい。脇あけをこぼれて、はらりと紫の散つたのを、腸や溢るゝと驚いたのは、非ず、帯に挟むた鹽瀬の袷紗で。

飛込んだ人の狀に、衝と手を疊に身を起した、夫人の顔はつゝがなかつたが……。

襟首に手を掛けて、矢庭に背後へ引仰向けると、藤次の唇は血を噛むで、俯伏になつて疊についた口のあとは、眞紅な土蜘蛛の形して、堆かりし鮮血。

(婆々は居らんか、婆々、婆々！)

と刑事は、見る／＼天眼に白くなりゆく、藤次の瞳を瞋めながら、どん／＼足踏をして呼はつたと夫人は絲織の細りした、膝を中腰になつて、羽織の紐の解けて居たばかり、袷紗も落さず、襪も亂れず。

(お水を持つて参りませうか。)

善か、悪か、言ふこともうつとりとして居る。

(奥さん。)

と屹と見た、刑事の眼は狼の如く輝いて、

(何うしたんです。)

(はッ、)

と言ふのが溜息のやうで、衣紋の外へ動悸がうつた。驚いたやうに下へつく手が、膝元の薄茶茶碗に觸れたと見ると、片手に藤次を抱いたまゝ、刑事の猿臂は衝と伸びて、稻妻の閃く如く、鋭く、夫人の手を拂ひ退けて、

(觸つちや不可ん！)

と怒鳴つて、

(動いてはならんのだ。)

夫人の姿は絲を抜いたやうに崩折れた。

トタンに呼子笛が、刑事の口で高らかに吹鳴らされると、寂とした川浪に、恰も無人島あたりに

響く、難波船の汽笛の如く聞えたのである。

式の如く、やがて朱筋の提灯が入亂れて、靴を穿つた黒い脚は、恰も根太を抜いた竹の如く、幾條ともなく縦横に一室の間に入亂れて、唯一人夫人の状は、昔語に傳へたる八岐のおろちの前に頸を垂れた媛に背て居た、何時の間にか髪が解けて。

第十一

藝妓まじりに人雪崩を打つて、哄と橋詰へ押寄せた群集の中に、用達から歸つた家主の婆々は、唯くるくると廻つて居た。

家は轟と鎖された。

直に腰紐を打つて拘く處、後れて来た警部の計らひで、腕車に乗せて橋の音、とゞら虚空に轟かして、夫人を將て去つたのである。

輪の軋る音は、真夜中の月の前を、折から立蔽うた黒雲に、遠雷の如き響を残した。

此處に立ち盡したものとさへある。明くれば一國唯是沙汰。

降り出して小止みのない、五月雨の雫と、其の風聞の絶間はあらず。じとくと濕つて來

て、汗するばかり人々の耳に聞えたのは、山名の夫人は、夫を毒殺したと云ふのである。

現場に有合はせた、薄茶を碗に、未だ飲さしが残つて居た。毒は其の中に交へてあつて、刑事に見咎められた時、お美波は其を取棄てやうとしたとも云ふし、又言譯のなさに自分も飲まむとしたのだなども傳はる。

で、此の犯罪には其犯がある。それは毒茶が煮らるゝ前に、夫人が川水を汲みに出た時、豫て打合はせがしてあつたと見えて、恰も橋の上に来て、釣瓶紐に摺れつ纏れつ、もろともに水を汲んだ學生上りの清げな若もの、勿論密夫に相違ない。怪しからざる淫婦姦夫、世の見せしめに其の釣瓶紐で、一所に絞非にして丁へと、口々に喧しい。

尤も湯の中にも毒があつた、最初、其の密夫の手から、水へ投込むたものだである。

一日新聞が號外を出した。其の密夫が捕縛になつたと、否、名乗つて出たと……。満目變動、是如何なるものぞ！ 瀧山澤夫自分で澤、又、澤と名告る人も知つた念持の按摩である。

はッ恐れながら、姦夫は手前で。山名の御新姐が、未だ縁附ませぬ、緋い手柄の時分から馴染めまして、人の女房となりまして後も、繁々深閑に出入をいたし、盲目の便宜には、人目の開も破り易く、首尾よく嬌曳を重ね居りましたる處、山名家分散いたし、お美波は實家方へ返されまするし

又、主人藤次出奔と聞えて遠國仕りましたれば、即離別も同様。やがては表向申入れ、手前宿の妻にもと彼は内談したし居りました折から、藤次事、美妻のために心ひかされて淫ばれ申さず。一の橋の暗の夜ごろ、頼の如く立ち露はれ、實家の居廻りを迷ひ歩行き、もの、便に女房を呼び出し、借もろともに姿を隠せ、一所に逃げずば、殺すなど、附廻しまするため、通れ方なく、一先づ其の隠家へ伴なはれましるなれども、あはれ盲目の手前と申しまするものござりまする故、土地を離れまする段思ひも寄らず。然れば膝突合はせた埴生の小屋、手前忍びまするに屏風の影もない始末、切なき思に瘦せます上、活計とてもない飢死の境遇。旁々内談を極めまして、以前の數寄が猶留まぬ、藤次がもの好みを幸に、一の橋の水を汲みました時、毒を加へましたは私、薄茶手前に託せて一服飲ませましたは彼めにござりまする、恠く成りまする上は、毛頭秘し立ては仕りませぬ。お美波と同罪仰付け下さりませうならば、八裂とても厭ひますまい。

と横木に涙を流したと記したのである。

天地大變、此で長濕氣の梅雨も明けやうと騒いだが、盲人澤夫は、日も措かず、叱り下げられた固より當夜の相手の風采、臍氣ながら其の容貌、刑事が認めて居るのであるから、澤夫を見ると唯一目で其の眞面目顔に噴出したほどだつたが。

豫審判事は、しかし、澤夫の家が、仙丹と號する金看板、先祖傳來の藥種を商ふ家である處から或は毒藥の出處と、慎重に取調べたけれども、何の取留めた事もなく、色情狂め、と大目玉で。

押丁が、

(下りませう！)

## 第十二

此の號外は稍滑稽であつたが、二度目に出た初號活字の報道は、沈着に世を動かした、恰も地震の如く。

一頃東京のが此邊まで大騒ぎだつた、悪三郎とか云ふ一大毒殺事件があつた處から、記者は、第二の大河三郎と標題を置いた。

市を去十里ばかりの温泉で、湯治中捕縛になつた、山名夫人の密夫、即ち毒殺の共犯者は、誰あらう！

此度新に東京から、當地工業學校繪畫部の教頭として就任した、西洋畫家、然も以前は市の貧民の孤兒で、謂はゞ故郷へ錦を飾つた、興津志摩吉である。

思はざりき、俊秀月の如き面の中に、自づから堅忍不拔の色ありとて、其の小影を紙上に掲げ、五日に互る履歴を記し、學生の鑑鑑と稱へ、東洋の花と讚美し、予等爰に相計りて、氏をして市の東丘なる梅林の中に、手づから月桂樹を植るしめむとす。諸子、それは鑑みよ、と絶叫した美術家の、一朝忽如として大悪の淫魔と變せむとは、記者は今や、毛穎を嚙むで唇裂けなむとす、啖、噫、嗚呼、嗟乎と呻くこと李太白に異ならず。

で、事實は恙うである。

毒茶事件の常月夜、一の橋の上で、略其の風采に接した刑事は、事爰に及むで、何條些とも猶豫すべき。假令は目前に影を捉ふるやうな罪人を、一刻の遅延は一生の瑕瑾と、地踏櫛を踏むで、血走つた眼に、やがて其の西洋畫家の、浴衣姿を縛り得た。

證據手懸りとて別にない。唯臆氣に見たばかりを、さて取檢べる、と正に一の橋橋上の客なる由天網免れず、白狀に及むだ、と號して、刑事氏の眼は淨玻璃の如矣。惡魔は縞絲の孔中と雖も其兇影を潜め得ず。見よ、炬の如き炯眼を。毫末も心に疚しきことあらむもの、一見して毛髮堅立せむ是を愼めや、讀者、と又其の寫眞を——新聞に——掲げたが、何故か、刑事の肖像は、可笑く眦が垂れて居た。

續いて此の名刑事の、探偵苦心談と言ふのが麗々と記載された。

苦心ととも唯橋上の客が、微醉を帯びて居た處から、二の橋あたりの料理店に當つて見ると、其日午過ぎから某の樓上で、工業學校の教授連が、新教頭のために開いた歡迎會があつた。

して、其の新教頭興津志摩吉は、となると、飲めない酒を強ひた所爲か、翌日忽ちに病氣届けが出て、今は或温泉に靜養中との事、出先から同僚へ手紙も届いて居るくらゐ、南無三、風を食つたわ、と章駄天二人曳後押で驅附けたまでの談。草を分けるまでもない、有名な温泉宿だから、番地を採す手数さへなかつたのに。

苦心談には、且つ此の刑事が、一の橋の欄干外を渡つた事を、特筆大書して、故ある哉、是ある哉、警察部内に於て、一來刑事、と渾名する飛蝶の如き名人とて、と遣つて、そもく一來たるや昔宇治川の合戦に、と註したのである。

然るに此の刑事が、欄干の外を渡つたのは、生れて以來、其の晩が最初であつたと……何うして出来た渾名か知らぬ、新聞の記事は神聖である。従つて警察は豫言者であつたのである。

物好きな市民の内には、此處が、と雨の中をわざく一の橋へ出張つて、懸賞で、其の欄干外を渡つた。

白玉か何ぞ、と問はむ上臈の、鬼に取られて露よりも脆く消える身も、地獄の白洲では死にはせぬ、針の山に追はるゝに、羅の腰も靡くでないか。

山名の夫人も生命があつた。

係官が問へば應へたのである。されば未だ聲も出るのであらう。たい空蟬の果敢き状で。疾く此處を斬れかしと、雪の頸を差伸べた。橋の上で出會つたと云ふ男を問はれた時は言ひ淀んで、震へながら、

(存じません)

第十三

係官は物和に、

(知らないと言つてはなりません、此處は、貴女の家ではないから。又お秘しなされるのは、其者の爲にならない。貴女が男に出會つた事は、見たものがあつて分つて居る。早く其の名を言ふが宜しい。)

夫人は端麗なる顔を僅かに上げて、

(男の方には逢ひましたが、誰方が知らない方なのでございます。)

(では何うしたのです、其者と何う云ふことをしたのですか。)

(私が一釣瓶汲みました時、傍をお通りなさいまして、咽喉が渇くから飲まして欲しい、とおつしやいます。さあ、召食りますやうに、と申しますと、釣瓶から快く口移しにお飲みなさいました。水が覆れましたから、最う一度汲ませうといたしますと、自分の所爲で苦勞を懸けて、お氣の毒に思ひますと、しんせつにお手傳ひ下さいました。たいそれだけでございます。)

(しかし現場を見たものは、其の間に可なり長い間密談をなすつたと申します。何を話しましたか。)

(はい。)

と言白むた、夫人の臉が薄く染まつて、

(好い景色でございますの、佳い月でございますのと………)

(歌の話でもしたのですか。)

と係官は片頬に冷な笑を含むで、

(それから、釣瓶を提げて歸つた門口で、其男が釣瓶を投げるやうにして、急いで驅出したのは何



ういふ譯です。

(水が充滿で重からう、と御自分でお持ち下さいましたのでございますが、少々酔つてお在でなさいましたやうで、お落しになりました。急いでお歸りになりましたのは、釣瓶を覆して毒の毒だとお思ひなさいましたのでございませうと存じます。)

美波の言に、言ひ知らず情が籠つたやけ、男の嫌疑は尙増した。

興津志摩吉が、温泉で捕縛に成つてから、其筋の消息はしばらく暗闇の中に葬られ去つたが、新聞の記事、街上の巷説、畫家が密夫であることは、日に日に人に確められて、この極悪人と、其の父祖の墓を考へ、石碑を覆したものとさへあつた。

公判が開けると、夫人の前言は、公に、志摩吉の自白に因つて取消されたのである。

新聞は、其の太々しさ、面に睡せむと痛罵したが、美術家は、判官の面を仰ぐ事、恰も畫架に對するが如く……。

當日は午後から、歓迎の宴に侍し、夜に入り、時間は覺えず、月が良いので、唯一人、歸途を町盡へ出て、一の橋へ廻りました。

紺屋職人だつた、父の家は、一の橋近邊の小家でしたから、懐しい處なのです。

酒氣があつて、咽喉の渴いて居ました處へあの、清しい、流の音を聞きますと、何うしても我慢が出来ません。然うでない時も、何爲か、川、清水、泉などの給を見てさへ、飲みたくならず性質です。折よく橋の上で水を汲んだ婦人があります。一口無心をすると、快く釣瓶を貸して呉れましたのを引かぶつて飲みました。冷さは五臓に浸みて、判然目が覺めたやうになりました。臆氣だつた月も透過つて。

爾時見ますと、今ので大方覆したと見えます。婦人が又汲直さうと、釣瓶を投げましたので、これは餘計な手数を掛けたと、思ひました上、一寸見ても然う云ふ事には馴れない人と存じましたから、瀬に引かれてはなりません。汲んで上ませうと、傍へ寄る時、否と見向かれた顔を見ますと……お嬢さんです。

丁ど十年ぶりで逢いましたが、睫毛の濃いのも見忘れません。一晩も夢に見ない事のない方なんですから。

最うこんな事を公に申さねばなりません運命になりましたから、假令無罪の御裁決を請けましても、私は再び人に顔は合せません。

と一度、被告席に目を閉ぢて……。

第十四

徐ろに語り續けた。

單に見忘れないばかりではありません。僕も十年前に少しも變らず、同一十七に見えたのです。唯髪の形が違ひましただけです。最後に見ましたのは、山名へ縁組が、お極りになつて、結納の祝の時、島田に緋手柄を掛けて居たのでした。

私は出入の者の悴でしたが、御最負だつたさうで、破格に其席に列したので。禮服もありませんから、木綿布子の筒袖を着て、片隅に小さくなつて畏つて居りました。

上座の挨拶から、席を起しなげに、令嬢が、私の傍を通つて、座蒲團の外に居たのを見て、  
(敷くものですよ、)

と人知れず低聲で叱るやうに言つた、膝の下へ手を入れたんです。私は固くなつて、それより膝に手を重ねたまゝ座が開けるのを待ちました。

酔ッばらひにからかはれて、令嬢の笑聲を聞く度に、私の其の寂しさと言つてはありませんでした。最うお納め、お納め、と言ふ聲の聞える時分、漸々招扱けたらしい風で、密と私の前へ来て、

(お一つ頂きませう、お分れに、)

と言つたんです。

何故か、胸が一杯になつて、

(お分れなんですか。)

(お嫁に行くんですもの、)

と何氣なしに莞爾しました。

(お嫁に入らつしやると、最う……) と言つて後が出ませんでした。

(名残を惜むねえ。)

と横合から唐突に申した者があります、瀧山澤夫といふ盲人です。

傍聴席は一層耳を傾けたのであつた。

丁ど私の隣に坐つて居て、初めから、頻に口叱言を言つて居たのです。僕の盃に龜裂は入つて居ないかの、焼物を突出して、君句を嗅げ事の、何だ、蛤の吸物か、畜生、など、人事ながら私はハラ／＼して居たのでした。

盲人に毒突かれて、赫と逆せた處を又、背後に立つて居て、背中を敲いたものがあります。

(感心に色氣がついた。は、は、は、と………)

これは出入の大工でした。私の父と悪意な。

私は顔から火が出るやうになつて、獻さうとした盃を持つた切、固くなつて俯向いたので、

(では、お酌を………)

と美波さんが銚子を取りますと、

(願ひませう。)

と盲人が猪口を突出しました。

向ふで呼ぶ人があつて、美波さんは座を立ちました。其の氣勢が、夢枕に立つた神の姿が、遠ざ

かるやうに思はれました——其ッ切。此の間の晩まで逢つた事もなく、途中で見懸けた事もありま

せん。

又逢ふやうな機會には、私の方で避けるやうに、避けるやうに、として居たんです。何故か、其の

人に逢ふ事は、神佛禁断の掟のやうに思はれましたから。

若しうっかりとでも、顔を合はせますと、非常な事が起りさうに、心に暗示がありましたものを

偶然とは言ひながら、一の橋で逢つたばかりで、恚う言ふことに及んだのです。

其の結納の晩の事は、恚る神聖なる法廷で申上げられる事ではありませんし。又嗚お聞きしから  
うと恐入ります。

けれども刑事の方が、お聞取りになつたさうで、美波さんに逢ひましたから、橋の上で少時話を  
して居た。其は何う言ふ事を饒舌つたか、と御尋ねでありますから、有りのまゝ申すのです。

私は酔つて居りました。

而して其時、饒舌りましたのは、唯今申しましたと寸分違ひません、結納の晩の事で。但直接其  
の人に其時の事を話すのでありますから、恚うでしたねえ、彼でしたねえ、と此の過去で、(ありま  
したねえ)を澤山に言ひました事を覚えて居ります。

これは、美波さんが、

(何時お目に懸りました切でしたつけ)

と言つたのに就いて。

### 第十五

月明りに、其人を見ました時は、ハツと思つて飛退きました。何故か、今飲んだ水が毒になつて

其まゝ一命が終るのだらうと考へたのですから。

(おゝ、志摩ちゃんですか。)

と言ひかけて、其時洋書家は苦笑しつゝ、

夫人が私の名を呼んで、

(お懐しいい)

と言はれたので、何も彼も忘れられました。

其處で、其の(何時逢つた切だつたか)を聞かれましたものですから、結納の晩の事を立続けに話しました。

あの晩(最うお分れですから)と言ふのを聞きました時、呼吸が留まつたやうになつて、其までに年とともに積つた一切の事を皆忘れて了つたんです。不孝な兒は、何うして育つたかさへ覺えなくなりました。

習つた事も忘れられました。ものゝ味も忘れられました。それから唯目に見るまゝを繪に描いて、描いたものゝ色が映るだけの事をして生きて居たのです。

實際、夫人に逢ひましても、其の他に些とも何にも話す事がなかつたのです。

けれども是だけは、何時か一度美波さんに逢つて話す機会があるだらう、とよもやながら、是れだけは信じて居ました。人は屹と死ぬものに極つて居ると、同一やうにです。

刑事は何と見ましたか、口を利いたのも大概是、私ばかりで、夫人は多く聞いて居られた方でした。だが、

(すつかり見違へました、大きくなつてねえ。)と言ふことを、二度も三度もおつしやつた。成程其の筒袖とくらべては、不思議に生意氣に袴なんぞ穿いて居たからでせう。

丈はおなじでありますのに。

其に好い外套が出来ましたね、と障つて見ながら、

(お父さんのお慕参りはなさいましたか。)

夫人の言は、大抵此のくらゐなものでした。

門口まで、釣瓶を提げて持つて参つて、最う其處で別れませうと思ひました時、何心なく、

(これからお臺所なन्दございますか。)

と尋ねますと、

(否)と言はれた聲が響つて、しばらく途絶えて、

(主人が、茶を飲まうと申しますから。)

私は前後を忘じ、むらくとなつて、血がくわつと湧いたんです。何故、と聞かれましてもお答は出来かねます。

(貴女のお手傳をしたんです、御主人のなら厭です。)と突然釣瓶を叩き着けて、自分の身體を振飛ばすやうに駈出して丁ひました。

私は結納の晩に、分れてから以來と言ふもの、如何なる場合にも、我と言ふものを思出したことはありません。何も彼も忘れたからです。ものゝ味も分らないやうです。暑さも寒さも人ほどには感じなかつたかも知れません。それは私の製作しました書を御覽になると分ります。たとへば、風のまゝ、水のまゝに柳が動くやうに、筆を持つた手を動かして、自然が使ふ自分は唯、楡の具のやうなものでした。

ですから、口惜しい事も、腹の立つ事も覺えなかつたのでありますのに、爾時ばかりは、腹が立つた。予は美の神の寵兒である、何等の故に、藤次輩の權助になつたのだらう、と思はず切齒をしたのです。人には屈從に過ぎると言はれますほどに、謙讓の徳だけに誰にも譲らず、自分が使ひます女中さへ呼棄てには出来ないうまで、抑壓された生立ちでありますのに。

それから、學校へも参らないで、温泉に参りましたのは、靜に神の禁斷を破つた罪を、身を清めまして待つて居る覺悟なのであります。

恚やうに申しますからは、假令法の上の罪はありませんでも、私は道德の上の大罪人です。一旦口外しましたからは、我から世の制裁を受けます決心、些とも隠す事はないのです。

夫人は夫を毒殺なすつたと言ふ嫌疑ださうです。打明けて此の事を申しますのは、其の人の利益であらうと信じて申上げます。眞實の告白は最良の辯護だと存じますから。

私は美波さんは、然やうな罪惡を犯す人でないと信じて居ります——けれども夫人が、もし實際其の夫を毒殺する意志があつて、私に手を貸せと云ふ相談がありましたとすれば、斷じてそれを肯はなかつたか何うか、斷言は出来ません……………

と興津志摩吉は宣べたのであつた。

しかし、確に毒殺の共犯者と認めるよしの、檢事の論告があつた後、書家の辯護士の申請に因つて喜兵衛と言ふ老大工が出廷に及んだ。

是は夫人の實家方へ古くから出入の棟梁、其の結納の夜、茲に被告の志摩吉の背を敲いて、(色氣が……………)云々と、擲擄一番した爺である。

渠が證人として呼ばれたのは、志摩吉の、當初から夫人に戀して居たことを、其の時の記憶を陳べしむる事に因つて、證據立てやうとしたわけではない。

第十六

志摩吉が工業學校の教授として、東京から當地に着した日、旅店に落着くと其まゝ、父の菩提所へ參詣した。其の足で、昔馴染の喜兵衛おちを見舞つたと言ふ。其の日は、歡迎會の直ぐ前の日に當るから、毒殺の事に就いて、夫人と打合はすなどする暇のない證明なので。

喜兵衛は確に證言した。而して此のをちの口から、山名の家没落の次第を聞いて、志摩吉の餘りの事に歎息をした次第から、お嬢さまは、實家へ歸つてござる、と話した時、もじくしながら、一度顔が見られようか、と言つて其の年をして赤面した事も、正直な爺仁は、場所がらも構はず、此々笑ひながら申立てた。

生憎泊りがけに二三日何處へかござらしけえ、歸らつしやりさへすりや、逢はせるのは譯はねえ。それとも疾く見てえなら、内の孫娘が頂いて來て持つてるだ。知事様や市長様なぞと、一所に大勢で取んなされた何とか會の時の、圓盤の寫眞があるけえ、見せませうか、と言へば、考へ込むで、

否、其には及ばないとて、久しぶりだ、歸のぬたで、ハイ、お持せたの酒一盃、と引留めたけれど早々と歸らしたに違へことはねえ。

爾時貰へました二升の酒さ、ちびりく未だ酔も醒めねえ内に、えらい事がはだかつた、と今度又目を圓くする。

酒屋を検べると、酒の銘も、升も、値段も日も、小賣帳にびつたり合ふ。

雖然、是だけでは、其の日着いた事の、十分な反證にならぬ。表向は其日でも、内々何時の間にか土地へ入込んで、人知れず、夫人と婿曳をしたかも知れない。疑が猶晴れぬ。

ト最う一條、被告の爲に有益な事實があつた。それは、同日の汽車の中で、縣の代議士、何某に逢つたと言ふので。最も志摩吉は其の代議士と、一面識があつたのではない、だけ、一層事柄が確められやう。

早や、停車場も七つ八つ、故郷の山の形が可懐しかつたので、自分の坐つた座を立つて、其の山のある方の、隅の硝子窓から覗いて居た。其の二等室は客が込むで、椅子は残らずぎつしり充満。頃刻して志摩吉が舊居た席へ掛けやうとすると、前刻から、革靴を下に、白い毛布を手を下げて、居處がなく立つて居た、上下大島揃ひで、白の羽織の紐をぶらりと結んで、鼻の低い、大顔の、川

毛の賤げに太い、目のざろりとした大漢が、何時の間にか、占領に及んだばかりか、革靴さへ引上げて、志摩吉の分は落してあつた。

熟と顔を見ると、見ない振して、革靴の口を大きくばつくりと開けて、一つかみ書類を引出した中から、一通封を切つた手紙を出して、捻くつて見せた、上包みに達筆で、……縣代議士、何某殿……と一面に記してあつた。

函嶺を越えると、恙う云ふ事は有勝である。志摩吉は、其の紳士が假令尊い代議士でなくても、別に咎めやうとはしなかつたに。

是見よがしの名は覚えて居た。

辯護士は其の代議士の出廷を望むた。

第十七

代議士は、法廷で、椅子を呉れい、とあつて、肥つた膝を、毛だらけな片胡座。腕を組むで、鼻と目と、四つの穴で、じろくくと被告を見て、

(うむ、此奴、知つちよるヨ)

と肩を聳して言つた。

判事は黙つて頷いて。

却説またお美波も、公判の時に陳べた事は、或點まで志摩吉の言と符節を合はせた。それからである。

宣誓の上、腫に一點の曇もない、清しやかな目を伏せた、睫毛の露を拾へば……

山名の主人藤次は、身の成行きを果敢み、且つ人に恥ぢて、夫人に情死を計つた。お美波は臆んで同意した。此の相談は、前夜花屋の婆が奥の間の隠住居に於て、降りしきる雨の中で極まつたので。

其の相對死の手段は、恚く成り果て、も持ち傳へた、茶の湯の器は不足ながら整ふから、今生の思出に、一つの茶碗を夫婦で飲むで、折からの青葉の蔭に緑の泡と消えるとしやう。武士の切腹より、われらには却つて本懐と言ふ。

翌晩、即ち一の橋の月の夜、家主の婆さんが用達に出かけた留守、いざ、此の時、と磁瓶に湯を沸さうとすると、雨なり、さらぬだに水は悪し、井戸は浅し、柄杓にも及ばぬほど、溢れアのは、山吹の影も映るまい、まるで泥水。

是で火を消すも心持が悪かつたので、直ぐに其の釣瓶を提げて、月の橋を渡つた。恰も可、川音の此處が名に立つて、數寄の茶人は故とも汲む。土地の漢詩人などは、東坡が汲み取いたと云ふ、中峽と稱へて、水の味を隣國に誇る處。

けれども、此の水は、其の半ば、門口で志摩吉の爲に乗てられた。

釣瓶の水の、底にのみ残つたのを見るに就けても、夫人が馴れない水仕の勞を思道つて、藤次は是に泣いたのである。

毒は水から入れて、火鉢に掛けた、湯が沸ると、衣紋を直して、お美波は其處に端坐して、心靜に一手前した。

柄杓を置いて、會釋する時、夫婦齊しく手を支いて、今生の別離を目と目で告げたのであつた。

裁判長は恚う云ふ問を起す。

(刑事が入つた時、被告は客の席に居たのではないか。)

(はい、後で座を更へましたのでございます。)

(何ういふ時か。)

(私が立て、差上げましたのを、主人が二口飲みまして、此方へ參れ、と申して自分の居ました處

に呼びましてございます。)

(其處で座を更へたのか。)

と言ひかけて打領き、

(茶碗には、被告の飲む分が残つて居たか。)

(半分に些と少うなつて居りましたのを、主人が、主人の席へ、ちやんと坐り直りまして、片手膝

につぎまして、定の處へ据ゑて寄越しましてございます。)

(何故、飲まなかつたか。)

(.....)

(被告はなぜ、それを約束通り飲まなかつたか。)

(.....)

(飲まうとした處へ、刑事が行つて、それで機會を失つたのか。)

(否、然やうではございません。)

と特に此の聲は愛々しく優しく聞えた。

(それでは飲む際はあつたのぢや。)



(はいい)

(被告)

と少しく調子を上げて、

(お前が逡巡するのを見て、主人は何とも言はなかつたか。)

(兩手を膝につきましたなり、熟と視めて居りました。)とさしうつむいて答へたのである。

裁判長は屹と見て、

(それから………)

第十八

(其の中に、蒼白かつた主人の顔が紫色になりまして、アツと申して倒れました。私は夢中で突伏  
しましてございます。)

(相済まんと思つてか。)

(何う云ふ考へでございましたか、私は些とも存じません。)

(夫婦で情死をしやうと、主人が申した時、お前はそれを留めたか何うか。)

(一人と申すではございませぬ、一所にと申してくれましたから、留めは爲ませんでした。)

(快く同意をしたのぢやな。)

(最う家はなくなります、兒もございませぬ、何にも便がありませんのに、主人が死ぬ、と申しま  
す。あとへ残りまして何の効もございせんから。)

(什麼心持がしたか。)

(何時も、慙うしてくれ、とつひ手許の用をいひつけられます。其を致します時と、同じ心持で  
ございました。)

(然るにちや、何故其の場合に臨むで、其の薄茶が飲めなかつたか、被告。)

と言を更めて、

(熟と前後を辨別へて申せ。自殺は天命を損ふ一種の罪悪ぢや、と心着いたか。)

(否)と、言下に答へたのであつた。

(注意して、間違のないやうに、いつはりを言つてはならん、何故、急に心が變つた。)

(心變りがいたしましたのではございませぬ、少し時が延ばしたかつたのでございます。)

(誰か門口に来て居らつしやるやうに存じましたものですから。)

(門口に………)

と稍其の威厳ある顔を傾けつゝ、

(何故、其の事を申して、主人も一所に留めなかつた。)

(主人は最う其の時は飲みましたあとでございしました。それに、今死なうと申します時に、たとひ

何でございまして、他所の男の方に、最う一度逢ふまで待つて欲しいとは、申情うございませ

た。)

(他所の……男とは、それは誰か。)

答は途絶えて、美波はしばらくしてから、

(……、ですが是は些とも其の方が御存じの事ではないのでございします。唯私の心だけ………。)

(其の方とは………)

と膠なく疊かけて問詰める。

(其の……志摩さんでございします。)

傍聴席は動搖をなした。嘗て此の事件に就いて、自から共犯者である、美波の密夫である、と自

首して出て、色情狂の宣告を與へられた、盲人流山澤も、同じく其の席にあつたことを、こゝに注意して置かねばならぬ。

(被告。)

と呼んで、慎重なる音調もて、

(志摩さんとは、興津志摩吉の事か。)

(はい。)

(お前が毒を飲まうとした時、何か。興津が門口へ来て居たのか。)

(否、其の方とは分りませんが、誰か門口に居らつしやるやうな氣のいたしましたのが、其の方

が戻つてお出でなすつたやうに、思はれましたのでございします。)

(戻つてとは。何處からか。)

(はい。と美波は聞返した。)

(いや、被告は、志摩吉が戻つて来たやうな氣がいたしたと言ふではないか。)

(それは、あの、何處からとは知りませんが。)

(が、何處からか戻つて居たらう。)

(はい)

と言つて、美波はおろくして居た、

(それは、何處か)

(何、何處と申して)

(既に戻つたらうと想像するには、心當がなくてはならん。其の心當りを言はなさまや不可んのだ。あゝ、お掛けなさい。)

と、椅子を許した。ハタと背後へ崩折れると、兩袖で袴と面を秘した。状を見ろ、と傍聴席で怒鳴つたのがある。公衆は瞳を集めて、其の聲する方を見たが、誰も盲人とは思はなかつた。其の内に醫師が来て介抱した。慥くて漸く顔を上げた、美波の色は、うたゝ蒼白なるものであつた。

第十九

(何と、何と申しまして宜うございますか)

と憚ましげに帯の上を壓へながら、

(唯、あの、釣瓶を打棄つて驅出しておいでなさいましたのが、戻つておいでなすつたやうに思はれましたのでございます。)

(すると何か。何處からか、それは知れんが、志摩吉が引返して来て、家の様子を伺つたんだな。)

(えゝ)

(藤次を毒殺する様子を。)

(えゝ)

(確乎と答をなさい)

と大音にて、

(藤次を毒殺する様子を伺つて居たのか。)

(えゝ)

(被告、氣を確に持たんと不可ん。奥津志摩吉の身の上や。)

夫人は夢が覺めたやうに、判然と其の美しい、漆黒な瞳を睜つた。

(志摩吉は、門口で、藤次が毒を飲む様子を見て居たのぢやな。)

(まあ、) と吃驚した風情で、わなゝと其の肩が震へて、

(飛んだことを御意遊ばします。志摩さんは、何にも御存じはありません。)

(何故、戸外から内の様子を伺ったか。)

(否、怪我にも、そんなことはありません。)

(被告が今申したではないか、外に立つて居るやうだ……と申した筈だ。)

(それは、唯、私ばかり、そんな心持がいたしました。いけななでございませう。)

(何にも約束をせず、又十年ぶりで其の晩はじめて逢つたものが、引返して来て、門口に立つて居さうな心持は、何うして起つた？ 被告！)

と聲が高かつた。

美波は、はらくと落涙して、眸と又胸を壓へて、

(どうぞ、お仕置を遊ばして下さいませ、私が心得違ひでございませう。志摩さんは、可、可哀相に……。)

と聲がうるんで、

(何にも、何にも知つちや居ないのにね。)

裁判長は調子をかへて、もの和かに又尋ねたのである。

(お前が、飲んで、夫と、もに死なうといふ水を汲みに出た、橋の上で、志摩吉に逢つた時は、どんな、思がしたか。)

(……懐しう存じました。)

(否、其の事ではない。)

と卓子に胸を屈めて、前へ出るやうな姿勢になつて、

(死なうとする事に就いてちや。)

(餘り思ひがけない方に逢ひましたので、つひ其の事は忘れて居ました。)

(多時立話をしたと聞いたが、其の間に、情死の事については、何事も言はなかつたか。)

(はい、申します處ではございませぬ。まるで其の事は忘れまして、昔いたした、賑かな、春の歌留多や双六の事が、目の前に見えまして、負けて口惜しかつたこと、勝つて嬉しかつた事、福笑ひの面形が可笑かつたり……したのでございませぬ。)

(分れるまで、些とも思ひ出さなうと申すのか。)

(はい、否、志摩さんが、釣瓶を落しました時、ハツと思ひますと、これで死ぬのか、と氣がつきまして急に心寂しうなりました。)

それからは色々なことを考へまして、これは、志摩さんが、私の死ぬのを、止めて下さるのぢやないか、と存じましたり、最う一度あの、立派にお成んなすつた御様子が見たかつたり、急に最う些と生きて居たいと、存じました。

ですが、支度は済みました。主人も飲みました。私もと存じますと、志摩さんが引返して来て、門にお立ちのやうでなりませんから、せめて、一度顔を見て、と立たうかといたましましたけれど、主人が丁と坐つて居ります、其の内に………)

と言かけて、差俯向いた。

(萬一、それが志摩吉で、其場へ參つて、お前の死を止めたら、何うしたか。)

(否、志摩さんではないのでございます、それは、あの……唯私が然う思ひましたゞけで、あの方は何にも御存じはござんせん。)

(唯假にぢや、假に然うしたらぢや、)

と裁判長は温顔に笑を含んで聞いた。

第二十

(はい、)

と言つて又少時黙つた。傍聴席は寂然となつた。検事は屹と被告を見た、辯護士はじりりと膝を向けた。

(思ひ留ります。)

(思ひ留る?)

と聞返して、

(何、思ひ留まるか。)

(留めてくれました其の方に、罪がございませぬければ。)

(自殺を留めるに罪はない。が、罪がなければ、思留まるか。)

(は……い。)

(被告、お前の夫は、傍に死んで居たのぢや、それでもか。)

美波の答に、辯護士は茫然とした。検事はすつくと起上つた。

\* \* \* \* \*

法廷は、興津志摩吉に無罪を宣告した。

けれども商家が、最早工業学校繪畫部の教頭でないことは云ふまでもない。其の影を隠したのを尙追跡して、土地の、正義團、矯風會などの壯士が、社會の制裁を加ふると稱して、東京までも奔走したが、遂に形影を捉へ得なかつたのである。

山名夫人は波子の罪状は、讀者の想像に任せやう。お美波は公判廷に於ける最後の一言で、然らぬだに纒に黒髪末に一縷つながつたばかりの同情の磐石は、奈落の底に切斷されて、新聞紙は二十世紀の刑法に十字架のないのを惜み、且つ檢事は控訴する(由)と記して、一般の喝采を得たけれども、しかし此の(由)は唯讀んで字の如しであつた。

刑の名は確か然うではなかつたが、公衆は夫人を夫殺しと號した。雨も風もない年も痛罵の怒號は轟々と、白日に且つ暴れに暴れて、土砂を捲き、樹を揺つて居たのである。

時維れ……午前七時、刑期満ちて獄を出されやうとする時刻些と前に、犇々と詰懸けた公衆の中を通つて、緋の法衣に紫の輪袈裟掛けたる、本願寺派の僧侶を真中に、前後に連つて、同勢三十名ばかりの一行が静々と練つて來て、女囚が其處から放たれる、監獄の裏門の高き土塀に添うて留まつた。

是は、報公奉佛と、頭へ韻を踏むた割書で、大きく佛教團と書く、團體から派出された、お美波を迎ひの行列であつた。此の團體には縣の貴婦人の連名が多いのだけれども、さすがに白襟も三枚襲も此の同勢の中には見えずに、一人白髪の切髪で、づんぐり肥つた婆の、鼠の袖の被布に黒のカシミヤの袴を裾長に穿いたのが、緋の法衣と、もに異彩を放つ、此婆さんは、特志で監獄へ入つて罪人を教化などする薩摩辯の達者もので、某男爵とかの後室で、渾名を勳章婆々と稱へる。(今其被布の上に胸にさげた二つのキラ／＼するのが其れで)佛教團の幹事である。あとは個強の壯士輩。いづれも矯風會、正義團の歴々方で、詮するに三派合同の一行が入交つて此處に押寄せた次第は……。

是より先、苦役中に花もしばます、美波が舊の姿で世に出ると云ふ事になると、式の如き毒婦の形骸は焼いて粉にしても空気を汚すと、昔佛蘭西に起つた、フウドルド、サクセッションの其よりも忌はしがつて、正義團の人々などは、假令法律は淫婦を死刑に處さなくつても、社會の制裁は活けて置かぬと、喚いたのであつた。罪人でも人を殺せば、自分も死ななければならぬ事は明であるが、正義の二字に對して死をだも顧みぬに不思議はなからう。

此の勢に恐をなして、お美波の實家も娘を引取るに躊躇した。否、社會の制裁の下に餘儀なくさ

れたのである。

時に佛教團の貴婦人が計らひで、正義矯風の二派の前に、其の生命ごひを種々交渉の末、お美波を監獄の門に迎へて、立處に其の黒髪を断つて、其場から然るべき監督の下に、一生尼寺に推籠めやうといふことに妥協されたのであつた。新聞紙は貴婦人がたの博愛を、口を極めて讃歎した、慥う云ふことは、人に頼まれてするわけではない、其處で、博愛になる。誰も頼まないことをする、其處で、慈善といふのであらう、けれども沙汰の限りである。電車の焼打など、一般に。

## 第二十一

盲人(最う名告つても可からう) 瀧山澤が控込んだ、荒物屋の店から、丁ど其の正面に見える。爰にあらゆる群集を數珠繋ぎにして、一處へ線を纏めて奔と蓋したやうな灰色の門は、透間なくひた〜と鐵の釘隠を鑿うて、天地は長に幽冥の戸を開かず、明暗雨ながら内部は神秘であるかの如くである。

洵や、監獄の裏門は、舊藩の牢の表門を、其まゝ裏木戸に使つたので、雨の夜には、異類異形なる悪鬼の髣髴として露はるゝ、色々の形に土の裂けた一帯の土塀は、冬木立の梢の如き參差とした

忍返しの釘を貫き揃へて、空を飛ぶ鴉の胸も刺し通すべく左右に連り、一方は野原を控へ、一方は次第高に坂にかゝつて、懸濠を抱いて畝つて居る。濠の水は流れずに、異臭を放つ塀の前の深濠には、今も兎もすれば鬼火が燃える。

此處を通らねば行けないから、彼處に曇天の如く空に横はる坂の上の、やがて公園にしようといふ設計のある高原を稱して、森の河原と呼んだ。坂の下口から濠へ廻る土塀の角は、鬼の腕が出て掴むといつて、心弱いのは今時分も一人も通らぬ。

されば此の群集ながら、處がら寂寥して静まり返つて居る。或は毒婦の姿を見てから、怒號の絶叫を發するために、音聲の有るが丈を、蓄積して居るかも分らぬ。

雨がぼつりと來た。

彈丸が落ちたやうに、處々、ぶす〜と小さな砂煙の輪が飛んだ。坂へ懸けて、一幅の黄色な砂が空ざまに吹いて通る。

日は監獄の釘隠を、怪しげに照らして居た。

雨がばら〜と斜に。

風が颯と馳せた。

途端にビイーと、何處のか汽笛が唐突に空天に鳴り出した時であつた。是に度臆を抜かれた群集は、二度吃驚して「電かと思つた。斜にキラリと裂けたのは鐵の如き棧手なる潜門で。蒼き凄冷な光の、人目を射て閃いたのは、裡に籠つた秘密の風の、世の空気に激觸した現象であらう。唯見ると巖の壁の如く、咄嗟に密閉された板戸の前に、夫人の姿は朦朧として描かれた——月の世界は麗人を投げ落した、幽幻の扉は、屋氣樓中の佳人を吐出したのである。

『出たせ、』

と旅商人が飛上つた。

『ど、どれ、どれ、』

と其の肩に掴つて、ぬつくくと立上つた盲人の足は、早や店前一杯の人の動揺む中に、高帽子と、もにふらくくと幽霊の如くふらついた。

『どんな風で、ど、どんな風で、』

と肩に其のぬつべりとした顔を重ねて、耳に口を差附けてしがみつくやうにする、呼吸の臭さに旅商人はふるくと顔を掉つた。

『些と違い。あ、向ふむきになつて、了つた。』

夫人の姿は細りして、氷の如き門の扉に其の前髪をひたとつけた。黒髪の間から雪なす色の濡れたのは、面を蔽うた掌に隠し餘つた片頬である。

末廣がりの扇の紙の、要をさして纏まる如く、一同の足は盲人まじりに、ぞろぞろと門をさして寄合つた。

眞先に出たのは太い杖で、續いて踏出したのは袴穿いた皺びた脚で、直ぐに見えたのは勳章で、切髪の尖が、犬の尾のやうに搖いで出る。

勳章婆々は、大溝に渡した缺けくた石の橋を渡りかけて、其處だけ暗い、押入のやうな門の屋根の中へ、及び腰に前へ屈みながら、太い杖をづつと伸ばした、顔を隠したお美波の背中へ、其のさきを達かせた。

是で引出さうとするのである。此の大慈悲の救主がないと、地獄の口は、再び其の美しい罪人を脚へ込みさうに見えたから。

## 第二十二

緋の法衣は迷惑さうに其の背後に控へた。矯風正義の人々は、續いて一列に垣を造る。



「これ、これ、」

とものを云ふ勳章婆々の頬の肉は、だぶくと黄色に揺れて、

「これ、この杖に縋らつしやい。有難い事この、佛教團で、お前を救うて遣るのぢや。貴い方たちが、如來のお手でお助けなさるゝのぢや、これ、縋らつしやい。」

と喪章の切が、燈明の灯影に揺らるゝ状に、震へて居た、今も同一い、細い雨總の紫紺のお召縮緬の、見るから棺の中から引出されたやうに、影の薄い羽織の上から、

「これ、此方向かつしやい、聞えんか。」

と觸れば縋れさうな細腰をぐいぐいと突くと、是が膚身に應へたか、肩が落ちて、ハッと其の杖の尖を拂ふやうに手に取つて、振向いた。色は抜けるほど白くなつて、いくらか少くなつたらうと思はるゝ黒髪が、薄くなつたけ、束ね髪の商品が好く、眉が一際濃くなつて、膚たさは一層倍した。二か目は目が目に立つほど一體に面瘦せしたが、紅をさしたやうな唇あたり、淡く憂の影がかつて、淺黄の襟の若々と、近優する儂に、群集はハッと美に打たれて、火事場に月を仰ぐ思である。

毒婦と呼び、淫婦と叫び、殺せ、殺せと喚くのが、遠く隔つた方から聞えて、此と騒ぎの烈しくなつたは、一つは雨の、やゝ亂れ落つる所爲であらう。

縋れ、と婆々が突出した其の杖にかけた手を、拂ひもせず、髪を肩にあて、腮を衣紋につけて、打傾いて俯向きながら、襟のか、つた絲織の袷に、白の勝つた茶博多の帯胸高く、翁格子の前垂の藤色の裏ばかり、足の運びにひらくと捌いて、静々と橋を渡る。

お美波は心に、自分のやうな罪人は、懲うした杖に導かれるのが、世の掟ぞと思つたので。

待構へた緋の法衣が、手首に數珠をかけた手で、少し引立てるやうにして、空さまに夫人の手を握つた。

壯士は前後を取巻いた。風が颯と、揉立てられた美波の姿は、藻屑の中なる枝珊瑚珠、荒浪に揺らるゝ状して、激と砂煙立つ折こそあれ。

群集ばらばらと左右に散つて、腫を放てば坂かけて、賽河原を空に見るまで、灰色に赤味のさした、大幅の道一條、廣々と開けたた中、雪を積んで重ねた上に、護謨を塗つて築けるごとき、山に似たる大肉團。

之は、そも何等のものぞ。

鼻を以て堤防を繞らし、耳を以て旗となし、頭を以て楯となし、六尺二又の靴を植えたる、唯見る城の如き大白象、高く土塀に登えた背に、茶の外套の襟を立てゝ、おなじ色の帽を目深に、爪尖

鎌の刃の如き鋭なるなめし皮の長靴を穿いて、横さまに腰かけたる一員の將軍を安置して、坂の上から唯霞雲の徐々として空に漲る状に、次第に此處に來たのである。僅かに其の前脚をづばと上ぐるさへ、此の記事を記した、その、枚の輪廓を越すばかり。

やあく、坂の上の觀世物だ、口上いひが乗つて來た、と雪頬を打つて口々に絶叫する、見物の中を、象の横合から衝と出て、颯と驅抜けた魔物がある。

褐色の布をくるくると頭に巻いて、喧嘩かぶりの如くにした、膝までの蒼い洋袴で、露出の脛は牛の如く、雨に露に塵埃に汚れには汚れたが、緋羅紗の外套、暖靡のやうに翻して、腰に銀色の燦爛たる長劔を横へた、眼の色金色にして髯赤く、鼻は狐の如く高く尖つて、顔の黒さ煤に擬ひ、身の丈六尺に垂たる奇怪なる外來の客。

亞刺比亞人よ、印度人だ、ソレ黒奴が、といふ内に、通魔の閃いて過ぎたと見ると、夫人を引立てた緋の法衣の僧正の、背へ乗込すやうに上から覗いて、天窓から兎一口、豹の唸るが如き聲して喝と叫んだ。

第二十三

ソツと言つて僧正は、頭を壓へて眞俯向けになる。

婆々は尻持を支いた。

夫人の身は倒れぬ前に、横さまに緋羅紗をかけて抱かれた時、象の脚は、側を描いて其處で止まつた。

爾時輕々と、腰をさげられた夫人の肩へ、上から徐ら手が懸ると、象の背へ極乗せた。裳が向ふへすらりと靡いて、姿はしなやかに仰向けになつたが、腰のあたりで背筋が緩れて、半ば起上らうとした、顔は、片膝を胡座した男の膝に突伏した。其の黒髪と、焦茶の筒袴との間に、五指の白さが戦くのである。

亞刺比亞の象つかひは立直つて、手綱を控へた。白象の鼻は、龍の昇るが如く、折から次第に雲かさなる仄暗き空さまに蜿蜒として監獄の門を擡いて、次回興業の開かるべき前途の山を指すのであつた。

譬へば洋海の荒浪を乗切り通る、白き色の艦の如く。市民が怒號のあれ荒ぶ、あらしの中を悠々としてのつしと過るを、怒髮冠を衝く壯士輩も、一指を加ふることを得なんだ。悪く磯でも打つて見ろ、四五十人は立處に踏殺されやう。

二の橋を一杯に、渡果てると、俯向けの帽子を少しすらして、象の背なる丈夫は、夫人を片手に抱いたまゝ、手巾で其の額を拭つた。群集は散つた。雨が烈しく降出したので、夫人の上へも男の肩へも護謨引の黒い布の雨具がかゝる。

準備は此のくらの事ではない。象に振分けにした大貨物の中には、銅釜はじめ、皿小鉢、米、鹽、鐵詰の飲食物、寝道具はいふに及ばず、長棹にからんで、大旗の如く捲き込んで、騎の腹に着けたのは、觀世物小屋にも住家にもなる天幕であつた。

男兒三年間獻身的の經營に、此のくらのなことは怪むに足りまい。夫人が同じ年苦役に間に、海外で獲得して齎し歸つた興津志摩吉の土産である。

晩景・町盡で雨が上つて、地平線上に一顆夕日の紅玉落ち、濕ひたる雲の桃色美しき並木の中、青田の末に海を劃つて、東海道空に入る、浪なす一帯の山脈に、白象は其の白き滑かなる背を並べて、松と松との奥深く、一團の霞となり行くほどに、

何處もかはらぬ戀路のならひ、

雨が降らうが日が暮りよが。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

ホンニ一寸さきや暗夜の世だけれど、  
思や人目のないが増。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

たとひ人目があらうとまゝよ、

二人顔さへ見ればよい。

脚が四つと誹らば誹れ、

姿二つに氣はひとつ。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

死で逆の花借ろよりも、

象の背中の四疊半。

友よ安かれ、家主は俺だ。

たとひ形は鬼でも魔でも、

おなじ思ひのわしぢやもの。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

寝籠揺ぶる子守唄やめば、

寝物語がしたくなる。

よしや他人の睦言なりと、

木の根枕に聞いて寝やう。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

こゝは日本といふ處。

鞭をば高らかに上げつゝ唄ふ、亞刺比亞人の蠻歌は、奇鳥の聲の幽林を鳴らすが如く、磔を返して響き渡つた。

四五町後から結束した八九人、倔強な壯士は、淫婦姦夫を唯置くまじき、正義團の有志である。

一人おかれて、黄昏をとぼくと、影の如く通るもの、知る是れ盲人瀧山澤夫。

村盡れの茶店を離れた、トある鎮守の森の彼方に、清き細流の音がして、雨上りの月光に白銀の如き水の色の前に横はつた處で、一聲高く口笛を鳴らすと、象はハタと止まつた。

鞭が光ると、静に前足を折つて、夕月は一限消残つた雪を照らした。

志摩吉は、夫人を助けて、ともに下りた。

天幕が張られ、調度が運ばれ、焚火が出来るまで、亞刺比亞人の働きは迅速に且つ活潑に、別れたもので。役目が済むと、二人を離れて、象の腹に背を凭せて、よりかゝり、兩足を小兒のやうに投出して、仰向けに月を仰いだ毘の中へ、衣兜から壺を出して、薫高き酒を注いだ。

其焚火に映つた、夫人の顔は、はじめて目のふちに紅が見える。バケツを提げて、のそくと流へ出かけて、志摩吉が一杯提げて立直つた處へ、扱帯を解いて肩にかけて、お美波は腕白く乳のわきに結びながら、急足に追着いて、ト顔を見合せると、前後十幾年の間に、はじめて合つて泣いた。亞刺比亞人は、ごろりと仰向けに寝轉んだが、森の中から種々な頭が出て此方を伺ふと、むくくと起直つた。

ざわくと音がして、壯士の且進み且つ退く氣勢がするのを、苦笑ひして唯其黄なる星の如き一雙の眼を光らすのみであつたが、盲人の顔が、ぬつと出た時、襲はれたやうにすつくと起きて、吃と突立つと思ふと、腰なる白銀の鞘をすりと拂つて、氣を附け！ にキラリと取つた。二人は静に晩飯の支度。

第二十四

『え、魂消た、これ驚かしや不可ねえだよ、いくらハイこんな、片田舎の山國だつて、大日本だあ、象が出て堪るもんか、馬鹿にするもんでねえ。』

と年嵩の一人の獵師は、手にした鐵砲の臺尻を捻くりながら、口叱言のやうに言つた。

一叢茂つた樹立の中から、目の下に、谷を貫いて麓に通ずる、海道筋でも、繪にも物語にも山の中に隠れた、一町の故道を前に、白壁の土藏のついた、可なり大い一軒家が、盆の上に乗つたやうに、四邊を森に圍まれつゝ瞰下さるゝ、恰も狭間の山の上で。

『それでは、何を見やうと思つて、大勢こんな處に集つて居なさるんだ。』

と嘖びた聲して聞いたのは見紛ふ方なき瀧山澤夫で、體裁恰好は、故郷を出た時、其のまゝであるが、彼是五十里餘も離れた處で、日數も大分かつたから、髪が伸び、目が窪んで、繕はぬ白襟のはだかつた下に、蒼黒い胸が、ものをいふ度に動悸が打つて、肋骨に響くのである。

獵師の爺は、其の容子をじろくくと視めながら、

『何をツて怪物よ。』

と言つて、異な顔をして夥伴同士面を見合ふ。夥伴はともに五人居た。くすくすと土を嗅ぎ、ごそくと樹の根を穿つて、時々ぶるくと胴震ひをするのは獵犬で、屈強な地犬に洋種も交つて、

これも五疋。手に手に五條の綱を控へて、五人の獵師はくると盲人を輪取つて居る。

盲人は鼻の頭に、例のせゝら笑ひをして、

『象は居まいもんでもない、獸類ぢやからな。何處に怪物が居るものか。』

『然う言ふがね、然うおつしやるがね。』

と獵人の一人は、癩に障つたらしく突懸るやうに、

『それが居るから、怪物だア、正體が知れねえだ。體が知れねえから恚うやつて眼張つとるだ。』

『どんな事をする怪物だな、はゝゝゝはゝゝゝ。』

と冷笑ふ。と忘々しさうに、又一人、

『どんなツて、そんなこつちやねえ、なあ、爺様。』

『むゝ、己も此の年紀になるが聞いた事はねえ。希代な譯よ、お前様には見えめえが此の真下に一軒昔の莊屋様の家があるだ。』

『むう、く、莊家の一軒家か、』

と目に見えるやうに打領く。

『其處の息子どんが、此の間嫁を娶らしたわ。何が、評判の別嬪よ。若いものさ、皆折を啣へた

てね、まあ、そんな事は何うでも可え。

親類廻りをさつせえて、つひ此の間の事よ。嫁婿がハイ内へ歸つて、先づ其の外所行を脱いでよ、爐ばたに茶一つ飲む間さねえ、小便から出た嫁殿が、其の外所行さ盡まうとすると、敷居一つ其方へ脱いだのが、丸帯から、扱帯から、裾模様の京染の小袖ぐるみ、婿殿は袴だけ脱いだつげな、其の袴と一緒に、綺麗に掃いたやうにお前様、影も形もねえだ。

家内中總立ちになつて騒いだつげ。もの何と、納屋の隅ツ子の大な糠味噌桶中へ、一纏めに突込んであつけえ、可恐い。其の納屋の屋根さ、ちいらちいら風に舞つてるのは、嫁御の紅い襷だア。

それからよ、夜さり寝てござると、二人の上へ屏風が突轉ぶ、枕かひよいと飛ぶ、行燈が躍出す。石臼が地踏踏踏むだ。

親仁様は寝たなりで、どつこいしよ、と土間の藁の上へ持つて行かれる。婆様は目が醒めると、圍爐裏の中に坐つてござる。火がないから可いやうなもの、生命がけの怪物だア。

先祖代々一向宗で、二十八日には精進を缺かさねえ、神佛の崇うける等々ねえだ。畜生めが、狐狸の業だつべえと、戦争に行つて來さした新屋の一等卒どの、それは案え、鐵

砲痕二つある村一番の兄アだ。

鬼門の隅にしつかり構へて、藪の方へ鐵砲さ向けて、さア來い、と構へたと思はつせえ。眠るでもねえにお前様、其の鐵砲他愛がねえ。手の上になりやあるが、紙を乗つけたほどにも感じねえで煙を持つてるやうだつげの、おや、と思ふと、最うするくと隙子の穴から拔出して、春戸さひとりで歩行いて行くだ。』

と目の見えぬものにも町噂に、己が鐵砲を山に這はせて。

### 第二十五

『餘りの事に、村中ひつそりして、咳するばかりになつたが、莊家様が、がたびしは鎮まらねえ。段々に酷くなつて、どさりく屋根さ打抜くやうな大石が打つかる。梁から鋸屑の落ちる。みしみし家鳴震動だ。』

ト氣イ着けるものがあつて、郡の方に、稻荷さげする婆さまがあるもんだで、頼んで來て佛問へ据ゑたが、私等も見に行つけえ。ハア争はれねえもんだ。合掌した數珠の輪が、桶紐が刻ねたやうに額の上へ押立つたツけえ。ぶるくと震へると石のやうに固つた。女の糸の平内様だね。

はい、伺ひます、と問ふ方ぢや恐るゝ低い聲で、手をついて言ふのぢやが、こゝが乗移つた証  
據にや、右の婆さま名代の豊だがね、其の時ばかりは鼻息も聞きつけるだ。

伺ふとか。ハイ。貴様は何者ぢや。當家亭主にござります。亭主か。何歳ぢや、といくつを何歳  
ぢやツて豪え事知つとるね。だけんども、何も分らねえ。怪物の正體は分らん、貴様たち心の迷ひ  
ぢや、と言はつしやるばツかりだよ。

心の迷ひに、鍋釜の踊る法はねえね。

是さなんねえと、今度は神主様呼んで来たが、御幣が御酒徳利の中で踊り踊つたで。やあ、こり  
や、夥伴だつべし。鍋釜さ踊るのとお友達ぢやで、様子が知れべし、と思ふと矢張分らねえ。

別に祟はない。御祈禱はして置いた、六根清淨と申す、六根を清淨にいたせ、とあつて何うして  
これ五臓六腑が洗へるもんだよ。

三度目に来たのは、豪え易者さ。諸國修行さつしやる行者で、何でもクンクンと嗅いで當さつし  
やる。薄痘痕のある四十恰好の、背生帯締めた、先生だつて。

お供についたのが頼母しかつたよ。五十あまりの大坊主だツけ。手ツ首まで俱利伽羅紋々のほり  
ものだね、いらたか数珠さ首から胴へ輪がけにして、背の高さ六尺もあツつらう。

格服だけでも怪物は退散しさうだツけがね。

先生さ、天井の隅から、釜前、縁側など、懐手で、クンクンと嗅いで廻らしつけえ。  
別條はねえの。

御意で、と供の大坊主が言ふだね。

アバタとテキが大分に居るが、と又クンと嗅いで、こいらはしかし業をする譯はねえ、いや、何  
にも祟ではないやうだ、と又言はつしやつた。

アバタが蛇で、テキは魘だとの、えてものゝ、渾名まで御存じの先生にも分らずじまひで、騒動  
は未だに納らねえだよ。

氣味イ悪くツて家にや居られねえで、莊家殿ぢや、昨夜から、外へ出て遠くから屋の棟を眺めて  
居るだね。

其處でハイ私等獵夫夥伴が頼まれて、恚うやつて高い路から森を透かいて狙つてるだ、影でも見  
えたら、遁がしツこねえ、と思ふだに、風もなくツてハア樹の葉も落ちねえ。

形のねえものなつべしが、怪物にや相違あんめえ。お前様、現に恚うつやつて獵夫夥伴の一粒振  
が、手ン手に自慢の犬を引張つて、集つてるのが證據でねえかね。」

「聞いた話でねえ、見た事だア、」と少いのが言ひ足して意氣込むた。言葉の切れるを待つたやうに、ニヤリと尻について頭を擡げて、

「それだから、象を待つて居るか」と聞いたのぢや。」と指を折るやうにして、打傾いて、

「彼は晩方だな。」

「山は陰つたよ。」と言つて、其の容子を訝つた。中には擔いだ鐵砲とともに、首を傾けて居るのがある。

盲人は獨り打傾いて、

「最う、そろ／＼来る、」と眩いた。顔の色は、其の相好と／＼に、極めて險惡なものであつた。

「え、何が来るだ。」と不氣味さうな聲を出したものとさへある。

「否、そろ／＼見える時分だ。逢魔ヶ時ぢやわ。」と杖を握つて、ぬつと立つて、麓の道を考へながら、

「怪物ではないと言ふのぢや。これ、其の業は魔が爲す事ぢや。」

これ、お前たちは知らんのか、其の魔物と云ふのは、眞白な象ぢや。」

「其の象の背に、綺麗な、お姫様のやうな婦女と、三十恰好の男が、抱合つて、影のやうに乗つて居る。」

一同これに悚氣とする、息の氣勢を聞澄まして、

「まだある。緋色の風呂敷やうのものを被つたものが、象の前に立つて居るわ。見えぬか、むう、

お前たちには見えまい。私には見える。これ盲目には見えるぞ。不義、非道な悪魔ぢや、世を亂す鬼神ぢや、人道の敵ぢや、憎い奴等ぢや、不、不埒な畜生、」

とコト／＼と杖で大地を敲いて、躍上つて、白眼で黒息を吐いた。

頭を揃へて、犬が一齊に森を衝いて、背を立て、びやう／＼と吠えると同時に……、今や暮れる、四邊は颯と黄色になつた。

「やあ、象が、」と獵夫の一人は絶叫した。

「見えたか。打て、打て！」と杖を揮つて、盲人は二三尺宙に飛んだ。五人一度に折敷いた。

淫婦姦夫は其處が最後の場であつたと聞く。

記者は人道のために、其の事實なるを信せむと欲す。否正に然あるべきなりと、土地の新聞紙は報道したが、五名の獵師が過失で人を殺傷した風説は、諸國に聞いて露ほどもなかつた。殊に一頭



の巨象と、一人の外國人が附隨して居るのに。  
 但盲人の、其の日故郷を出た切、未だ歸らぬのは實である。恐らく長に續くべき奇怪なる新婚旅行のあとを追うて、睦言を聞いて憤死するまで、今もとほくと歩行いて居やう。

# 頬 白

一

場所を云ふと、大方の人に直ぐ其の誰か解らう、且つ事柄が、聞こえた伯爵家の世嗣の君に因つて起つたのであるから、假に……何某郡……木の葉村として物語る。  
 常磐の松の濃い緑も、木の葉と云ふに異りはないが、ものゝ名にすると何となく、風に、時雨に誘はれて、二葉三葉はらくとするやうで物寂いから、人数も少い、此村の疎在な茅屋にも稱が適ふ。

稱が適ふと言へば、此村の百姓家の一室を借りて、師走の暮だ、と云ふのに、置炬燵へ潜込んで居る男が、釣をするでもなし、玄徳を待つでもなし、禪の法を修するにあらず、昆論方黨思ひも寄らず、六韜三略を讀むでもないから、其處で自から行者不性と號した、是も先づ相應しいが、實は

開業後試験準備の最中。

處で、不性行者が部屋借の家は、木の葉村字袋田の何右衛門とか云ふのだけれども、其よりは疊屋の方が分解が早い。主人は疊職で、都合上停車場寄の町近に別世帯、職人三四人も使ふ處から暮は分けて忙しい、旁々家内中其の方へ手傳に行つて、近頃本家には隠居の爺様萬平と不性行者ばかり。最も本家ながら、此の方を疊屋の隠居所と云ふくらゐ、所有の田地は大抵居廻りの百姓に預けて、耕作の方は、爺様が退屈凌ぎと、御冥伽に鋤鎌を持つに過ぎぬ。

粟は疾くに入れたし、麥は時かすとも可憐い土地の事、葱は霜に白根が長く、大根の雪に埋もるゝ憂もない。羽目板の曲んだのも隙々に繕果てた。日が好ければ背戸の水仙の葉でも弄らうと云ふ爺様。

「豪え風でがんとす喃。」

縁でいもする事か、土間へ蕙を折敷いて、べたんと尻餅を突いた形、膝までの股引、千種色のを投出しに、釣瓶を勝へ、踵を空に引挟み、手細工で繩を直して居るのが、吹き荒ぶ風の中にコトコトく、鳥が嘴を鳴らすやうな。炬燵から氣のない聲で、

「雨になるだらうかね。」

「雪でがんとしよ。何でも時候外れの此の暖氣さちや、吹返しが汐手になるべえ。」

コットンと才樋で釣瓶の底也。

「なあ、旦那。」

「あゝ、」

「お前様、こんな陽氣に炬燵中さ突入つて、雪が降つたら何うするだね。」

「天窓から引被るよ。」

首つ丈潜込んで、吹くならば吹けだが、風は烈しい。野山を掛けて土の波を煽るが如く、時々ぐらぐらと障子が動く。が、南で暖いから、恚う引籠る分には、然して氣に成らず、隨意よ、外れたら裏山の椿の、畦に連々とある葉に翳んで燃ゆるばかりの早咲を眺めやう、背戸の水仙の香も嗅がう、と仰向けに、太平樂の巻物一卷長々と手を擴げて居ると、又一陣杖を搦つて、風は床下で躍上る。

「豪い風だね、」

今度は此方から聲を懸けて、

「曇りやしないかい。」

爺様才地の手を留めて、短い袴の、海綿を押着けた如き顔を上げ、背伸びをし、

「はあ、海の方の空へ、鳥の羽のやうな雲が押冠さつて、風にはたく煽つてゐる。空半分は暗えだがね、根なし雲だ、今に吹飛んで了ふべえさ。」

はたと一つ手を拂いて、山が包むた袋田の奥を透して見て、

「山は晴ちや……が、あゝ、あゝ、風が吹いて吹暗ますで、大い牛が吼えるやうだ。おつ、頂邊の松の木さ角のやうに振廻はす……。」

と熱と見込で、けたましく、

「やあ、旦那、見さつせえ。」

二

「あれ、何うしたや。」

と爺様は、敷込んだ蕙の端へづいと立つと、吹掛ける風を胸で應へて、

「危い、危い、あゝ、ぐるぐ廻る。やあ、山の根際へ打附つた。突のめる。おつと、尻持をつくめえぞ、どつこい其處だ。えゝ、だらしはねえ、確乎さつせえ。」

腰を伸ばしたり、屈めたり、脛を踏張つて夢中で喚く。

騒ぎが烈しいから、

「何だい、爺公さん。」

「何だつて。」

と首を据ゑて、

「まあ、見さつせえ。」

「喧嘩か。」

「先づ喧嘩だ。喧嘩でがすがね、相手はねえだよ。」

「相手なし？ 狂人かい。」

「はッはッ、相手はあるだが形がねえだよ。風と取組んで揉むでがす。あゝ、無理だ、無理だ。其の畦を突切るなあ——横なぐれを食つて堪るかへ——素人だ……それ見さつせえ。用水の落口だ。」

其の畦にや切れ目がある……むゝ、立停まつて思案するがな。」

獨で天窓を掉動かすと、何處かへ丁髷の影がさす、猪首に寝めて、

「引返さつせえよ。これさ、あゝ飛んだぞ。風の勢、身體が宙だ。八艘飛……さて、轉んだ。それだ

から謂はねえ事ぢやねえ。」

『どんな人だ、爺公、村の者か。』

『何、洋服を着た男でがんすさ。』

『銃獵家かね。』

『いんね、杖を持った少え人だが、突當りの出張りの、庚申塚で舞つてゐるだよ。岩さ突乗つた難船のやうだ。』

お刺に譯さ分んねんから田の畦を突切つて、向ふの山の裾へ出やうとするだね。海から正面に吹着ける奴め、庚申塚へ打着かつて、鍵の手に扶込んで吹溜るだに、其奴を、へえ、胴腹へ打附けるだ、堪りごとあるもんかえ——あれ、見さつせえ、丸くなつて窟んで了つた。後へも前へも動き得ねえ、何うしるだあ。』

『何しろ、そりや飛んだ目に逢つた。少い人だつて、向ふ見すな事をして、怪我でもしなけりや可。』

此の際炬燵でもあるまい、と土間に有合せの草履を突掛けて面を出すと、ばつて吹く、朝霜が此 暖氣に融けて、地が濕つて居るので、幸ひ砂煙も立たなかつたが、何うしたのか、何處にも其

の人の姿は見えぬ。

爺様に聞くと、土間へ下りる間だつた。畦の上に居着まつて蹲んで居た件の男は、逆も向ふまで抜切れず、と斷念めたか、づゝと立ち、外套の裾を颯と翻して、取つて返すと、前刻に飛越した用水の落口を又勝負……に片足づゝでは風に應へる身の中心を支へ兼ねたか、越さうとして、一息猶豫ひ、躍上つて礫と蒔田の上へ寝た。其まゝむつくと起きはしたが、くるくると廻るが疾いか、樫の木を根を包んだ稲束の陰へ、今、倒込んだ處と言ふ。

成程吹くわ——砂煙を捲かないから、見た目には然までいはないが、からつと霽れた空蒼う、底に白味を帯びたのが、千切れ千切れに、水田の浅い底に、倒に澄切つた。海の上には、一刷け箕の形した黒雲が、此の袋田の口を、遠く差覗くが如くに山を壓して、輪取つて居るが、最う些と嵐がつて、田の上へかゝつたら、直ぐに其の水に染んで颯と流れて、一面に暗くなりさうである。

又其だけに、際立つて、袋田の奥の山際かけて、村の半ばの朗かさ。眞晝間が透明つて、餘り明さに月夜のやう。

字の出口の右左に、根を据ゑた山の裾は、嶺と南方對合つて、こんな風の時、海の潮の瀧にたつて押浸さうとするのを、防ぎ留めて居るやうで頼母しい。

又本街道は、其の出口を横に通る：西から、東から、山の暮を切つて舞臺へ出る、馬、車、はつ／＼時々自轉車、深張をさした婦人、郵便配達、或は脚黒く裳紅に、ちら／＼と過るのも、皆花道を横に切つて山の裾から裾へ入る。——熊と土手を下りて、袋田を見舞ふのは殆ど無い。但暮方など、一際街道の人通、馬、車、往來の繁くなる中を、其の花道を貫いて海へ落る小川に架けた、近頃新しくなつた——小橋の袂で、ぐい、と轡を廻らして鼻頭を押向けて、村へ入るのも偶にはあるが、一月も居れば孰れ馴染の馬士衆。

茲に袋田と云つて、單に口が窄まつて底一つ、中に、田、畑、藁屋、雜木山を装つたばかりのものではない。袋田の袋は、海に面したのと違つて、奥に又同一形なのが一落をなして居る——真中を仕切つた處が、丁度其の庚申塚で、村の形は、恰も連つた小山の間に、斜に留まつた大な胡蝶に例へられる。

前と奥と袋田の兩翼、庚申塚は蝶番。其も時にこそよれ、紫雲英、鼓草が咲満ちて、菜の花の粉が日中に霞む頃、麓に萩の溢るゝほど、

夏の夜、月の青田の羅着た胡蝶にも見られやう。木の落葉ち、草枯れて、瘦せ山に岩の尖つた師走の頃日、分けて風には、宛として蕨麻の破れて田に落ちた風情がある。風の其骨ばかり、物凄いや空の下に、ぶる／＼と震へて、目に遮る霧の一重の紙もあらず。

と見る／＼、捻切れるやうに、門島の窓が棟髪立つて、青白い毛を引拂らるゝと同時に、田の水が彼方此方磯のやうにはら／＼と逆立ち飛ぶ。岩陰に干びて残つた、真赤な葦の羽の翳るのも、血の繁吹かと疑はるゝ。

『そんなに偃れたり轉んだりぢや、怪我でもしやあしないかな。』

と百年近い古屋根の、蕨葺の重量を支へた、門の柱の些と曲んだのに手を掛けながら、仲上つて見遣るにさへ、不用意では押飛ばされさうに吹き頻る。

『何うだかね、石塊は少なし、田の土あ柔だで、然したる事もがんすめえがさ。』

爺様も氣になるさうで、小さく見ゆる稲束を、差覗くやうにして、

『何しろ、あの蔭さ突潜つたまゝ、良暫時出て來ねえだ。』

『行つて見やうか。』

『可訝かんべえ。是がはい、漁師町なら難船だで、直ぐに救助船漕出すが、田畝で風を食つたに

命綱を投げるでもあんめえさ。

首ぐつたりで、畦道を行つたり來たりしとればとつて、是やい、性根着けろつて、突如天秤棒で撲しつける譯にや行かねえだ。此方ぢや、へい、的切狐に魅された、と睨んだ處で、荒神様は前方にも着いてござる。

お前様も遣らつしやるべえ。用もねえに、其れ何とか爲るとつて、其處等ぶらりくと歩行き廻るだ。今時の少え人だ、どんな丁見があんべいとも計られねえ、大風に乘つて泳ぐだね。風船乗の下稽古かも分んねえで、虚氣素人料見で、手を附けてはなりましねえ。」

と呑氣らしい事を眞面目に云ふのも、しやがれて聞ゆるまで、びゆうくと風が荒ぶ。

「最も雨が交らないから大した難儀もしなからう。石瓦が飛ぶ程でもないから、怪我もすまいよ。

が、あの吹曜しちや飛出せないから、呼吸をついて居るんだらう、何しろ人ツ子一人通らないね。」  
「然れば、出端に私あ居たけど、何時此の前を通つたか、つい氣が着かねえで居たですよ——やあ、豪く吹くわ、何うだね、まあ………」

四

見るから風當りの分けて激い庚申塚は、木の根も暴露に、灰色の岩が俄破と缺けて、缺け目が鋭く刻々立つて、向齒を切縛つた偉大なる白體欄が倒に食込んだ形に見える。草樹が翠の折からでも白々と残つて、こんな風立つた日は言ふまでもなく、袋の口を習々と吹込む時さへ、其處へ絶えず颯々と當るので、差す枝も振を替へ、草の花も面を背けて、木の葉の影も宿さぬけれども、岩が其の灰汁色である爲に、赫と當る日の光も薄曇つて——尾花の靡く月夜などは、風筋を傳ひくぐると口を開けながら轉げ歩行く——明星の光が浸んだ時なぞは一目の鬼の白銀の瞳が爛々として睨むに齊しい。

砂も苔も吹凌つて、岩は昨日今日削立ての、埃も据ゑず新しいが、延寶八年とした一基三尺ばかりの石碑が据つて、正面と左右に三體、庚申の猿が三足居る——所謂袋田の庚申塚。

礎になつた岩の膚の、夢見るやうな自然の段は、昔人がぬかづいて手を支き擦らした痕であらう。向つた者を透見をすかると、目を押へて一體通るものを熟と見て、嘲笑つて、吃と噴出しさうな口をむづと壓へて一體、行過ぎる者を、天窓を抱へて、見送如く、雨の耳を塞いで一體——是を刺んだ小刀は、雑としたものだけれども、三體宛母親の胎の中で、もんどり打つて躍るが如く、石の上に浮出した、其の浮彫の線ばかりは、日にも月にも影を深く、苔さへ蒸して、變化の産毛のやうに見える。

土地の者は、前記延寶の海嘯が、村の奥まで押込んだ、當時人死のあつた供養と、向後の高潮を禁厭ふために、件の塚を築いたと言ふ、然もあるべし。いづれ何時かは、海の潮か、浮世の波か、袋田へ浸入することがなくては済むまい——地の理を思ふに、恰も襲はむとする波のために、天の設せる、緩漫な、稻妻形の塹壕に似た村であるから。

村人の心にか、田の上へか、潮が冠つて、世が變り、畦を一つく、星が移つて、袋田が袋の海となる時こそ、光を放つか、虹を吐くか、庚申塚は奇蹟となり、名所となり、然も、航海の船を覆す難所となるに違ひない。

此の塚は、壘屋の隠居所から、ものゝ小半町隔つて居るが、風が山を押揺る所爲か、透通つて蒼白い風の中に、浮上つて、一段と間近に見ゆる。

が、不思議や、

「ブツ堪らぬ風だ。」

と目を塞ぎ、

「ヤ騒々しい、」

で耳を壓へ、

「埃だ。」

と云つて目を擦るやうである、——風は削るが如く、石碑の面を打挫いで、吹き減らすばかりなので、巖の膚が粉になるか、と村の片翼の空へ掛けて、朦朧として灰色の柱が擴がる。

其處で風に卷かれたため、向ふの山の根へ切れやうとして、中途で稻束の蔭へかくれたさうな、少い人は未だ出ない。

「爺公、」

面をばつと吹拂はれつゝ、急込むで言ひかけた。

「何だね。」

「然ういへば、何は、どうしたらう。今朝あの庚申塚の前に倒れて居たと云ふ……何よ、それ……」

「おう、奥の吉松が許の別嬪かね。」

五

今や庚申塚を見たに就いて、不圖其の事を聞出したが、話の機會が出来たゞけで、思出すまで過

去つた事ではない。

一體、此の日の明方は、海に面した邊より、袋田は一方口、一際朝霧が深かつた。

霧は晴際が大事とか、一齊に赫と上るともに、此の南風になつたので、其までは、野山が呼吸を凝らしたやうに、平時よりも寂然として、雀の聲も籠つたのである。

明方些と過ぎた頃、其の霧の中を、町方の親類へ、煤拂の手傳ひに、早出をして、奥の方から生欠伸の呼吸を圓く、鼻の先へ深はせながら、頬冠りて出て來た、角と言ふお百姓が、庚申塚に差懸ると、路を塞いで、横に寝たものゝ姿があつた。

野良犬かと思ふと、否、襦をこぼれた紅で、婦人だと直ぐに知れた。

是は、と鬢の香を聞けばかり、近々と鼻を寄せて熟と見ると、癪を惱むだやうに鳩尾を照した、白やかな右手を、搦んで前髪がこぼれかゝる額に當て、猿が碑の前に突伏した、が取亂した形で、襟が這つて、青い半襟が、美しい襟脚を抜いて、背筋の曲つた肩が外れて、襦袢の色もほんのりと酔つた風情に霧が掛り、淺黄の麻の葉と黒縹子を打合はせの帯、引かけに結んだのが、細りした腰を落ちて、横狀に地に敷いて居た。俯伏せの顔を見んでも直ぐに分る。

「やあ、吉松どんの姉はん、姉はんちやねえか。えゝ！こりや何うだ。」

とひよいと退いて、きよとんと成つたが、一目散に取つて返した。

「お早う！大變だ。」

と三町、一呼吸、聲をはづませ、吉松が門へ喚込むと、大戸は未だ閉つて、取附きの縁が開き、春を待つため頃日貼替へた新しい障子に、爐に焚く櫛の影が透いたが、其處からは答へないで、

「こりやお早え。」

と横手の厩の前で答けた。是は御注進が大變だと言ふ。姉が家の吉松で、働盛りの若い者、律義で然も稼人、早や草鞋穿きの身拵へ、町方へ賣りに出る焚附の荷を着けやうと、馬を曳出して居た處。

「來せい、來せい、疾く來せえ。こんの姉はんが、」

庚申塚に倒れて居らあ！

「呀！おらあ又、朝飯前に例の柴荷かと思つた。」

と葱の色より蒼くなつて、驚いたわ、魂消げたぞ、と直ぐに飛んで出る角の跡へ、道續くと、引出して綱を解いた艶の佳い黒馬が、ぶるゝと鬘を振つたが、ふゝんと地を嗅いで大くのそゝ、



手綱を前脚の間へ長く、づらりと伸ばして、吉松の後を打つ。

『轉ぶない、確乎、』

と振返つて、突のめらうとする吉松を呼んだ時、角は馬の其の黒い顔が、縦條に鬻を破つて、道中へ出たのを見たが、兎角う言ふ暇はなかつた。

雖然、馬は心あつて飼主の力に成つたらしい。

頓て二人で驅着けると、爾時は最う石の上に取りかきかけて、顔は上げたが重さうに頭を垂れて、兩手を石碑の前に支いて、帯も袖も、未だ崩折れた纖弱い姿。

絶り寄つて、物を言つても、一言には頷き、一言には冠を掉るのみ、恍惚と、直ぐにも目を塞ぎさうに見えるから、疾く内へと、傍から角も勵すので、手を取つて肩にしても、膝が、がつくりと摺落ちる。

『角さん、大目に見てくらつせえ。』

ときよとくししながら、吉松は其の若い美しいのを背に負はうとしたさうな。

六

婦は吉松の肩へ、兩袖を捲いて、其の上へ脇を載せて、前髪を伏せて負背つた。腰を抱いて歩行かうとすると、わい。

『わあい。』と噓して、げら／＼と唇の厚い音の、然も薄つべらな聲を出したものがあつた——二人の小女郎——八十に瀧と云ふ妹どもで、背中の婦には何千疋の鬼に當る、評判の悪たれ阿魔、事こそあれ、と朝飯の味噌汁の椀を引被つて來たらしい、路を塞いで、笑ひつけて、兄者がはつ、と氣を打つて遂巡ぐ處を、

『可笑いなあ、』

『朝つから、わあい、』  
と行る。

馬が心あつて、飼主の手助けに來たらうと言ふのは此處で。

吉松は山の根へ、手を放した婦を、角が介添して、馬の背に攝乗せた。

『嘸よ、頼むよ。』

と言つて、婦が兎もすれば鞍をはづす、力なげな足を、角と兩方から押へて持ち、馬の兩傍に引添つて、手綱は元の通りづるりと提げて、漸との事で内へ運ぶと門の戸は開いて居たが、馬は縁側

へ横づけに、周章で、頓痴たものと見える、吉松が土足の草鞋で、縁の上へ、ひよこりと上ると、  
爐ばたの暗い中に目を白うして居た姑が、生命に別條とでも憂慮ふ事か。

「馬鹿野郎！」

と怒鳴りつけた。

吃驚敗亡、這下りる吉松より、婦の方が其時は最う確で、馬の背で袋を揃へて、すつと反身に縁  
へ下りたが、つか／＼と爐の周囲、姑の背後を通る。

又是に、角が呆氣に取られる中、婦はつか／＼と納戸へ入つて、嫁入りの一荷長持の前に、胸を  
切め、肩を抱いて、身をしめて坐つて了つた。さあ、サシツレの差出口、寄つて集つて評議區々。

漸と口を開かした婦に聞くと、何にも知らぬ、夢を見たやうだ、とばかり。

詰りは、激しく寢惚けた事になるが、其なり納まるか何うかは分らぬ——何時までも見て居られ  
ぬ——煤拂の手傳ひ。角は置放しの馬を厩へ引込んで、

「われえ、好くしたぞ。」

と吉に成かはつて、其の鼻頭を撫でながら、

「姉はんは身體が弱えた。大事にさつせえ。晩げえ、又見舞ふだよ。」

で、町へ出しながら、此家の前を通つて、土間に立つた爺様を見掛けると、十歩ばかりも忍煙を引  
込んだ處を、わざ／＼入つて来て、先を急ぐと言ふ下から、

「まあ、聞かつせえ、それから何だ。」

と馬に饒舌つた挨拶までして聞かせて、

「爺様は、まあ、何と思はつしやる。」

ふん、と幾度も打傾いたが、

「夜さり、はあ裸で手水に出たんべい。」

と言ふ。

「何故だえ。」

「何故でもよ、まあ、行つて來せえ、私らも後で見舞ふべい、又晩に逢ふだ。」

「そんなら、晩げえ。」

と分れて出た。

蚤起きをした爲に、此の話を傍聞きしたのは可が、委しい事を——尋ねるより、實は炬燵に入つて  
茫乎其となく婦の身を打案じつゝ居たのである。

此の機会に言出すと爺様は思出したか、  
 「其事だつけ。お、丁度可い、吉松の姉さまを見舞がてら、今の少い人の様子を見へい。何、こんな風に。私等あ足から村に生拔だ。」  
 と才植を腰にさすと、腕組して、ぬつと廂をはづれた。風の後姿、竹齋に似たる哉。

七

「お、怪我をなすつたな。」

見ると額に血が染んだ——此の人は、萬平爺様が、庚申塚の前で、風にぐらんぐらんとする體を固めて、及腰に畦の稻束の蔭を見込む時、猛然とした體で、飛んで雷の道へ翻然と出て、塚の前で、又ばつと吹立てられた、外套の裾を空さまに絞つて、と思ふと、爺様と摺れ／＼に二人纏れて淀んで立つ中、颯と兩方へ吹立てられて、爺はひよろ／＼と向ふへ行く、此は後歩みに風に乗つて、漸つと塚の前を離れる、と立直つて、隱居家の前の一條路を採む、足が振れて、靴の尖がふわ／＼軽い。少時して葱島の前を通つて二歩ばかり出るや否や、哄と抉つて弓形に煽りつけた向風に吹戻されて蹣跚と成つたが、頭突きに奮發んで、胸を重壓に曳と堪へた、満身の力除つて、身を支へた杖

が内反に、撓んで弱々としたと思ふと、中ほどからはつきり折れる、ト其の拍子に、鏡を前下りに壓へて居た手が外れて、薄色の中折帽が、ふツと空さまに舞上つて、忽ち手あつて叩きつけたやうに、地を擦つて、づる／＼と葱畑を飛んだ來たが、間近に轉がつて、うまく不行者の手に拾はれた。  
 主は、蒼白い顔をして、眉を纏めて見返つたまゝ、半ば手に残つた杖をブーン、水田の上へ投り出して、確乎と腕を抱き、風を突抜くが如く行かうとするので、もし、もし、と其の中折帽を手にしながら呼留めて、此方から持つて出やうとしたので、引返したが物も言はず——否、聲も出なかつたらう——打附かるばかりに一禮して受取らうとするのを、渡さずに……先づ休まれよ、遠慮はない、と帽を持つたまゝ、さつ／＼と引込むと、見るから疲れ果てた少い紳士は、渡りに舟の面色で、一議に及ばず——葉屋の下へ潜つて入つて、莖に躓いて、づか／＼と上を踏んで、失禮、とはじめて口を利いたが、聲が掠れて小さかつた。

其處で、どつかり、框の端へ腰を落した、腫も定まらず、頻に四邊を眺したのである。  
 炬燵で散かつた處より、却つて此處の方が、と思つて、行者は寛いで爐の向ふへ坐つたが、づぶ濡れになつた如く、見るも傷ましい額に血汐！ 踵り寄つて差覗いて尋ねたのであつた。  
 と自暴に横さまに引擦つたか、取つて見ると、掌には然うもなく、中指の腹に朱が染る。

「掠疵です。否、否、些とも痛くも何ともないです。」

と直ぐに衣兜へ手を突込む、未だ氣も落着かないと見え、手端が震へて、思ふやうに成らなかつた。

肩を揺つて、

「あゝ、何うも、しかし驚きました。」

つく／＼言つて、落膽する。

「風向きの所爲と見えます。恚うして居ては、然ほどでもありませんが、一歩出ますと當てますよ。些と落着いて居らつしやい。何しろお上りなさいませんか。さあ、何うぞ。」

と茶釜の下を不用用に搔廻はしながら勸めると、些とも遠慮はしなかつた。

「お邪魔をします。」

と黄色いほど埃を浴びた、靴を氣味悪さうに踏脱いで、

「飛んだ厄介です。」

「其まゝ、」

と外套を脱がさないで、

「臺なし埃で。唯今敷物を上げますよ。」

「敷物なんぞ、幾度尻餅を支いたか分らんですもの。まるで手玉に取られたんだ——堪りやしません。難有う、」

と言つたが、品ある男の、(此の難有う)と軽く言ふのが、如何にも鷹揚のやうに聞こえた。——打解けた體で、

「御免なさい。」

と縞の筒袴を、お平にと、言つた勸めに従ふ。

八

「難有う、漸と人心地になりました。實は何うしやうかと思つたです。」

又四邊を陶して、戸障子があり、爐を扣え、行者が差向つた背後には、衣物の色も映りそうな拭込んだ大戸棚の、天井を支へて輝くのも、風を遮る鐵の桶、世にも嬉しげな顔したが、暗の色が安らかでない。

茶釜の胴を撫で試み、

「大したお怪我でもないやうです。最うそんなに血も出ませんな。」

「唯今御注意があつたんで、然う言へば些とひり／＼するやうだと思ひます位です。自分ぢや氣が着きませんでした。」

「飛んだ御難儀をなさいましたよ。」

「思ひも懸けません、是が親のために、友達のために山越でもすると言ふんなら、張合とあります。其もです、家でも倒すほどの暴風でもあれば知らず、極りが悪い、まるで人間の鋸屑ですな。此邊等の海濱ぢや、此の節は三日置ぐらゐにや吹く風ですもの——馬鹿々々しい、散々です。」

すると、今日ばかり来た人ではなからう。

「矢張此の地方にお住居で、」

「何です……其の、」

と一寸考へたらしかつた。

「海濱に、眞個の眞似事のやうな別荘がありまして、其處へ多日來て居るんです。——貴下、此家が、」

と此時はじめて不行者の状を正視した。

「部屋借でございます。」

と袂をかさ／＼と道つて、巻簾の、些とひしやげた袋を出して、背屈みに吸ひつけたが、いや、我ながら此の體は、餘り風采の好い科でなかつた。

「最う學校はお休みですか。」

扱は准教員と思つたらしい。何うでも構はぬ。

「最う休みです。」

「今日は、ぢや、お一人、お留守居で。」

「否、享年六十七歳になります爺様と二人對向ひで、御覽の通り行ひ澄まして居りますが、貴下、其處でお見懸けなさりやしませんか。奥の方へ、ひよ／＼爺様の参つたのを、」

「はあ、」

と些と上の空——其辭、土間越に其方を見遣つて、空に爐の上へ翳した手の先が又戦く。

「あの、庚申塚の處で、」

「………だ然うです………猿の形は見て居たですが、何の塚だか氣にも留めないで居ましたつけ——昨夜、」

と言ひかけて不開口をつぐんだ、ト顔を見合はせたので、寂しく笑つて、

「逢ひました、逢ひました。」  
と聲を強めて続けざまに言つた。

「然うでせう。」

と何うでも可いやうな返事をしたが、實は、今(昨夜)で、切つて、口籠つて、顔の色の變つたのが、勘からず氣に成つて、つひ釣込まれて虚氣したので。

故とらしいが、何だか元氣づいたらしい態で、

「其です、其のために漸と腰が立つたんでした。風は何も、此處ばかりと云ふんぢやない、宅を出ます時から吹いて居ました。」

街道から折曲つて、此の村へ入りましても、別段急に強くなつたと言ふんぢやありません。背後から吹くんですから、前へくと押出されるやうで、却つてすたく歩行いて、こりや愉快だと思ひました。」

と此處で又一口切つた。

「私は散歩に來たんです。」

分けて言つたが、今の昨夜)で確に耳にした身に取つては、何か仔細あつて、殊更に——でも、くても可い言譯をしたかの如くに聞こえたのである。

然あらぬ體で、

「御散歩は、此處へは最初なんですか。」

### 九

「否、幾度も……と云ふんでもありません。一寸々々、ですから方角の分らない土地ぢやない、今落着きますと、何を、馬鹿な周章たんか、自分にも可訝いんですが。」

あの曲角まで行きますとね、突然哄と吹煽つて、引包んで、庚申塚の岩壁へ身體ごと撲着さうなんです。

引呼吸に成ると、腰が浮いて打倒れさうで、目も眩むやうぢやありませんか。  
二三度ぐるぐ廻りました。

漸との事で、塚の前を前途へ一足抜けたんですがね、風は愈々強くなるし、こりや散歩處ぢやない、疾く歸らうと思つたですが、何だか、塚で渦を巻いてるやうで、今のを思出したんで、路を變

へやうと、それから、畦路を突切らうとした。酷い目に逢つたんです。足許が狭く、兩方が田で、吹倒されさう。身體を横にして、傳つて行くと、ふらくする、非常な勢で、足を掬つて倒すんです。

弱つたのは、溝が一つありました。足を横げりや何でもない一跨ぎツかないんですが、危いから飛んだんです。

他愛もなく、膝を折つて土下座しました。

向ふを見ると。」

と居ながら、背後へ指をさして、

「向ふの山の裾は、路が続いてるやうで、然うぢやありませんね。見た處は傾斜面の畠になつて、ざく／＼苧込んだ大な刺のやうな樹の株がばら／＼あります。其を踏切つた處で、山の腹をなぞへに一ツ傳はないと、向ふ側の路へは出んです。不可ませんよ。どうして、溝一つ飛乗ねるやうな風に、そんな崖の上の路なんざ傳へるものぢやありません。

詮方が無いから、引返さうとすると、最う氣が苛つて、詰らん、何のために、馬鹿な、こんな難儀をする！ 早く氣を弛めて休みたいと思つたんで、焦つたから又失敗りました。

今度はね、』

と言つきも稍物馴れて、

「可厭と言ふほど田の上へ飛ばされました。見事に投倒されました。何を、と對手でもあるやうに口惜くつて……。」

と言ふ、吐がキリ、と動いた、まだ氣は平らにならぬと見える、何か、ものに激して居るやう。

「驚きますな。」

と此方は和げるやうに微笑んだ。

「驚ませう。」

と苦笑して、

「で、何です、躍上つたです、尙ほ悪かつた。

苛々して魂が丁と据らんかつたと見えて、又突轉ぶ。

落膽して、はあ、と其處の稲束に撈りついて、やつと一呼吸吐きましたが、さあ、些と心が靜まると、何故か急に心細くなつて來た。

風は酷いにしるね、恚うした晴天——然も暖い、勿論、私は絞るやうな汗びつしより、……だのに畦にも樹の蔭にも、人ッ子一人、影も見えなからうぢやありませんか。

遠くは唯此のお宅の門と、間を置いて、隣の藁葺の屋根が見えるんです——奥へ行けば、八九軒農家のあるのを知つて居ますが、何にしる餘り寂寥だ。

来る時にも此の村へ入つてから、どんな人にも出撞さなかつた——何か、此の風は、袋田には特別の業風で、土地ッ子は、其を知つて門邊へも出んのぢやないか。

然うかも知れない……處ぢやない。臆病神に誘はれて居たんですから、確に然うだ、と極めて了つて、情なくなつて、荒海に漂つて浮木の切に絶つた氣がする、思切つて、聲を揚げて、人でも呼ばうかと思つたんです。

狂人の沙汰ですな、  
と又寂しく笑つて、

『お内のですか……、老人の姿を見ました。地獄で佛つて此の事だと思つたんです。

あゝやつて村の者が歩行くものを、と始めて夢が覺めたやうに元氣づいた、其の勢で塚の前を乗切つたんです——が、杖の挫折れたのに又挫けて、此の前何うならうか、と思ひましたよ。御

しんせつで助かつた、真個です。難有う、』

と一呼吸に言つたか、強て口語數を多く、勤めて快活に饒舌つたらしい。

十.

何故なら顔色が陰鬱で、聲に力がない、張つた調子が時々弛むだ。何うも風に吹かれたばかりで恚くまで屈托する法はあるまい。癖目かは知らぬが、前刻「昨夜」と言つたのを、追掛けて尋ねられまいため、故と立續けて紛らさうと勤めたのであらう。

聞いて見たくないでもないが、人の秘事、強めるに當らぬ。  
其と無しに、

『それでは、此家の爺様も、しんせつが通つたのです。貴下が惱んでお在なされるのを、甚く案じて居ましたつけ……お知己でも無いのに、此方からお呼懸け申すも變だ。序ながら御様子も見やうと言つて出掛けました。

其が通るのを御覽なすつて、元氣着いたと仰有るんです、何でも老人の爲る事は卒がありませんな。本人今に歸つたら、嘸本懐で喜びませう。御緩りなすつて下さい。



些と横にでもお成んなすつたら何うです。こんな田舎屋、些とも御遠慮は入りません。」

「え、御厄介序に最う些とお邪魔をさして頂きませう。今のに懲りて、外へ出る氣はしないですよ、考へると可恐いほどです。」

一寸目を塞いで、俯向いたが、

「庚申塚ですね。」

急に改まられて、

「はあ、」

と居直る。

「彼處は何ですか。何か、あの塚に就いて、此邊に傳説でもありますでせうか。」

「別に私も聞きません。——最も信仰があつて立てたのでせうし、老人などは通りがりにお辭儀をします。尾籠なお話ですが、あの桶ですね、肥料の——彼を賣下、引擔いで彼處の前を通る時皆が皆でもありませんが、へい、御免なせえまし、と聲を懸けるのがあります。」

無笑ふだらう、と思ふと、案外、謹聴の状して頷く。

聊か圖に乗り、

「は、は、は、扱て、改つて挨拶をする事になりますと、真正面のなんざ、

「や、臭いわ、——ツて、鼻を壓へた體ですね。申戯ですが。しかし見やうに因つて何うにも取れません。其の時、其の人たちの心々で。」

此家の爺様なんざ、能く然う言ひました、而して信じて疑ひませんが、誰か酔つばらつて彼處を通つて、踰越か、つて、手で正面の猿の顔を撫でると、嘔をしたさうですね、口を塞いだのが大聲で。又夜中に、大變な唄を唄つて通ると、行過ぎたのを、背後から「騒しい」とやつた。是があの、左手に耳を塞いで居るんです。

つひ近頃、御存じの曲角の田へ向つて、突立つて、——真日中——怪しからん小用を達さうとして、廢せば可いに、ひよい、と見ると、右手の猿が、一寸手をはづして目を出した、あツと腰を抜くと、一寸、と又目を隠した。其の疾い事……瞬する間。

で、石に刻んだ小刀目の、あの頬邊を膨らまして、ぶツと笑つたやうだつた、と言つて震へたさうです。

何でも、御約束の、見まい、聞まい、言まいは、人間の目に宿つた、ほんの其時だけの像。

人の知らない時は、淵と睨み、あんぐりと開き、兎のやうに動かしてござるのだつて爺様なんざ極めて居ます……、妙でせう。』

と笑つて言ふと、又思ひもよらず、真面目な顔して、

『然うですか。』

と打傾き、然も謙つた風采で、

『貴下は、其を、何うお考へですか。』

不行者は面喰つた。

『えい、』

『何うお考へなさいませう。』

何か傳説は無いかと言ふ尋ねに附いて、澁茶ばかりの響應、風情のなさ。せめてものお伽のつもりで、ありのまゝに應へたが、扱更つて、然も感慙に聞かれては、内の爺様や、今朝来た角を對手なら知らぬこと、風采恁の如き紳士に對して、然ん候は覺束ない。

十一

『否、そんな事より、此の奥の俗にナダレと言ひます。松山の崖の小松に留まつた、白い人形の愛神の矢が、此の風の勢で、何處かへ吹飛ぶのを待つて居ます。一層の事流矢でも可いから、内の屋の棟へ刺さるなんざ、願ふてもないのですが。』

と話を外らして、

『唐突にこんな事を申して、貴下、御覽になりましたか何うですか、赤土山の小松の中に、汽車の窓からも見えますよ。海近ですから鷗が群れるやうでもあるし、長閑な日なんざ、刷で霞を描いたやうです。』

『知つて居ます、ヴィナスの女神の像も建つて居ます。』

『何でも西洋人の持山に成つて、其が彼處を飾つたとか言つて、うつかり人を近づけませんから、下から見ても悉しい事は分りませんが、成程——舶來の天人ですな。然うかと思ふと、五重塔のやうなもの、釣鐘の伏つた處、何うやら二三體羅漢らしいものもあります。』

私なんぞ、素人見ぢや、樹林のまゝで飾りつけて、鳥の聲をあしらつて、まだ家を建てない處が趣向と見えます。中空に髣髴と極樂園を現はして、やがて別荘を築上げやうと言ふ腹らしい。何にしる、中にも高い松の枝へ、あの羽の生へたのを留まらせて、下界を望んで、矢を番へた處

が嬉しいんです。

それに、名さへ袋田と云ふ村のドン底へ、白臘製の龍宮のやうに糶上つたんですもの、村の者な  
んざ、あの矢が放れたら危かんべい、なんて言つて、評議區々だから面白うございますよ。』

『不思議がつて居りませう。』

『人身御供以來の矢ですから。』

これで、一寸話が途絶えた。戸外の吹頻るのは却つて耳馴れたが、戸障子がかたく鳴つて、棟  
がギイと軌むので、夜のやうな天井を仰ぐと、自分言出した事ながら、愛神が其の羽を羽叩き、弓  
弦が且鳴るやうに思ひ遣られる。其時恍惚となつて、

『花火の中から出たやうに、あの色々の像が、風に舞上つたら何うでせう。』

『私なんざ真先に此の村を遁出しますね。』

『え、何故ですか。』

『海嘯か、大地震の前兆でせう——老人に聞きました。昔奥州三厩の海嘯の時は、七日ばかり前か  
ら、空中を煙のやうな色々の姿が飛んで、中には烏帽子素袍を着たのがあり、馬に乗つたのも見え  
たと云ひます。』

『おもしろい事を言ひますね。』

とはじめて心から微笑んだやうだつた、膝を寄せて、

『何ですか、此村に多日居らして、變つた話はありませんか。』

『今のナダレの女神像?』

『はあ、はあ、』

『庚申塚の甕。』

『成程。』

『貴下がお出でなすつた事なんざ、村に取つては變つた事の一つでせう。』

『否、私なんざ、他に……。』

『然うですね。』

『何かありませんか、どんな事か。』

と、憚う胸の底がむづ痒さうに、玉の釦を動かして聞きたがる。

『然うですね、別に……。』

『最近に、何か——』

「昨夜ですか、」

不意に言つたが、これは出来した。

「え、」

と少からず、動する處を、

「何、昨夜ちやありませんが、今朝庚申塚の前に、」

と言ひも終らず、土間の庭が、虎の皮のやうに翻然と躍つて、なぐれに吹込んだ風が染みたか、外套の裾が戦いた。

十二

「やあ、爺公が。最う些と歸宅が遅いと閉出しを食はせる處だつた。時を甚く吹込むから。」

爐の手前から伸上つて、紳士の肩越しに聲を懸けた。

「え、閉めますへい、隠居屋だ、朝つからでも、はあ構えごとねえだで。」

と疾く珍客を見て取つて、愛相ぶりに、がた／＼と大戸を閉めると、一齊に暗くなつて、影法師が這つて蹴り上る。

「爺公、前刻の御方だ、大層何だよ、お前さんの志を喜んでお在だよ。」

「御しんせつに。又お邪魔を、」

と慇懃に言ふ。

「ひやあ、何ういたしやして、茶も、碌に沸いて居なかつたでがんしょうの。えら、不調法でがんです。お前様ね。」

割座で鼎の一脚、背ぐゝまつて、願を小さく一つ振つたが、隙間から射す日の光に、溢を塗つた顔色で、

「直に行つて、ちよつくら歸るへいと思ひましけ、然う行かねえだよ……吉松が許さ、思つたより混雑が大えでね、」

「吉松……。」

慌しげに言を挟んだので、爺様と一所に兩方から熟と瞻ると、狼狽へた調子で、

「吉松ツて……許へ行つたんですか。」

「へい、お民さんてえ、姉はんが、怪體な目に逢ひましてね、今日の明方何ですが、庚申塚の前に倒れてぐつたり柔に成つとるで、馬に載せて歸つたと言ひましけえ、其を、はあ、見舞はうとつ

て行つたでがんすよ。』

『騒ぎが大いつて何うしたよ。姐さんはどつと寝たか。』

『いんね、お前様、どつとでも、そつとでも、寝るやうだと、未だ始末が可えかね、憑物がして』

と腰を掻げた、兩提げの粉煙草を横ちよで捻つて、

『私あ、何でも憑物がしたと思ふでがす。そんではい、氣が荒立つてね、豈乎立つて驅出すだ…』

驅出すは可が、井戸さ突入らうと爲るでねえかね。』

『まあ、何うしたんだい。』

『其がね、憑物が爲せるでがすよ。最もはい評定區々でがんす。中にや可恐しく寝惚けたんべい』

と言ふ者もあるだね。』

私等が行つた時に、近所隣家聞傳へて、どやどや見舞に來をつたげ、孰も知つた顔が爐縁にづら

りと輪になつた。』

門口も人集りぢや。良くねえ餓鬼等、可い事にして、吉が妹の小女郎ども…二人とも學校を休  
みくさつた、内に居りや親どもに我鳴られるが、蝦茶袴穿いたなりで、木戸前見物に口上を陳べて  
けつかる。否さ、旦那方の前だかね。』

私を見ると、お前様、壘屋の爺様ア——言ふけえ、おら、八十坊か、お瀧よ——嫂はんが何だつ  
てな、鹽梅は何うだ、と聞けば、庚申様の罰が當つて、夜さり天道子になつたあよ——何と聞辛か  
んべいがね。

嫂さんは、何でがさ、今朝角が來て言つた通り、長持の前に、可哀げな、前髪をぶら下げて俯向  
いて坐つとる。

看病やら、お檢べやら、婆等は納戸に取巻いて詰懸けた、吉松は此方人等と同じ爐邊に、さよろ  
きよろして、私を見ても分らねえだね、突のめつて、お辭儀ばかりぢや。

何か、氣の毒で、更つて見舞も、はい言へましねえ。

ばかり煙草喫んで様子を見つげが、壘屋の、お前等は何と思ふ、と新屋のが小聲で言つけれ。  
私が串戲半分に、はあ、無え事ではねえ。一寸ら魔物に誘はれたんべい。平時も然う云ふこんだ

けれども、總別此の田舎家の外後架は、あれは良くねえ。藏立てる身上で、家の内へ拵えねえは何  
う云ふもんだ、分けても少い婦人などが、夜々中野雪隠へ出るは間違えの原だよ。お利に、何だ、此  
處等ぢや寒の中も裸で寝べいが、お民さんも昨夜べい、帯締めねえで外へ出たらう。障子を開けて  
寝てせえが、可恐い夢を見る、其の所爲で、魔されたつべい。何でもねえ事、悪い夢を見こられた

が。よくあるこんだ、と取做す氣で、言つたがね、私あ、はあ悪い事を言つけえよ。』

十二

爺様は一寸句切つて、じろくくと二人を見る、白い眉毛を押冠せて、伏目に成つて、掌でボンと拂き、しめやかな煙を吹いて、

『私あ、へい、大え聲でも言はなんだに、次の納戸に、お民坊を取詰めて、膝に乗懸るやうにして、猫背で願を突出して居つけえよ——吉松が阿母……婆でがす、』

と紳士を見返り、

『耳を押立て、聞着けたが、鎌首を持上げて、あ、疊屋の、ござらつせえ。他所行が無ければとつて、裸で寝るやうな此家の姉やぢやござんしない。見さつしやいやし、丁と肌のもの着て居るだとお前様、あの、脂だらけの、臉の白く引轉覆つて、しよぼくした赤目を、嫁に擦着けて、じろり行つた。』

お民さんは身をしめたが、婆め、悪いものを見つけたがね。え、やあ、此の燃えるやうな色氣は何うちやい、主やこれ此の福神は、祝言の晩に着て來さしつて、葛籠に藏つた切のものぢや、一

張羅を大事がつて、鎮守様のお祭祀にも着たことがねえに。フン、フン、魔が魅したの、化されたのと云ふて、皆の衆の目を眩ますだ。主の方が、狐ぢやの、皆の衆、これ、屹と規法を立て、くらつしやい。夢も、夢ぢや、誰か色男の夢を見て、夜中に墜落をしたに極つた。はれもやれも可恐しい。足留の呪咀もせんが、神佛の御罰が當つて、磔の釘を刺されたぢやろ。五逆罪ぢや、と何が早や、聞取法問の利口交りに捲立てると、姉はんは、顔を赤うしたでねえか。

見て居られましねえ。お婆々、然う一概に言はつしやんな。寢魔れ鬼になり、夢中で屋根を歩行く話もあるわ。どんな事で、着物を着替へめえもんでもねえ。お民さんもお民さんぢやが、まあ、此方も氣を鎮めさしやいよ、と誰だか一人、其の膝を掴み立てる婆々の手を放さうとすると、墜落の對手は貴様か。さあ、對手を吐かせ、と其のまんまお民さんの形を引掴んだ、』

『お、お、』

と紳士は思はず聲を出した。

『痛々しげに眉を顰めて、仰向けに咽喉が白い。』

『存じません。』ツタ切緊乎と口を切るだ。

『其は悪い、言譯さつせえ。』

「そんな口を利かつしやると、親類の端くれ、此方人等も黙つては居られねえ。」と男どもが突懸る。「さあ、御主人、第一主が黙つて居る法はあるめえが。」と爐端でも突き始める。や、早く、黒雲蔽ひ重るだね。

「こりや、何うなるべい、と私等も手を束ねて唾を呑んで居たでがす。

すると、はあ、魂消たつてば、聞かつせえまし。吉松が這出して、爐邊から納戸へ橋に懸つて、うちくしつけ、矢鱈棒鱈這面の汗を撫廻はいて、言ふのを聞くと——其が、何と、お前様吉松が爲た仕事だつてば、呆れもしねえ。」

「何だ、吉松が連出したのか。内が辛い、二人で何處かへ遁げやうとつて。」意外であつた。

爺様は雁首コツクリ、

「處が然うでねえだてね。私もはい、愈々解せねえ事になつたが。何うして夜中に内を出て、庚申塚で倒れて居たか、そりや吉松にも分らねえ、第一本人が夢中と言ふ。

が、其のお前様、編神の絆の一件だよ。

何と、町方や、海岸さ、邸方の奥様だ、別荘の嬢様が、紅い裾をひらくさして歩行かつしやる

で、吉の奴あ、へい。」

と小鼻を撫上げ、

「それが羨しくてならねえで、何時の間にか、葛籠の底から掴み出して、密と隠して居たもんだね。汝が懷中で温めて持つて居て、豆洋燈を消さねえ前に、内證で着て見せてくれつて、納戸の隅で頼んだてえばね。

男どもは堪へかねて、皆一齊に笑ひ出した、はッはッはッ。」

十四

「處が、はい、笑ひ事ぢやがあしねえ。哄と笑ふと吉松は眞赤になつた——と見る内に、お民さんは蒼く成ると、長持の暗い上へ、すつと細りした縞の着物の肩が立つたと思はつせえ。ついで、納戸の横縁から背戸へ飛ぶ、此の風だ、ばつと煽つて大波に乗つかるやうさね。ぐるりと、このナダレの下、小川のふちの柳の樹を廻つて、目高、小鮎でねえ事にや飛込めねえ水だもんだて、横手へすたく切れると、わあと言ふ間に、井戸端へばつたり膝あ折つた。

石畳の縁へ掴まつて背中あ波打たして又立たうとする處を、一人、背後から、えんと抱いた、抱

いたけんど、いや危えだよ。勢で打附かつた發奮に然うして井戸端で打坐つたあが、はあ、一思ひで、逆さかに飛と込む處ところよ。

抱だいた奴やつは抱だいた奴やつ、最もう一人ひとりは、下水溜げすみへ踏ふ込んだで、ばつちやり鼠色ねずみいろの水みづさ煙けむりを吹ふいて風かぜに舞まふだに其そのまゝ手てを擴ひろげて、躍をどる體ていで、短氣たんき、短氣たんき——とばつかし喚わめく。

「これ、まあ 飛とんでもねえ、と抱だいた奴やつが背後うしろへ素引しよびくと、

「放はなしてッ」つてお前様めまさまぶるツと肩かたを振ふつたつけ、一生懸命しやうけんめい豪いえ力ちからだ。」

と爺様ぢいさま我がの折をれた面つらをして、

「ぐらぐらと成なつて、あの長ながえ眞黒まじくろな髪かみが、ざらりと懸かると頸筋くびすぢへ搦なんで、へい、生首なまぐしさ宙ちゆうを飛とぶやうに搖ゆぶれる。

其そのの勢いきほひで、振放ふりはなして、今度こんどは、はい、縁側えんがはへ腰こしを掛かけて、せい〜呼吸こそばかり吐ついて居いつけ、吉松きちまつの前まへを斜すか遠かひに戸外かたへ駆出かかさうとすると、小女郎こめづらはじめ其處そこに溜たまつて、呆氣あつに取とられて居いた徒たが、ひやお、と我鳴がなる。

と氣きの毒どくよ、壓おさへても引ひいても揉もみ立たてる、婦つまの袂たもとが—此この風かぜに堪たらんでの、お民たみさんは辛くるかつたか、たち〜と吹戻ふきもどされて、厩うまやの中なかへ遁は込んだわ。

衆あまたな搖動ゆどう々々々々と押寄おしよせたるがね、馬うまの奴やつあヒイ、ンと懸かえ上あつて長面ながおもてあ振廻ふりまわす、がた〜と横木よこぎを蹴ける。

怪我けがを爲なせるな言いふと、こんな時ときは重寶ちゆうぼうよ、直すぐに一人整ひとりをととのを擦すつて飛込とんで、兩ふたツ子こさ壓おさへる、と横よこへ抜ぬける、前まへへ廻まりや、背後うしろへ蹲しゃがむ——。

「厭いや、厭いやですよう。」つてお民たみさんは遁にげ廻まるだ、右みぎを追おや、左ひだりへ喃な、旦那だんな。

婆様はあさまが、べた〜と草履わらじで出て來きた。での、三途川さんずがはが指圖さしずと成なると見みた目めが惨あはれ。尻尾しつぽで拂はふ、四脚よつあしをすたばた荒あれる、秣まがばら〜、濕しめッばい暗くえ中なかぞ、お民たみさんが半狂亂はんきやうらん、裾すそをめら〜と炎ほのが絡かむだ、牛頭馬頭ごづめづめに追おはれる形かたちぢや。

聽やて吉松きちまつが潜込ひそりこんで、ふッ〜云いひけ馬うまの鼻息はないきの下したで、漸やと、お民たみさんを掴つかへた：：最もうはあ理りも非ひも辨わえねえ。死しにてえだか、活いきてえだか、唯ただ恸なつちや大勢おほせの前まへで押搦おしなまつたのが口惜くちげぢやつた、實家まことに對たいしても生命いのちは大切だいじ、然さう手足てあしを悶もえさしては怪我けがするで、縛はらつしやい、と婆殿はあどのが指揮さしづでござる。

吉松きちまつも考かんがえたが、こりや成程なるほど、と合點あつたんしたか、馬うまの手綱てづな引ひかなぐつて、何なにうやら手てだけ引縛ひくくめたがね。



小女の餓鬼め、さつくと出しやばつて、馬の口をはづしたよ。どつこいしよ、と手傳ひの男が、お民さんを引抱いた。

「殺して、殺して、つて身を揉みながら、帯も袂もするくと、厩から仰向けで宙へ煽られて出て來が、風の勢に其の重荷ちやで、抱いた奴あ、ひよろくとなつて、縁側へどさりと尻を支いた婆様よ、何うしべい。」

「其まんま、納戸へ寝かさつしやい、今に御祈禱でもして貰ふべえさ。」

と其處でへい、仰向けに、打倒して、天窓から蒲團を被せつけえよ。

「甚い耻掻きな狂人ぢや、へい、見る物ぢやござらない、最うお見舞にも及びましねえ。」

憎まれ口い利きやがる。

「枕をさせさつしやい、逆上たぐら、尙ほ血が上つて悪かんべい、」と私あ一式の事に喚いての、一先づ、歸つて來たがね、婆奴等は、今に始まつた事ではねえが、お民さんの様子も、へい、合點がいかねえだ。緋縮緬さ脛に突嵌めた事は解せたが、前後の鹽梅が何うも些と取逆氣て居るやうだね、私が目にも何うも、はい、』  
と腕を組んで一人で領き、

『何しろ、魅込まれたに違えはねえだ、村には美しさが過ぎたもんだで、』

十五

『何でも甚太く寢壓れて、夜中庚申塚くんだりまで、地から三尺高え處を、何、目に見えねえもの、手に引張れた……と、まあ思はねえぢやなりましねえね。』

そんで其の塚の前で、明方まで打轉げて、氣さ遠くなつて居る處を、馬の背へ乗せられて、内へ連れて歸られると、わい／＼と寄つて集る。

これぢや、へい誰が注とならずに濟まう。酒に酔つて正體が失くなつて、ひよい、と目い覺める馬の上では、私だつて引轉覆るだ。

其處へ、其の小恥かしい紅え繻絆の一件だで、いや、泣くより笑ひ、氣の毒な中にも腹筋でがんです。野郎どのが懷中に持つて居て、お民さんを頼んだ圖が思はれるでねえかね、發頭人は男でも、婦人は受身ぢや、満座の中で赫となつて、氣が狂つたに違えねえだよ。

豫て病身の處へ、お前様、息も精も續くことか、連枷で粟を拂くつても、優しい男が對手でねえ、婆殿が肌脱ぎで、五十年來煉へた腕ぢや、小休みせず、びしりと行る。堪つたらんけえ、鍛冶

屋の小僧でも向櫛ちや音を上げるだに、あの又袂團扇で、小糠をばたくと煽ぐたつても、旦那方の前でがすがね、左の手で使ふやうな見た目の樂なもんでねえだよ。

植附けだ、田の草取か、それ、風が吹く、麥が溢れる、雨が降る、稻穂が落ちると、びしよ濡れに成つたり、空風に吹かれたりよ。時へ鶏を追込むたつて、十羽上では一仕事ね。

合間小間にや洗濯、張物だ、繕だ、聞かつせえまし、如何な事でも、三十年目で、姉はんが始めて夜具の裏返をしたと云ひます。

で、其に又小姑めが大概の不可かい。まだく、茲に面割なは、最一人の弟だね。此奴が名代の極道で、兄哥が羊なら狼ぢや。血氣盛で飢えた奴が、あの美しい嫂と一ツに住んで、村中の嫌はれ者對手が無えだけに始末が悪い、お利に縁工場の職工だよ。

が、方便なもんだてね、此奴夜明の三時に起きて、役所へ通つて、夜も遅くてねえと歸らねえだ、些とは息が吐けるけんども、其代りにや、退場を待つて熱い茶を沸して置く、夜中の二時にや、最う起きて、飯を炊く、辨當拵へ、これが不殘婦の手沙ぢや。年に一度も寝忘れて、出掛けに冷飯でも食はしますかい、茶漬をがつと口に含んで、其處等へ飯粒の霧を吹くだね。

此頃は夜業があるので、時々工場廻りの安宿へ泊るさうな、昨夜も今朝も居なかつたよ。あの騒

ぎに、居合はせて、奴が厩へ追込んだとして見さつせえ、あの眞白な嫂の腕さ、引捻つて、生血を出さずにや濟まなかんべい。

可恐しい。

そんな、こんなに氣い使つて、心が弱つて、體の疲れて居る處ぢや、魔も魅すづらあ、土氣せねえだよ。

さあ、取逆氣た、と成つて見ると、醫師の手ぢや駄目よこんだて、酷く、はい、暮らねえ内に、瀧へ浸けるが可かんべい……と——』

『瀧へ、』

と言ふ紳士の聲は急込んだ。

『瀧、瀧とは。』

『御坊の瀧——此の山奥に、へい、寺があつてね、其の崖を落ちてるだ、から人間界離れた處、唯さへ氣が寂と静まんでね、其の一軒家の御坊へ宿を取つて、巖を削つた石段から抱下しては、病人を瀧壺へ浸すだよ。』

澤山は來ましねえが、それでも、はい、夏向は二組三組、御坊を宿に取つて、養生に來て居るだ

から邊鄙で食へるものも何も無えから、稗の飯に味噌汁ばかり、自然と其の、附添ひのものまで精進に成つて、御利益があるのです。

けんども、はい、暴れる奴を引縛つて、瀧に押浸すだで、天窓から剣だね、私も遠い縁類の石病に頼まれて一頃行きつけ、夜中には尚ほ利くちゆつて、裸身にして高い崖を引き下ろすだ、さやつと言ふと瀧が颯と懸つて、眞蒼なお月様に絡んだ處は、八寒地獄劍の山だで、や、一日で逃げて来たよ、思ひ出しても悚然とするだあ、

「が、そりや夏に限るだらう、此の寒空に、まさか、お前、」

「否、お前様、逆せ上つた當人にや、火も水も分ちはねえだで、客な婆々だ、衣服さ引刺いで、あのまんま胴縛りにして浴びせせいよ、あ、其を思ふと、堪んねえだね、」

「爺さん、」

と客は屹となつた。

十六

「實に飛だ我儘言つて、爺さんを酒買ひに出して遣つて、貴下を差置いて、怪しからん出過ぎた事

を——無禮な奴だ、とお思ひでせう。

其に、爺さんだつて、内の隠居です。一家の老人を小使ひに使ふ……、私今、赤まんが酒を買つて来て下さらんかつて言つた時、老人に妙な顔をされたには、冷汗を流したです。」

と尚ほ其の額を拭ふのであつた。

「御心配には及びません。失禮ですが、何か内々で私に御話でもありさうにお見受け申しましたか  
ら、」

「あ、目顔で知らせて下さつた、知つて居ます。」

「爺様も何うか其の心を得て出て行つた様子です、御遠慮はありません。」

と言ふ内に、頻に心の急ぐ風で、今金を渡して、其のまゝ膝の上に摺つたなり口の閉いて居る紙入の中の、挟んだ物から、見得もなく名札を取つて出して、慌しく又押込んだ。

此の時知つた名は言はぬが、伯爵家の世嗣の君——何う云ふ因縁だつたか、奥の袋田の其の吉松の背後の山一つ買占めて、不思議な女神像愛神などを、すく／＼と据置いたのは此の伯爵家だ、と一頃甲乙に言傳へたのが、つひ頃日になつて、否、違つた、何某と言ふ西洋人だ、と漸と分つた：其の家の此が世嗣……。

此の日の様子は、争はれぬは品格ばかり、容子も風采も散々で、關ヶ原の戦ひ敗れた浮田中納言秀家卿野武士の宿に潜んだ姿、雨に惱んだ人ならねども、錢參らせたき風情である。

此の時血が颯と顔に出た、額の疵が燃えるやうに殷紅の色を呈したが、

『何うぞ、何うぞ……願ひます、此のまんま私を縛つて下さい、』

『……………』

『縛つて、而して、引立て、吉松ノ許へ連れて行つて、あの、お民の繩を解いて下さい。一生のお願ひです、歎願します。』

と太く激した状態で、思はずじりりと寄つて来る、此方はどつかりと腰を落して、

『まあ、氣をお鎮めなさいまし、解りました。仔細がおあんなさるんでせう。が、貴下は最う前刻から何うかしてお在なさる。不躰ですが、氣を上つてお在なさいます。』

でなくつて、幾干猛烈に吹けばつても、此の位な風に、貴下、躓いたり、轉んだりなさるつて事はありません。

御覽なさい、怪我さいて居るぢやありませんか。

始めから然う思ひましたが、まるで顔の色なんざ御病人だ。今にも倒れていもお了ひなさるやう

な御様子です。其に太く疲勞して居らつしやるやうだから、時があれば、茶のかほりに一口も清涼劑に差上げたい、と思ひましたが、御覽の通りの體裁で、其も生憎。

ですから差出たやうでしたけれども、爺さんには、葡萄酒の良いのをつて然う言つて遣つたんですよ。

今に歸りませう。他に聞くものがあつてお可厭なら、何うにも成ります。酒でも飲つて確乎なさ

い、』

と鐵火箸をぐツと灰にさして、

『一體何うなすつたと言ふんです。』

『は、』

と引呼吸に落膽して、

『お茶を一口、』

『召飲れ、』

ぐツと干し、

『あゝ、今になつて動悸の甚いのが分ります。』

と胸を撫でやうとする、其手も据らず、押し返らして、膝を搦んで、『お民は、そんな目に逢つて、何うして居ませう。』

十七

此方は故と事もなげに、

『大丈夫、親類も附いて居れば、人目もあります。如何に邪慳だつて、打ちも撲きもしはしますまい。其に、貴下は然う仰有る——どんな事情だか知りませんが、狂氣扱ひにしたのは、勿怪の僥倖ぢやありませんか。』

と宥めるやうに云つたけれども、其もよくは耳にも入らぬ様子で、

『瀧へ、其の瀧へなんぞ連れて行かれちや大變です。』

と寒さうな身震する。

『今や直ぐツて事があるものですか。又去來となれば、お民さん常人も、事實狂人でないことを證據立つて見せませうから。』

『しかし、しかし、聞いたやうな様子ぢや、單に扱はれるばかりぢや濟まないで、眞個に氣が違ふ

かも分らんのですよ。

ねえ、何うか縛つて引立て、私を彼處へ連れて行つて下さい。』

『飛でもない事を、引立てるのツて、は、は、』

と何がなし笑つて見せて、

『申戯にしました處で、行がりの事は兎も角、今、貴下が、其の亂脈な中で顔をお出しなすつちや、第一御身分に、』

と皆聞かないで、これは又潔く薩張としたもの言ひだつた。

『否、身分なんか、身分、若しあれば名譽だつて家だつて構やしないツて、あの婦にも言つたんです、私だつて實際決心して爲た事です。勿論、近頃父が亡くなつて、家でも何でも、私の自由になるやうになつたんですから、——私馬鹿ですから、學校も碌に出来ず……此の海岸の別荘へ怠けに來ちや、網なんか打つて歩くと、其處等の漁師等が、通掛りに春の中を覗いて、鯨や鯛の滿と漁れるのを見ちや——殿様は御前だが、若様は漁師だ——つて笑ひました。其の通りです、眞個なんです。』

罷違へば漁師になる氣で、あの婦を連出したんです。』

言葉はしどろで、取留めは無かつたが、其の一大事は能く聞こえる。

『お進出しに成つた。』

『……………』

とさすがに俯向く。

『昨夜！』

『實に……………』

扱こそ(昨夜)の意は是である。

『まあ、何うしてね。』

と思はず隔てもなくなつて、此方も眞顔に摺寄つた。

『一所に馬車に乗つて歩行かうと言つて。』

『お約束が出来て。』

『え。』

『ぢや、豫てあの婦とお知己で……………最もお知己でなくつては、こんな事にも成りますまいが。』

『知己……………知己つて言や知己ですが、何も前方が知己と言ふんぢやない——んです——私の方で、』

無理に知己にして丁つたんです。

ですから昨夜の事なんぞも、決して婦から進んで出たんぢやありません。爲せたんです、強たんです、強請つて、無理に誘ひ出したんです。

ね、ぢやお民に罪はないぢやありませんか。其を婦ばかり縛らせて置く法はない、助けて下さい私が皆背負つてるんです——婦に過失はありません。』

『お待ちなさいよ。然うして家出をした上は、罪が無ければ無し、あればあるで、何ち道、貴下ばかりの過失と言ふんぢやありません。』

貴下にも罪があれば無論婦にもあるんです、婦に罪が無いなら、貴下にもそりや無い。

何しろ、緩りお話をなすつて下さい、お心置きなく、可うございませうかね。』

と熱心に言つて、頷かせて、

『而して、一所にお連れ出しますつたのが、可訝いぢやありませんか。お民さんは今朝明方齋の中に、一人で庚申塚に倒れて居たと言ふんですよ。』

すると、何う云ふ事になつたんでせう。』  
手の汗を拭ひながら押揉んで居た半帽を、はたと落して、

「あゝ、茫として私にも分らないで居ました。恠うです、まあ、聞いて下さい。」

十八

「最初、此の袋田の事を知つて、遊びに来ましたのは、去年の夏で、其時は朋友と三人連れ。

打明けてお話しするのに、耻も外聞もありませんから申しませう、遊びに来たつて、言へば唯散歩にでも参つたやうで穩ですがね、其の實は、奥へあの美人を見に来ました。

私より前に朋友が見つけたんです——何でも、私の別荘の庭へ、草取りに雇はれて来た時に見たんださうで、恐らく此の邊ぢや見懸けないと言ふ。

例の誇張したらうが、何も損はない。行つて見る、行つて見る、處は知つてるかつて聞くと、其の後、千菜物の籠を背負つて、町の八百屋へ賣りに来た處を、晩方見着けて、林檎を買ひながら、其の八百屋で家を聞いて、お目が留りましたか、へ々々、とか何とか言はれたさうで、丁と詮索は行届いて居る。で出掛ける、構ふ事はない、とづかづか此の別世界のやうな、袋田へ侵入に及びました。

崖に山百合だの、野藤だのが咲いて居ました、そんなものは何うでも構はん。

今度の事ぢや、お話の中心點にでもしなけりやならないやうな、あの庚申塚ですな、其さへ有るんだか無かつたんだか、點で氣にも留めないで、のそく其處等をのさばり散らして。

唯暑い時だつただけに、奥の方から流れて出る、前刻私が憶みましたね、あの小流が、今のやうに水が涸れては居なくつて、露草の暗い中を、さらさら流れて、處々白くなつて、蒼い花の上を越して、澄切つて走るのが、可い心持だつたんです。

裾と裾を、山の下を挟り抜けるやうに、づんづん奥へ、斬塚だ、斬塚だ、天彼の美人をして堅壁ならしむるぞ、なんて憚からず汗えながら、空のかつと開いた大な洞穴へ入るやうな此の袋田を、頓て麓で包んだ底に着いたと思ふ處で、右を見ると、四角いやうな百姓家があつて、大な柳の樹が一本、鬱然茂つて、藁屋の棟を包むやうにして居たのが、何だか奥床しくつて、美しくつて、然も一寸意氣てんですか、私たちにや其の粹な、當世なやうに見えました。

誰の目にも心持は同一もんだと見えて、其の後聞くと、可哀相な事があります。お民は、元來身體が弱い、力業は出来ないから、暮しは何うでも、居職か、勤人——百姓家は逆も遣り切れない、と實家でも云つたのに、媒酌人が、百姓だつて、土堀りを爲るぢやない、田畠は作男に任せ切。内ぢや別荘の出入をして、旦那方、と膝組で暮すと言ふ——お民も縁談のある家は、どんな様子

だらう、と實家の妹を連れて、密と、遠くから今の吉松の家を覗くと、其の柳が蕭々と、優しく涼しく茂つてるのを見て、あゝ、是なら、と安心をしたつて言ひます。

毛桃や、柿、李の植つて居るのより、其の柳の方が、何だか妙に、住んでる者も心意氣が美しく見えませう——……。

楓の大木は庄屋の門、柳の古樹は里のお茶屋の軒に枝垂れる、と何となく思はれますもの。

如何にも、小作に百姓さして、大分小綺麗に住んでるやうに思はれて、それで縁着く氣になつたんですつて。

浅墓な……と云ふ私達か矢張、其の柳を見た時は、床い氣がしたんです。最も其の柳の樹を目印

しにして來たので、豫て此が其の美人の家だと思つて、其がために懐かしかつたかも知れませんが。

其の、月明に瀧を見るやうな涼しい緑の靡いた中に、自然でも留まつた風に、前刻もお話しの、

あの女神像が、霞もかゝらず——ちら／＼見えます。

居るぞ、と一人低聲で云ふ。私は門口から覗きました、葵屋の下は薄暗いので能く分らん、と

うまい事を考へた——

「御免よ、裏の、あの雪見たいな人形を見させ〜くれ」つて。たかゞ邸に草拵りに來る對手だ、遠

慮はしません。傍若無人に、土竈を築いた土間を、三人で、向ふの春戸へ突抜けたんです——其の柳のある許へ。」

十九

「お聞きの通り、貴下、其の亂暴さ加減ですから、外に誰が居たか、そんな事は些とも氣に留まつちや居りません。」

「何うぞお掛けなさいまして、ひどい處でございます。」と言つて、春戸の縁へ、壁にして、埃を拂いて、持つて來て、莫塵を敷いてくれたのは其の美人。

「さあ、掛けたまへ、構やしない、と連出した奴が、案内者だけに心得た顔で世話をする。」

腰を掛けて、可いな、實に美麗なものだなんて、其の柳を見透かして崖の女神の像を高慢に仰ぎながら悪戯たんですが、氣が着くと、向ふの爐端で、薄汚い婆さんが、茶碗を仰向けて並べたから「歸らう、と私が一番に飛出した。」

昔あつたと言ふ、毛見の悪役人が、検査係と言ふ横暴な風で、どや／＼と三人、土間の竈の前を又通つて、舊の門口へ出る、とでした。



跣足で、其で擲で、恚う、』  
とカフスをぐいとかけつゝ、

『此處等まで——こんなんぢあ不可い、』

と獨言のやうに半ばを言つて、手首を握つて、

『細いが、肉の可い、すきりとした腕を出して、何か庭に干したものを取込むで居る感でした、

「おや、お歸りでございませうか、」と姉さんかよりの手拭を外して、ちやんと挨拶をしましたつけ。

はつ、と言つて一人、あわをくつた體でお辭儀をした。此の男なんざ、餘り美しいので、思はず

敬意を表したんだ、と言ひます……途中の話ですが。

五歩ばかりで、何となく振り返ると、其時、いま取つた藍染の手拭を口に啣へて、俯向いて、ぐいと

と腕を揚げて、被ぐやうに襟脚を撫で、居、薬屋越に柳が纏れて、夕暮の風が戦ぐ、水の音も聞こ

えしました。實際美しかつたんですね。

處を、古風な、一人、突然、ドシンと私の脊中を撲つた。婦が見たらうと思ふから、極が悪くつ

て駈出しましたよ。

美人だ！が、あの、繕はず、飾らず、見得もなし、跣足もあゝなると形而上の風情がある。靴を

穿いた女神の像と言ふのは少い。處で、何となく髪を帯びて、些と陰氣な、其も品に成りはするが、  
物寂い處は少い婦だ。其で、貞操……、孝行、一村の賞者な奴が、盆踊の時、代官に惚れられ  
るか、鷹狩の殿様に見染められて、權威と、壓制で、奪取る、いや奪取られて、一悲劇が出来やう  
と言ふ人相だ。人相が然うだよ、さあ、其時に及んで、家のために身を殺すか、其ともお部屋とな  
つて夫を殺すか、何方にしろ生命がけの婦人だ、あの様子が、と案内した奴の、花を飾るのを聞き  
ながら、私は妙に愉快でした。而して得意になつて、身内を煽られるやうな心持がしたんです。

何だか、自分華族であるのが嬉しかつた、と言ふものは——其の美人に對して、鷹狩の殿様とは

行かないでも、何うやら、代官ぐらゐな事は出来さうに思はれたからです。

同時に、殿様や代官と言へば、惚れた婦なら、婦だらうが何だらうが、敢て引奪くつて差支へな

い、と思つた、』

と言ひかけて、猶豫ひながら、

『……思ひました、不埒な！昔、領主や代官が他の美人を奪うとする、と仁者とも賢君とも言はれ  
ない、悪逆とは言ふ、無道とは言ふ、けれども、私通とも何とも言はん。婦、娘、妾を奪つたこと  
そは言へ、野合だなんぞと言ひはしない。構はず、奪はう。葦旗で押寄せたつて、たか袋田の村

一つ、金の力で踏潰すに暇が要るか！己が家は伯爵だ、と高を括つた。」

二十

「悪逆無道そんな事は書にある字だ。又聖人や君子なんて時世後れな者に成りたくも何とも無い。構はず引奪る——引奪つて、萬一一探のために代官滅亡と成つた處で、暴主が國家を失つたも同一事、假に是を天下に傳ふる歴史家があるとすれば、殺生開白美人を奪うと、遺る歎。少くとも新聞の三面記事に、愚劣な標題を掲げられるやうなんぢやない、遣つ了へ！

と恚うだつたんです。が、そんな横着な丁見で居る癖に、人間と云ふものは、考へて見ると、根が是でも何處か正直かも知れません。別のことぢやないんです。——其の後二三度、今度からは私一人で、のそく彼家の前へ行つたんですが、妙に氣が咎める、ばかりぢやなく、何の爲に胡亂つくんか、我ながら極が悪くつて擦つたいが、正直と云ふのは此處なんです、ね。

吉松の裏山には、其の女神像、愛神があります。繪工が、寫さして貰ひたい、彫刻師が見せて欲しいと言つた處で、對手が對手、色鉛筆でも嘗めて居れば其で事は済んだでせうのに、此の御覽の通り殺風景で、美しいと言へや顔の妍い婦ばかり、繪葉書も人形も念頭に無いのですから、仔細のない、其の口實も發見せませんでした。しかし、うまいものが見つかりました。媒だらけの軒前でも、成丈日常を撰つて掛けて置く、鳥籠の、其も古び切つた、鼠の穴を一ヶ所、構寸の殺箱のひしやげたので塞いだんですが、頬白が一羽。

知里里、古呂呂呂、知里古呂と佳い諸鈴で囀つて居ますから、

「おい、頬白を見せておくれ、」と是をだしに使ひましたよ。

「頬白を見に来たせ、」つて又出掛ける。……。

「若様はお好きですか。」

と口を利くやうになりました。

此の「若様」と言はれたんで、又ぐつと染くなつた。最う自棄に悪代官なんぞを標榜しやしません、ぶつと其の鷹狩の殿様になりましたよ。

「水をおくれ、」なぞと、對手を小間使どころに扱ふ。が、貴下、可厭な顔もせんでせう、——而して、

「水は不可せんですから、お湯を、」と言ふ、其が實は嬉しくつて、」

と未だ風に押附けられた、掠のとれぬ咳をして、半袖で口を拭いたが、伏目になぬ。

「其頰白が種になつて話も出来て、別に手持不沙汰な事もなかつたんです。聞きます處、こりや去年寒明に、此の近邊十何年にもない雪が降つて、八寸ばかり積つた時、吉松の弟と云ふのが、厩の裏の竹藪の前の雪を掻いて、ばらばら米を撒いた、もちはごを刺して、夜の明けない内から厩へ入つて、羽目を覗きながら狙つて居て、餌に餓えて来る小鳥を、小雀、山雀、鶉、可哀相に藪へ入へ一羽交つて、十五六羽、頰白ばかりも三羽取つた。其の一羽を、拜むやうにして頼んで、お民が籠に養つたんださうです。勿論息はあつたが、もちを外す時に無理をされたか、片羽痛めて居た、飛び得なかつたからだ、と言ひます。

二年越飼つてあるから能く馴れて居る、と言つて、黍を白齒にくんで出すと、籠の目から嘴で、赤い唇をついて取る。——カチリと言つた。

と端ない、舌を見られたらうと思つたのでせう、興に乗つて違つたらしかつたが、颯と顔を赤くして、

と言ひ盡つて、苦笑した。

「私は、そんな勇氣は無かつたんです。最も彼方此方人が居ました。大方婆々どもなんでせう、そ

んな者は、壁の雨染、障子の破目同然で、眼中になかつたけれども、何うして父が存生だつたんですから、家が自分のぢやない、投出さうたつて然うは行かんかつたんですが、……父は、何です、其の夏の季に亡くなりました——

お話の續きですが、頰白が、知里里里古呂呂ッて啼きましたよ。』

二十一

「一日……。」

世嗣の君は更めて言つた。

「今日こそは、と又此の袋田へ入つて来ました。午少し過ぎて、時間の見計らひ、別に注意をしたでもなくつて、二人の妹どもが、未だ小學校から歸らない、と言ふことが何となく胸にあつた。

お宅の前を、半町ほど街道へ寄つた畑に、婆々が一人、何だか青菜を問引いて居たのが、然は見ませんでしたが、何うやら吉松の阿母のやうで、其ぢやあ、と思つたが、吉松は何處にも見えん。最も其處等に彼方此方、唯今天から降つて来た、と云ふ風で、三人二人畑打をして居ましたつけ。畝々山の裾を傳はつて、蔭へ入つたり、日向へ出たり、狭い處ちや構はず粟を干した藁の上を踏ん

で通ると、最う其節ぢや用水の小流が、白々に成つて、水が底を摺つて、枯草の中を、かさく云ふやうに、剥げた銀紙のやうに見えました。

其の音が、身體へ響いて、骨を削るやうで、づつと、あの既の裏の藪を潜つて、お民の背戸の柳の下を流れて来るんだ、と思ふと、キリキリと、扱帯か何かで、胸を締めつけられる思。

妙に、草臥れたやうで、其の癖、氣が焦つて、恚うふら／＼するから、曲り角の、あの庚申塚の巖の上へ、ぐツたり、凭つて休んだんですね——今日の此の風が彼處へ固つて吹着けると同一に、其日は又別して屏風のやうな岩の窪に赫と日が當つて居たんです。

三ツ四ツ、直ぐ傍に、俵ぐらゐるな稻束が眞白に轉がつてる。些と横向きになる、と直ぐ目の前に崖を上る絲のやうな路があります——あれから頂を高く越すと、西洋人の持山だとか言ふ、例の女神像の突立つた吉松の裏へは鵜越になるんですつて——こんな路は、世を忍ぶ日陰者が夢にとぼ／＼と通ふんだ。己は、そんなんぢやない、華族だ、と靴をトン／＼とやつて、抱いてた杖を振つたです。

其の杖の輪に亂れて、一杯の赤蜻蛉が、光ります、と言ひたさうにヒラ／＼道るのが、山を越して、愛神の矢が、羽を切つて来たやつで、莞爾すると、面白いのは、一疋帽子へ来て留まつて、眉

毛の前へ、羽を閉めかすぢやありませんか。

「御免なせえまし。」

「へい、眞平。」

と二人で前を通つた百姓が、どちらも肥料桶を擔いで居ます。其の頬冠をしない、頭髪が伸びて、耳へ被つた少い方が吉松でした。」

「成程。」

と思はず云つて、何爲か深く考へたのである。

「お話を伺へば、そりや屹と庚申塚へ挨拶をしたものでせうが、——何しろ氣が昂ぶつてるんだから、悪代官又此處で、大得意で、應と願で答へぬばかり、くの字形に半分起きて、傲然として見送りました。小作人が敬禮をして通つた氣、領主が其司配地へ臨むだ勢だから驚くでせう。」

と寂い顔する。

「折曲つて、ひよつくら行く、あの大根畑は、唐辛子が縁を取つて、此方の水の岸には、曼珠沙華が血のやうに燃えて居たに、最う孰方方も無い。其のかはり向ふの山の裾に黄色だつた粟畑が、眞白な蕎麥畑になつて根が赤らんだ。然うだ、東京へも五六度行つたり來たり、久淵、と思ふと、急

に堪らなくなつて、すつくり立つて、杖を支きました。歩行出さう、として見返ると、今度は、良遠くなつて、日影を行く吉松の後影——。

あゝ、しかし、肥料桶を振つて、聲で調子を取りながら、太脛を搔込んで、しやんと成つて、發奮ひで出る——あの、呼吸、うまいよ、彼處だけは己も合はん。

と嘲つて唾を吐いた。何うです、代官根性を發揮したもんですね。』

二十二

『小流に添つて歩行さした。村の者を侮辱した、今の舉動を憤つたか、其とも、里がめつきりと寒くなる前兆か、用水の堰の、流んで一段落ちる處が、ぶつ／＼泡立つて、真白に綿を累ねて居る。』

無意味に杖を突刺すと、他愛なく白泡が包まつて、ふよ／＼絡つて上る處を、抜いて日にかざすと、びしやく消える……杖の尖は、早や前途に、粗い鉛筆畫のやうな柳の枝へ届いたんです。

可憐い——否々、可憐いは人柄過ぎる——美しい顔を見やう。

奥深い處ですから、山が垣根で、別に木戸を附けた圍ひもない、突如縁前。雨留の處へ入りまし

たが、寂として居る——破障子の裡は例に因つて、薄暗い。厚ぼつたい藁屋の軒の、斜に切れた小口はづれに、仰向いて空を見ると、頃日の空模様で、裏山のナダレから颯と日が蔭つて來ました。つけこトコトコ、飼秣桶を静に横木に振當てる音がする——其の厩の前へ出向いて行つて、

『馬鹿、』とね、あの、ボンと言ひさうな張切つた鼻頭へ浴びせましたが、悪い氣で言つたんぢやない、我儘者のお世辭でした。ですから獨で莞爾しました。あの、廂から仰向いて空を視めた工合と言ひ、鼻の下の伸びた、と言ふのは、こんな時の形容でせうか。』

聞く者は無言で聞く。

『御覽なさい、人を人とも思はない上調子で、知里里里、古呂呂、古呂呂、と直ぐ耳元で聞こえたんです。』

『居るかい、』

と大な聲して、其の籠の掛つた、納戸の縁の方へ歩行しながら、

『又頬白を見に來たよ、』と言つて籠の下へ突立つと、鳥はびつたり啼留ひで、直ぐに、かた／＼、留木を踏む、物静な障子の中で、しと／＼と、何だか柔かな物を摺らす音がする。

片端の障子の隅を細目に、嬉娜と婦が立つたんです。透切れの二個處ある、黒紐子の襟の掛つた

寐着、藍とお納戸の立縮が古ぼけたから霞が懸つて、色が臙の袴一枚、寐て居たんで端折を占めた  
 いから裾が落ちて、朽葉色の片袴が、ちらりと小さな足を這つて、する／＼と翻つて敷居に引いた  
 其を引上げやうとする、拇指が上へ反つて、膚の綺麗な胸が開いて、襟の膨りした雨の乳房、痛み  
 はしまいかと思ふ、兩方障子の棧と柱とで、しつくりと劃つた姿で、今巻掛けた帯の先を、後ろ手  
 に抱へ上げた、肩を柔に力を張つて、顔は俯向いて居ましたが、櫛巻だつた……髪は、耳に濃く懸  
 つたばかりで、結んだ處は、障子の紙にも透かないで、半身で立つた。  
 其爪先が冷たさうに、裾を内端に搔込んで、片手で、襟を引合はせながら、  
 「頬白は少し病氣をして居るんですよ。」

心細さうに……でも笑ひましたよ。柔順な眉から瞼へ染んで、薄色にほんのりして、目が平時よ  
 り、もつと涼しく見えたのは、獨で泣いて居た處と見える。  
 寐ても起ても此婦のほか考へなかつた時ですから、直接に本人に聞いたんぢやなしに、誰からも  
 も知らず、家の様子、辛い事、農家の習慣とは言ふものゝ、堪へない勞働をさせられる事、丁と聞  
 いて知つて居ましたものね。  
 「こんな中に居るからだ。だから病氣になるんだ。」

と言つて、杖で籠を突いたが、揺りはしなかつた。

「お前、可哀相だな。」

と小鳥と兩方を熟と見た時、ばら／＼と木の葉が散つて、私の背、障子、お民の帯に懸りこした。  
 疎然と冷くなる、と雨が白く、晃然と銀の糸を捌いて、燦と日が當る。落葉の敷が、青いの、赤い  
 の、半ば黄色なもの、ちら／＼して、其處に立つた婦の姿が、輝くやうに美しい、と思ふ間に、忽  
 ち眞暗になつて、ざつと云ふ雨の音。厥で眞白な呼吸を吹きました。』

二十三

世嗣の君の物語に、此の時聊か間隙があつた。聞く者は唯、潤紅、淺綠、星の閃めくが如き木の  
 葉の、雨を縫つて日の面に飛交ふ奥に、美人が、古障子に白々と手を掛けて、緋髪して立つたと言  
 ふ、髣髴たる其の面影に憧れつゝ、

庭の落葉か、村雨か、搔鳴らす琴の音歟。人に知られぬ我袖に餘りて洩るゝ涙……  
 とか、うろ覚えの明石の組が胸に浮んだ。——やあ、戸外は何うして、其處どころの風ぢやない。  
 爺様が出た後を、直ぐに閉込んだ棟の下も、山が焼けるかと、明さが凄いほど、前刻の黒雲は吹飛

んで、晴切つたものらしい、世嗣の眉宇に煩悶の曇のあるのは、一入歴然と認められる。

「少時してから、私たちは、背戸の流に臨んだ、柳の樹の許に居ましたよ。——で、故と聲を勵まして言つて聞かした。」

「何だい、頰白が逃げた位で泣くなんて、そんな、そんな奴があるか。何だい、」

黙つてますからね、柳の枝を引張りながら、同一しなやかさだと思ふ、婦の肩へ手を掛けて、春の風ほど揺つて見たが、

「だつて……」とまだ泣聲で居りませう。

「何、馬鹿な、誰か文句を言つたらな、己だと言へ、己だと言へよ。」

「そんな事を、」

つて顔を上げたが、目に一杯涙を溜めてた。で、何です、病氣だと言つたに、此處へ呼吸を切つて驅出したんで、顔の色が蒼白かつた。こりや、其の或言葉の機会に、籠を開けて、私が頰白を放したからです。

「己だと言つては迷惑になるだらう、と遠慮をするのか、何が迷惑だ、又迷惑をしたつて構はん。迷惑するのを迷惑だと思つて迷惑する……そんな卑怯なんぢやない。」

婆々、吉松、誰でも構はん、何うしたと聞いたら、己だと言へ。己だが何うした、と言へ、構はんか。

姉さん——

頰白ばかりぢやない、お前もだ。鳥が籠に居て病氣をするやうに、こんな家に引込んでるから、煩つたり泣いたりする。出ツ丁へよ、こんな家が何だ。直ぐに出る。其のなりで構やしない、今からでも連れて行くから、

「連れて行く、とおつしやつて、」

と不思議さうな顔をしました。其時、何處か高い處で、頰白が啼いたんです。

「聞いた？彼を、見たが可い、頰白は其の行く處へ行つたんだ。お前も行く處へ行くンぢやないか。」

「私が、私が………」

とばかり言ふ。

「お前が、何だ、」  
と故に追ると、

「私の行く處とおつしやつて、どうして實家へ……。」  
皆まで言はせないで、

「實家へ？誰が實家へ歸れと言ふ？私は縁家に厭きたつて、實家へ歸る奴があるもんか。勿論、其の實家の父親なり、阿母なり……。」

此の時はじめて聞きました。其までは、誰の子だか何處の娘だか知りやしません。

「お前兩親は、」

「否、」

と掠んだ聲をして、

「父親ばかりでござんすの、」

「然うか、ちやあ——己が其の實家の父親なら、お、然うか、よく歸つて来た、で事は済む。がお前ン許のは然うは行くまい。」

「はい、些とでも曲つた事は大嫌ひな人ですから、」

「曲るか曲らぬか、そんな事は風次第、水次第、此の柳の枝だよ。けれども何しろ己の云ふ道理なんぞ、お前の親には分りやしない。」

が、決して實家へ歸れと言ふんぢやないのだ、姉さん、  
と言つて摺寄りましてね。」

二十四

「何だか、四邊が見られました。ほんの通雨だつたんですから、婆も吉松も唯首を上げて見たばかり、田畝に居なりと見えて歸つちや來ません。目の前の山のナダレは、枯残つた尾花ばかり、赤土の處々、松のすく／＼した、唯ある梢を、ゆらりと潜つた鳥が一羽、翼の色も明白に見透いたが、頼白ぢやない、雀でした。」

「小鳥だつて、一旦籠に捉まつたとなると、今度飛出した時に、舊の巢へ歸るか何うか解らない。お前も行く處へ行くんだ、行く處へ。頼白は何處へ行つたか知らんが、お前の行く處は外にはない己の許へ来るんぢやないか。」

と言つた時は、何故か肩が聳えたんです。汝達が目には御殿とも言ツつべき、我が館へ引取る、と言ふ意氣組ですから。

婦は、



「えい、」と言つた。

それ、驚いたちやありませんか。私は、婦が嬉しさに卒倒するだらうくらゐに堅く自ら信じて居たんです。最も申慮とは思はせないほど、辭氣ともに激しかつた。

案外——然も、沈んだ落着いた顔をして、

「そんな事が、私に、」

と身體を避けて、跣跟けて後を向かうとしますから、柳の中に、

「何故出来んのだ、」

と、ぐいと袂を引張る。

「内に……」

と漸と聞こえます。私は傲然として。

「何、内に、内に濟まん。何が濟まん。榮葉に黍か……譬ひ頬白の餌と同一でもだ、此内に養はれて居て、其で不義理をするなら、或は其や不都合かも知れん。其だつて、勝手な奴が勝手に不都合にして、不都合だ、と怒鳴るばかり。

況やだ、他の者に心を移すと同時に、衣食住の勘定を済して、再び内の世話にならんで、己に引

取られる分にや仔細はなからう。

又有つても、己が立派になくして見せる……」

「それぢや、」

と思ひも掛けず、力のある聲して、

「婦人の道が、」

と口惜しうに云ひました。屹とした眉が一文字に、清い目を睜つたんです。

「其處だ、」

と言つて私は悠然として微笑みました。

「多分丁度其奴を言ひ出しさうな處と思つて居たよ、」

と待構へた、と言ふ風に、

「實は、私も待ちました。」

と聞き居る此方も、腕を撫でつゝ摺寄つた。

「其處でいす。」

「姉さん、其の事だよ。婦の道——男の道——男は此處に話が別だ……其の婦の道だ、が、官道か、

私道か、田畝道か何か知らん、そんな物は何時誰が、鋤鎌シヨールを持つて拵へたい。

一夜に富士山が顯はれた、と言ふ時にも、天から扱帯を下げ、地に縋子の帯を開いて、是が、婦人の道である、と言つた験を聞かんせ。

元來、人間で勝手に拵へた道ぢやないか、勝手に人間の拵へた道なら、勝手に人間が踏破るに何がある。然も踏破ると、危く溝へでも落ちるんらだが、然うぢやない、楽しい、美しい花園だの、熟した旨い木の實なんかは、其の道の外に、其の掟の外に、其の規を越えた、其の園を出た處にある。

是を、食物を強請る小兒に、恣に其の求るものを與へない親にたとへるか。親は與へたい、遣りたいけれども、食へさせるより、與へるより、品物のなくなるより、一倍の苦痛を堪へて、兒の健康のために忍ぶ、可愛いから與らないんだ。

が、婦の道を拵へた奴は、然うぢやない。妬しくつて園つたんだ、吝で矢來を結たんだ。惜さに扉を拵へたんぢやないか。それも、地主なら未だしも可い、しみつたれな居候が、扱食ひを、大切に袂に藏つて置くのよ。」

二十五

「其の、お前、」

何だか、貴下に言ふやうに聞こえます。」

と世嗣の君は怯んで見える。此方は何にも言はないで、唯、

「先づ、先づ……」

「木や竹で、歩行くこと働くことの出来ないものなら知らん事——手足を自然に授かつた、滑い目のある、姉さん、お前……否、婦人どもが、何の因果で、詰らん道なんか守つて居る。

併かし、彼は貞女だ、と言つて人が讃めるか、あゝ、賢女だ、と云つて感心するか。成程、お前は貞女と言はれて居る、賢女だ、と言はれて居やう。

其の賞められ、感心をされるのが、舞臺へ立つた俳優の評判ほどのものがあるかい、……あるまい。恐らく鎮守祭禮の棧敷に掛つた、太神樂にも及びやしないよ。——馬鹿な、詰らん話だ。

此の袋田の貞女なんぞ……柳の樹のお民と言ふ、美名が後の世に傳はつたつて、一年太郎作が島の芋蔓が、丈一丈に出来た事や、三股の大根の生えた事、檀那寺の三毛猫が上手に鼠を捕つたと言

ふ話の序に、人の口の端にかゝるに過ぎんせ。

最つと飛んで、(此村に貞女あり)と谷戸の入口に榜示杭が建つた處で、其が直ちに、傾いた曲つた小屋の、突支棒に成るんぢやなからう。其とも操を守るがために、美しい衣服を着て、旨い物を喰つて、脚楊枝で端然と坐つて居られると、言ふならだ。操正しい、賢女だ、節婦だと言はれるために、弱い身體を人一倍苦勞して、婆にや苛められ、小女にや小撞かれる、見る、それな破れた襟の半纏着て、

と言ふと、眞白な咽喉を、取つて引締められたやうに胸を抱いた。

「菜ッ葉を嚙つて水を呑んでる貞女が何だい。」

と私は豫て婆どもの事を知つて居たから、饒舌る内にも勢づいて、満腔の俠氣、渠を救ふに、敢て世に憚らん氣がして来て、

「貞女の胸にや璆瑤が掛つて、淫婦の腰を蛇が巻いてる、と云ふ例を聞かん。

善不善、それぐに、自然の報があると云ふのか、此家へ縁附いて何年経つ。一度か、どんな因果報があつたか。ありやしまい。今己に若し救出されて、其を人非人だ、不埒だ、と勝手な事を云ふ奴等に、お前を着飾らせて見せたら何うする？金剛石で、翡翠玉で、其の美しい指を輝かせて見せ

たら何うか。袋田村の貞女を廢めろ！」

お民の、然も一生懸命らしく、負けまい、屈せまいとするやうに、仰いで睜つて居た目は、何時の間にか水の流に伏目になつて、枝に頸を垂れながら、其の思は肩に籠つて、優しく撃ねた風情がある。

「まだ、分らんのか、」

と私は兩手で幹と柳の樹を壓した、枝がふらくと靡いたんです。

「第一お前は、此の柳の茂つた色を外から覗いて、暮し向きを床しがつて、だまされて来たんぢやないか。約束をした亭主も、惚れた夫も何にもない。人は違ふか、まるで、然うすりや、雪の朝、餌に餓ゑて、弟の奴にたばかられて捕まつた鳥と同一事さ。

其だつて、餌を伺はれりや、よく懐いて、手を叩けば来る、呼べば啼く——、あ、可愛い、恩を知つて、とか何とか言ふだらう。馬鹿な、人間が勝手に言ふのよ。婦の道と同一さな。

頬白の方ちや迷惑だ、が、悲い事には、餓いに替へられんから、其處で己を囚にした敵にも、懐くんだ。——お前が婆に苛められても……腰を擦つて、齧いてるのも然うぢやないか。

人の目にや、よく馴れた、可懐いた、と思ふ頬白が、おい、何うしたよ、己が手を掛けて戸を開

けりや兩の羽を羽搏つて飛んだせ。お前は、まあ、あんなに可愛がつて遣つたものを、不人情だ、薄情だ、と思ふだらう。そりや勝手だ、我儘ぢやないか、何うだ。」

「まあ！」

「否とは言へまい、否、否とは言へまい。頬白は他に佳い處があるんだから、行きたい花園があるんだから、欲い木の實があるんだからよ。此内も其の通り、頬白に於けるお前と一つだ。不人情だ、薄情だ、と言ふだらうが、そりや、居候の禪のやうな、婦の路とか云ふものに、お前を立たせ、歩行かせて置いての事で、向ふは勝手さ、むかふは其が勝手だらうが、お前はお前の勝手がある。附木で繕つた籠を抜けて、一足出りや、己が居る。己はお前の花園だよ、旨い木の實だよ——。」

二十六

「さあ、此の旨い木の實を遣らう。」

と自分の懐へ、私はずつと手を入れて、

「綺麗な花園へお出で、」

と言つて、濃い、柔かな束ね髪を垂れながら、指を反らして焦つた状態で、小刻に柳が幹に觸つて

居た、滑かな袖を取つた、取つた茨には刺があつたが、引かれた花は、其の手、其の襟、其の胸、其の足、臉ばかりが薄紅さして、唯真白な胡蝶のやうで、其が、不殘、ゆら／＼戦く。

途端に皆消えた……のは、崩折れて柳の根へ跪つたんです。片手は袖口を捲いて口を壓へた、顔も半分隠れましたが、取つて離さなかつた手は其のまゝなのを、ぐい、と下へ引かれたから、此の胸が被さつて、乗越して上から覗く、脇明へ冷たさうに、淺黄の色が搦んで見える。

何の氣なく、目を反らして、水を見ますとね、同じやうに常磐木の縁を透いて、雪が隠顯映るんです——真上の、ナダレの、あの女神の白身が、倒に浮いてるんで。

不圖、思着いたから、疊みかけて又恁う言つた。

「見なよ。此處に、此の水に映るのは何だ。」

と真直ぐに指さすと、むく／＼と其の映つたのが、底から玉のやうに湧いて動く——

お民も、熟と覗きましたか、

「朝晩見て居やう。こりや裸體の婦だ。此だがね、今此處でお前が全て衣服を脱いだら、人は何と思ふ。」

と言つた時にや、フイと顔を背けました、餘りだ、と極が惡さうに。

私は猶豫はす捲し掛けた。

「衆何うする、何と言ふ——出来ん、そりや出来ない。お前が己に聞いて、家を棄てる事を、人に對し、世間を兼ねて仕得ないのは、恰も此の庭で、白晝素裸になつて突立つのを憚るやうなものだらう——人が見て何と言はう、指して何うするか、と思つて。」

けれども能く聞け。

村の者は、此のナダレに立つた、膚の白地な女に對つて、何う出来る、何か言へる。唯、あれあれと、馬鹿口を開くばかりぢやないか。頓て其の美麗さに、押魂消るばかりだらう。是が西洋の女神の像だ、と聞いて、田畝で拜むやうに成らうも知れない。

是とても場所が場所で、畦道にでもあつて見ろ。土を捏ねた泥ツ手で、奴等ア密と乳首を撫で、見やうも知れん。淺ましい、と云つて、唾も吐きかけやうし、草鞋を拾つて打つける小兒もあるんだ。——處を立派な持主が高い處に据ゑて置けば、うつかり指さしも仕得んぢやないか。

婆どもに苛められても、吉松の此の家の内に居ると思へばこそ、己の説に従ふについて、唾も吐かれう、草鞋も頂かされうと云ふ憂があるんだ。邸へ來い、百姓等に指だつて指さしはせん。口なんぞ利かせるもんか。

何がなし奴等が思慮分別に突づれた、雲の中の女神だ、とお前を思はせるから憂慮するな。が故郷へは錦だから、都の貴婦人となるよりも、村で肩身を廣げたからう、……其も可、こんな袋田の村一ツ買潰して池にしやうが、庭にしやうが、そのくらゐな事には驚かん。馬丁に前を拂はせ、馬車に乗つて衝と入れ、不義理な、人非人だと面と向つて誰が怪我にでも言ひ得る——又奴等が口を利かないのも氣にするな、偶に此方から物を言へば、月の光に俤立つて、あの女神が、微妙な聲を懸ける時、百姓が土下座して伏拜むと同一位地にお前を置くから。お民………」

と爾時手を離して、柳を攀づる意氣込みで、小手をナダレの女神に懸し、

「天は高い、地は潤い。雨晴れの日の黄金の縁に包まれた、別世界、白玉の女神と、翼ある兒が戀の矢を引続つた極樂が、目の前にあるではないか——外國の事と思ふな、断念めるな。日本にあれば日本にある、然も此の袋田の空に霞霧くが如くにある。唯立て、手を伸ばせ、直ぐに花園の木の實に届く、」

と言ふと魂が入れ變つたやうに、きつと立つて、ひしと縄つた、婦の背を確乎と支えたんです

二十七

「……魂が、他愛なく、我が人が、胸で一ツに成つた……と思ふと、緑の葉と葉の間を抜けて、白く燃える尾花の波を、兩岐の霞のやうに、すら／＼と足を這らして来て、目前へ立つたのは等身の女神の像で、端麗な其顔は、何故か、不思議に唇だけが、私の顎の下に紅かつた。

あの女神の顔が、餘り能くお民に似て居ると何時も思つて居たからでせう。

婦は活々とした嬉しうな聲になつて、女神は兎に角、可愛らしくツてならなかつた、羽の生へた小兒はツて聞きますから、矢の講釋を手真似でしながら、あゝ放した、それ刺つたぞ、と云ふ時、指環を抜いて婦の胸へ、此がヒヤリとしたと見えて、

「おゝ、」

と言ふ、其の拍子に、漸と分れて歸りました。こんな隙はあつたけれども、連出す約束をしたのは、未だ其の折ではなかつたんです。

處が、お民と、ふとした行係になつてからは、其までの打壞し主義、敵役の代官が、打つて變つて、首尾よく成就させたい氣がし出したので、妙に遠慮勝になつて、前のやうにづか／＼出入りが

出来ません。が他所ながらでも、様子を見ないぢや居られんから、其處で此方の塚の傍を蹴つて上る、搦手の路を發見しました。

御存じの、石碑の裏を、馬の鬚なんぞ分けるやうに尾花を踏むで、束ね放しの粗朶が、ころりと寐たり仰向けに路に轉つたり、ごろ／＼して居る上を跨いで、無暗と、攀上つて、方角を見い／＼、雜木林を突切ると、峯へ出るんですね。

頂は三四百坪——廣場ですから、見た目には狭くつても、あれで五六百坪はあるかも知れん、平地ならしが出来て居ますが、しばらく打棄つてあるらしい、枯草が茫々、直中に、十字架が建ててあります。

端へ出ると、あの女神像は、恚う張の好い腰へふつくり搔込んだ、柔かな背筋が、些と窪過きたかと思ふほどに、浮いた肩先が四五寸、峯を抜いて立つて居ますね、近づいてはじめて知つた、波がしらが裾へ立つた石の臺に取附けてあるんです。愛神は上から見ても、矢張り高いに松の枝に架つて居る。まだ、臍をまげて、長く成つて、すらりと足を投げて、胸が逆のやうに横に寝た女神の像が最一つある。

其の間へ、足を落して、山の端へ腰を掛ける、と厩も藁屋も、柳にかゝつた、繪馬か、と見える、

吉松の構内を瞰下ろすと、ちよろ／＼と流れる水も、雲に遙に連なつて、蒼空の中から鱗を洩らし、磯馴松を絡つた海も、どれも同一水の色です。私は獨で豪くなつた——頑冥な、馬鹿律義な、舊弊な、愚民どもの眼を覺し、舊き道徳を滅して、新なる、知恵に、自由に、自然に蘇生させる大海嘯に棹して來た波の上なる女神の夫だ——雲の端に手を懸した豫言者の意氣組で。

本を開いて見るやうに、帽子の下から、下の様子を伺つちや歸りよした。幾日か然うしました、僥倖に天氣續き、其の節此の風は……』

みり／＼梁が撓むで鳴る。

『今日のやうなのに吹かれると、天上へ飛ぶか、厩の中へ突落される處でした。

現に昨日も、又然うして居たのを、柳の根へ來て、お民の手が梢に搦んで私を招く——最も彼處からは下りられません、呼ぶ程だから差支へはあるまい、と元の庚申塚へ廻つて、急いで吉松の内へ行つて、何時かの時と同じやうな事がありました。で、密と話をして、昨夜の其の事、通げて出やう、迎ひに來やう、と約束をしたんでした。』

二十八

『此處で矛盾したのは、豪さうに新思潮の潮先に立つて、袋田の奥へ海嘯の如く押寄せ、美人を犠牲に取つて凱旋する勢の奴が——婦を連れて通げるのに、夜を撰んだのは可訝しいでせう——最も私の發議ぢやない。先からの行係りでも、卑怯な夜逃げは不可ん、白晝大手を振つて出る、と附元氣をして見たが、婦が斷じて肯きません。

又私も、何うやら村を連出すのに、人目を忍んで、薄尾花にまで心を置くと云ふ方が、妙に感しい氣がしたんで、ちやあ、間違へるな、今夜……屹と、と言を番へた。いや、其の爲に飛だ間違ひが起りましたよ。考へて見りや、婦も町へ用たしに出る風で、晝間の方が却つて都合が好かりさうなものだのに。

一方には、連出して一先づ藏匿ふ處を拵へて置いて、愈々昨夜、月を辿つて、來掛つたんです。時間も粗た打合をして置いた、一時頃までは村の若い者が町方へ賭博に出る歸途がある、三時過ぎる、と最う糸工場へ通ふ早出の職工が通る、其の間、と兩方から切詰めたから窮蹙な時間ですね。丁どお宅の前あたりで、鶏が啼いたのを聞いて、吃驚して、後れたか、と時計を出して月影に透かしたが、一番鶏。

此の通り、山の裾がぐるりと取廻はして居ますから、夜は洞穴を抜けるやうで、大な白い蝙蝠ぢ

やないが枯尾花の穂が、ちら／＼する。水田は一面に黒ずんで、どんよりした底光、死んだ湖を見るやうでせう。山の面は真蒼で、處々灰色の骨が出て、遠いのは腰、近いのは頭に、白く冷たい霧が薄り掛つて、其が動くやうな、動かないやうな、宛然大濤の幽霊かと思はれる。今日の風が吹く前觸だつたか、其は／＼寂としたものでした。

又何も、昨夜に限つたんちやありますまいが、然うした月夜の習ひで、立木なぞ片面が明いと、裏は餘計に暗いんですね。引いた足が暗いと、踏出す處がばつと明い。路傍で枯樹の枝が、づ／＼刺さりさうに足の甲へ映るかと思ふと、爪先の土からは、ぼうと薄煙が立ちます——好鹽梅に、寒さは骨に透るほどぢやなかつた。何の、そんな事は氣になりませぬ。吉松の近くへ行く、と彼處の取着が、雑木山で、空から樹の蔭が一束になつて押冠さつて暗いんです。門の前は、目が覺めるほど明るくつて、而して、山の行留りの所爲か、霧が又一際濃くつて、ばた／＼、音がしさうに厚ぼつたく累つて、ふつくりと月を乗せて居ました。

脱つた、暗號の約束をして益かなんだ、とげつそり心寂しくなりましたつけ……ばた／＼ばたばた、鶏の羽音がした。急に胸が轟きました。——確に吉松の家の鶏小屋で、ケツ、ケツとけた、ましく騒立つ——何處かで、ウ、ウ、と牛が鳴く。

握掌ほどの影が出て、明るい處で、すつと擴がつた、と思ふと顔の白い、茫とした、裾の蒼いのが立ちました、私は夢かと思つた。

「お民、」

とはつと出る、と何にも言はずに。此の時は婦の方から、確乎私に取絶つて、びつたりと袂を摺寄せました。

「……………」

「行かう！」

と其なり、私は婦の袖口へ手を掛けたが、それぢや……そんな事で、下着を着換へて居つたんですね——冷く觸つて、掌にぶる／＼動きました。

其處へ、一寸立停まつて、直ぐに突出された風で、足を揃へてする／＼と歩行き出した。

左手……の私の横合ひから、のつそり白犬が跟けて来る。家を早や遠ざかつた。あの塚が見える處で前脚をひよいと出して、面を振向けて、膝の處をクン、と嗅ぐ。

「畜生、」

と叱ると、う／＼と可厭な聲を出したんですがね。」



二十九

「私は悪いものを持つて居ました。昨夜なんぞ、特に敵地へ臨む氣ですから、袂に短銃があつた。唸りながら頸を伸ばして、尤の畜生、鼻尖を擦りつけたが、直ぐに嗅いだと見えて、豁然と三尺、地摺りに退つて、怪しからず吠えたんです。お民が、貴下、

「何ですな。」

つて一足出て、一寸腰を屈めながら、天窓を歴へて、ぐつと歴して、

「白ぢやないかねえ。」

然うすると、畜生、鼻頭を仰向けて、霧を吸ふやうな大口を開いて、へろ／＼と咎めうとする。

お民が袖の下へ手を隠すと、向をかへて、ふらく／＼田のふちを傳つたが、矢のやうに颯と飛んで、何處へか見えなくなりました。

お民が其まゝ足を留めて、

「可厭なねえ、内へ盼つけに行きはしますまいか。」

「今まで見懸けない犬だ、お前ん許のか。」

「否、他所のです。」

と言ふから、私も何うやら安心しました。

「飼主が寶物を穿出す夢でも見るだらう。さあ、構はず行かうよ、急いで、」

「はい、」

其まゝすた／＼と歩出き出した。些とは落着いたものらしい。其の時はじめて、自分たちの足音が耳に入つたんです。が、少時すると、はた、と其の一ツ留まりました。妙に、八九枚田を隔てた對方の山の裾で、其の響が止んだらしい氣がします。遠くで——大方びた／＼びた／＼、何とか言ふものがして居たからでせう。

「あら……………」

「……………」

「若様、」

と聲が變る。

「何だ、」

「誰か呼びはいたしませんか。」

「誰ぞ、」

「私、」

「誰が、」

「……（お民ッて、）……お、又……（何處へ行く、）ッて、……あ、」

と言ふ、と最う調子が上づツて、確乎私に掴つたんです——私は的なしにきよろしくしました。少時、身動もしなかつたが、堅くなつた婦の身體が、ぶる／＼と震へた、と思ふと、

「庚——申——塚で呼ぶんですよ。」

と言つたのが、私の連れた婦ぢやなく、遠くで、今、聲音が訝を返へしたと同一に聞こえる。私も何だか慄然としました。

「庚申塚で呼んだんですよ、——（何處へ行く……お民！）ッて、」

とがた／＼する。

「庚申塚に誰が居る。」

「否、お庚申様ですよ、何うしませう。」

と蒼くなつた。

「何、あの塚が物を言ふ？馬鹿な事を！」

自分ぢや却つて安堵して、低聲で笑つて、而して、婦の氣を休めるために、づか／＼と寄つて、恐氣もなく、不作法に顔を出して、蒼白い石碑の、周囲が蔭に成つて、底の浅い巖の窪に浮いた奴を覗きました。が、猿の形か、唯、何だか混沌とした、大なもの、胎内に宿つた、乳汁に包まれた不氣味な小兒のやうに見えた。

雖然、何となく何に目が引附けられて、岩に冷く睡が据ると、あの三方へ三割刻んだのが、孰から始めたか、ぐる／＼。はつと思ふと、又舊の處へ膝臑として居直つた。

吃驚して退りましたが、無論こりや自分の目の所爲だ、と考へたし、又自から敢て恐れない事を證據立てるために、平氣な風で、

「何でもないぢやないか、來ないか。」

と呼ぶと、婦は元の處に立竈んで居て動かしたので、

「來ないのかい。」

と促しますとね、緩かに身體を動かしたが、私に來て欲しい、と云ふ仕打なりました。



「瘴氣むか、」

「お遁び……お逃げなさいまし。今、今、塚の前へお立ち遊ばしたお身體が、真白な煙になつて！」

「えー！」

「消え、消えるやうに、見えたんですもの。私最う可恐い、どうぞ、どうぞ。」

と、舊來た家の方へ、居膝つて、袖を落して、腰を引摺る、其に續いて思はず、ふらりと歩行きました。婦が又アツと言ふ——戻らうとする畦路にも、山の根にも、樹の下にも、大勢影のやうな人が立つて見て居る——と言つて窘むんです。

「土、土百姓ども。さあ、誰でも来い。操だの、義理だの、そんなものは貴様達の大根畑にや肥料を被つて生へて居やうが、己が方にや、怪我にも無いんだ。無いと云ふに何うするてんだい。己が此の婦を連れて行くに文句がある奴あ、此處へ出ろ。何者だ。」とくらくして目も眩んだんでせう、誰も見えんが、居ると云ふから叱りつけた。

「あ、もし、もし。」

と婦が下から、胸へ攀るやうに膝を立て、

「否(否) 決して文句は申上げん、唯私をお連れ遊ばして、お通りの處を、黙つて見て居たのぢや。」と言つてゐす。(樹も、草も、お月様も、皆が見てござるぢやないか。)ツツて、然う言ひますよ。(誰もお邪魔はしませんから、づんづん、行かつしやい。)ツツて——え、え、誰？誰方？まあ、あ、墓から出て来た、袋田の爺婆だつて。あれえ、あれえ！」

とのつげに、反る、橋のやうになつた胸を、兩腕で、い、と抱いた。

私も夢中で、

「うむ、見物しろ、殿様が御通りだ。」と言ひさまに、白々と足をさげて、月にかツくりと仰向くの宙へ。大跨に歩行しましたが、庚申塚を抜けやうとすると……。」

世嗣の君は大意を吐くのであつた。

三十一

「急に重量が掛つて、我慢にも腕が痺れて、抱いて居た手を放すと、氣絶して居たと言ふのぢやありませんから、頭は落ちないで起返つて、塚の礎に手を突いて、身體を支へた時でした。

「あ、あ、顔の赤い大な物が、木の葉を食べて……。」

と恍惚して、熟と見ながら判然と云ふかと思へば、

「あッ」

と髪を散らして突伏して了つたんです。

顔も上げずに、私は是なり成るやうになりませう、歸つて下さい、遁げて欲しい、最う夜があけると、身を揉みます。霧がむく／＼動いて来て、一面の田の上へ、波が寄るかと思はれる——斯うなつちや、若し人に見られると、私が居ては尙ほ婦のために悪からう、と思ひましたから、——とぼく歩行出して、振返つて見る内に、霧が段々、あの、其の墨繪のやうな姿の上へ、累り、累りやがて、私の身體を袋田から押出すやうに、後を壓へて擴がりました。』

扱は袋田の、今朝の霧の濃かつたのは、恠る秘密が包まれたのであつた。

戸にカタリと打附かつて、ほうと言つて六兵衛爺様が歸る。

で、世嗣の君は悪念に堪へず、お民の成行きを見定めやうと、出直つて来たことは言ふまでもないが、庚申塚で行惱んだのは、吹く風の威力ばかりではなかつたのである。然るにても延寶八年の其の奇しき塚が、海嘯が山の奥を浸した時——祖先の手に建てられた、遠慮のほどが思ひ當る。

時に、恠う打明けて、世嗣の君が懺悔した趣意と云ふのは、聞くが如き悲境に落ちたお民の救を求めたので。

仰せまでもない。中空には、はた波を踏むた女神もあるのにお民は概で縛められた——止まぬな！此の風。あはれ牛頭馬頭に迫立てられ、裳が炎に乗つたと云ふ、疾く先づ其の繩を切解かう。

次の夜、伯爵の世嗣が、墨屋に再び訪れた時は、馬丁體のものが附いて、麥酒を束にして持つて来た。別に肴があつたので、爺様は例の手酌で獨りで飲んで、宵の内にごろりと寐たが、主客は炬燵に差向ひで耳も顔も熱くなるまで相語つた。行者が醫師で、風邪ぐらゐは、村の者に藥を盛つた信用から、兎も角も亂心でないのを悟して、お民の繩は解かせた、と言ふので、世嗣も落着いて猶悉く當時の状を繰返した——此まで記したのは、二度の繩を纏めて一つに綴つたことを言つて置かねばならぬ、——さて又打つて變つた今夜の風、天井で鼠は騒ぐが、戸外の氣勢は寂として、霜の降りるのが袴々と身に應へる。

續きは忘れたが、世嗣の君は炬燵橋へ肘を掛けて、此方へ押寄せるが如くに凭れながら、

『貴下は何う思ひますか。』  
と急に尋ねた。

『何でござります。』

『婦ですよ。お民があのからぬな容色と、氣立を持ちながら、こんな村の隅つこに、埋木に成つて一生を暮すのは可哀相とは思ひませんか。前生の約束と云ふやうな愚な事でも考へないぢや、馬鹿しいと思ふんです。』

一生襦袢を着て、糠を食つて、土穿りをしつゝ、枯木に成つて朽ちるほどなら、人に何と言はれたつて、たかゞ一村一里の批判です。外國と戦争する時の破裂彈のやうに、日本中響き渡ると云ふんぢやない。構ふもんですか——而して榮耀榮華をして貴婦人と言はれて、化粧料の殘餘で慈善事業でもした方が幾干増か知れんと思ふ、何うでせう。』

『何うも些と何うも其は、』

とばかり此方は陶然として天窓を掻いた。

『お返事に窮しましたな。』

三十二

世嗣の君、

『不可いでせうか。』

『何ういたしましたして一々御道理のやうで、』

『別に道理ぢやありませんよ。』

と直ぐに折るのが憎くはなかつた。

『最も、お民さんが、私のもなら直ぐに貴下に獻じます。何うも其の方が婦に取つて幸福のやうだ。いや、やうだぢやない、確に幸福かも知れんから。貧乏人が碌に食ふものも食はせないで、我が面をする権利はない、差上げますとも。』

『然う云はれては——恐入つた。』

と埋めるばかりに掛蒲團に額を伏せた、此の容子に又少からず動かされた。しばらく、途絶えて、夜が更ける。

『時に、お睡くはありませんか。』

『否、お民の事が出来てから、夜を寝ないことがいくらもあるんで……私は些とも。しかし貴下は？』

『私は御覽の通り——そりや然うと、其の肝心の、昨夜、庚申塚をお通なさらうとする時、怪い聲

を、  
と言ひ出したが、變に背が廣いやうで、見返ると押入の奥に、頭の圓い影が映る、ニッ二人の、  
が、未だ一つあるやうな氣がして、背が寒い。

「其の聲を掛けたと云ふお話、貴下も其をお聞でしたかい。」

「婦の口から、不意に、(お民、何處へッて——、お庚申様です、)と云つて震へついたので、縫られ  
た胸からかけて、ぞつと貫かれるやうでした。爾時のお民の聲と云ふのがなかつたんです。今もお話  
した通り、一度婦の咽喉から出て、田畝を廻つて、向ふの山の裾を傳つて引返して、ぐわんと此の  
耳へ來た。而して、(何うしませう)ッて悲鳴を上げられた時は、私も實際何うしやうかと思ひまし  
た。

何とも言へない氣持でしたよ。」

「が、然う云つてお民さんが、ものに托して、貴下を誑したと云ふんぢやありませんね。」

「そんな、そんな様子は更にはないです。はじめ、家を出る時に、小な風呂敷包一つも必ず持つて來  
ちやならんぞ、と云つて置きました。昨夜もたしか袖の下へ隠されるほどの品も持つちやあ居ませ  
ん。見ると、月明には寂しいほど空身で居ました。何かに托けて私を救へるくらゐなら、故とに

も風呂敷包ぐるゐは持つて出たらうと思ひます、駈落すると信じさせるやうに、」

「未だ何ですね、其處らに、むらくして目に餘る人の姿が見えなかつて事でしたね。」

「最う其時にや赫と取逆上て居たですから、お民ばかりぢやない、木だか、石だか、筵だか、そん  
なものかも知れませんが、私の目にも見えません。」

だから叱りつけた、怪物だつて幽霊だつて、土百姓なんか恐れはせんです。」

「しかし……」

「ですが、婦を引抱へて、塚を突抜ける力はなかつたんです。口惜いが支へられんで、何故か身體  
が弱りましたよ。」

而て見ると、人間ばりぢや、守る事も守らせる事も出來ない、力さへあれば打破ることの出來る、  
婦の道なぞと云ふものは、鬼神があつて、自然が命するのとも分りません——他は今……差當り、  
あの庚申塚が、貴下方を憎んだでせう。」

時に月天心と思ふあたりを、颯と此屋の棟へかけて、ものゝ押寄する氣勢がした。はつと言ひ合  
はした如く顔を見ると——星にも響かう蹄の音。

夕、夕、夕、夕、夕、夕、と一壓に間近になつて、はた、と其の音が留んだ、と思ふと、戸に打

附つた物の響、唐突に山が崩れたか、と二人とも息を詰める。咄嗟の間は動悸も留まつた。  
ドン／＼と叩いて、

「爺様！」

「お、」

目敏く爺様は應へたが、生欠伸してぼやけた聲。

「誰ぢやい。」

「吉だよ、吉松だよ。大變ぢや、」

「何、大變だ、」

と行者が眞先に飛出した。びしう、と開ける、出合頭に、毘斑な蒼い顔で、

「お民の奴が、のう、」

「うむ、」

「咽喉を突いた。國手、」

「了つた！」

と聲を上げて、爺様の寢床を飛越えんと、

「わい、」

と言つて、むつくり起きたが、世嗣の君は、部屋の口に石の如く立つて居て、

「君、君、」

とばかり言ふ。

「疾いが可い、」

心掛聊ながら——縋帶ぐらゐは備へて置く、革靴を下げて土間へ下りると、早や、爺様が手傳つて、戸口に駒の頭が高い。

「さあ、乗つて驅けさせえ。」

燈の踏みやうも知らないのに——裸馬ではあつたけれども、何となく此の驟、其の意を得たらし  
く思つたので、猶豫はす、手をかける、と誰かが足を浮かしてくる。鞍に掛まつて、平伏にハ  
タと伏すや、前足がボンと出た。

月下の道は流るゝばかり。

衝と庚申塚を抜ける時、駒に並んだ吉松が、

「御免なせえまし。」



と聲をかける。

「失禮、」

と行者も揖した。

背後から、

『急いで——』

と山の裾に響いたが、其を振り返る隙があらうか。

得物は鎌で、手負は咽喉を掻切つたが、玉の緒は未だ絶たれず。切なきに水を求めて、納戸の縁を落ちたさうで、づる／＼這つて出た處、背戸の流の柳の根に力なく倒れて居た。あゝ、最う些とで口を濡らしては助かりはせん。勇んで抱起こして、兎角して、縋帶する時、夜が白む。手負は目を塞いだまゝながら、白魚の指に紅さして、頻に山を向かうと言ふ。背を抱いて向直らせたが、一念が通じたのであらう女神の前に、小さく黒く世嗣の君の姿が立つた。

と上から手真似で聞くやうだつた。固より容體を尋ねたのであらう。下では其の答に稍猶豫つたが、此の際頭を掉るべきではない、と考へて、此方は幾度も領いたのである。しなしたり！呼吸が絶えたか、と聞いたらしい。

婦の脈を確かめて、引返して來た。庚申塚の此方から、雷を開いて、今朝はいつもより一入高く、女神の胸が雪を欺く。

唯見ると、鳩にしては稍小さい、鷗は餘り其處まで來ぬ、何の鳥か白いのが、ひら／＼と飛んで中空へ舞上つた時、凍て、青竹の破れた音して、女神の胸の白妙が鮮紅に焔と染まる。日の出ぬ前よ、あゝ、其の紅——庚申塚の朝の霜。

女神を飾つた、山の主は未だに知れぬ。

# 鷺の燈

## 第一

『旦那、旦那ッて雨戸の外で呼んだです。旦那は可が三聲めには、書生さんの旦那と惣うです、烈輕の爺で年紀は五十六だと言ひました。』

御維新前能樂が盛な時分には其の爺流の狂言師だつたさうで一時火の消えたやうに成つたのが頃日大層な勢で流行出したから、諸流の月並の會の太郎冠者は勤りさうなもの、片田舎の湯宿なんぞに、夜番をして居なくつても可さうなものだが、いづれ其の昔も前座……いや、お待ちなさい、狂言師に前座は可い、あ、何とか言ひます。』

『アトだの小アトだのといふのがあるんですが、』と私は榊原が話しはじめた、齋念の湯の奇き物

語、渠が容易に打明けなかつたのを聞く嬉しさに、そはくしながら、

『はあ、成程、して其の親仁は……』

『姓は何といふんだか、温泉宿の女中等は、甚吾爺さん〜と言つて居ました、いかにも其の小アトぐらゐな處だつたのでせう。けれども此のお話では決して小アトでない、シテの方です。既に其時の如きも、一緒に不思議を試さうと言ふので、私を誘ひ出しに來たのですから。』

最も刻限に成つたら、聲を懸けて呉れ、出懸けたいと、日の中約束がしてあつたんですから、私も寐ないで待つて居ました。

逗留をした座敷は八番、下座敷で、最も齋念の湯宿は平家造です、然も唯一軒

湯も岩から湧く温泉ではないと言ふ。四方青田の丘の、何某の屋敷跡一ヶ所、草の中に鼓子花に交つて黄なる防風の咲く砂地があつて、雲解の跡、雨上り、不闘すると六月の早嶺き、村々水論がはじまらうと言ふ時分、清水がむく〜と草の根を白く洗ひ、眞砂を透過して颯々と流れる事などがあつたため、土地の人々、鎮守の神の御手洗と稱して、雲水と呼んで、水の氣の無い時も、小さく竹垣を結つて、注連を繞らしたが、一歳秋のはじめ齋念寺の鐘樓が震れて、傾く途端に挿木が觸れて、巨鐘が自然に鳴つた、地震の以來、此の清水噴出で、玉を聯ぬるが如く絶えず、然も手に掬ふと温

く感ぜられたのである。  
即ち町方の資産家、件の空地を所有した便宜に、分析して、萬病に利ありと言ふより、世のため、人のため、村繁昌のため、こゝに浴場を起すに就いて、土地の者聊か異議なく、先づ板園の假普請で、仕切のない、二十軒長屋のやうな、縦に長いのが一軒出来た。  
當時も神原は其の冷泉に遊んだことがある、小兒連れ夫婦の人にともなはれたが、妻女は五つに成る兒を負つたまゝ、伸も要せず、主人は瓢を腰にぶら／＼歩行きて、越前の國福井の市のはづれから、近い二里。田畝路を馬士づれに行く途中、掛茶屋の軒、石地蔵の背後、土橋の袂などに五六ヶ所、齋念温泉と白抜に、黒旗が建つて居て、凡ての光景、開帳の如く、客も在郷連が多数を占めて然も未だ出来立の萬事整はず、瓢で酒を持参だから、夕飯も升で何合と極めて炊かせ、三國港から賣りに来た、鯛を一尾、三枚におろして、潮と刺身と鹽焼と、指圖して料らせて、半日の清遊、部屋代ぐるみ總計二歩に満たざる勘定、其でも上様と言はれたのであつたが、此の二度目に神原が行つた時は、即ち茶代の請取が、活版で出来て居たと言ふのである。

第二

「私居ました部屋は、づらりと二十八九枚、汽車が通るやうに並んだ雨戸の、通縁の中段に、餘り長い間だから兩端の他に別に戸袋が一ツ拵へてある。丁ど其の際で、譯なく、人に知らさないで開ける事が出来るのです。」

是が幸と言ふのは、一體其の晩甚吾爺に誘はれて出掛けるのが、貴方の前ちや些と大人氣ないですが、一緒に不思議な事を見やうため、就いては、夜中になが／＼雨戸を開けなぞして、人に怪まれないと、悪いからと、豫め甚吾が注意をしたので、それちや本人、何うかといふと、いや、大臆病の夜巡りをする毎に幾度驚かされて、わあ！と尻持をつか知れない、婦人小兒ちやなし、聲を揚げて助船とも人殺とも、喚いて救を呼ばれない丈に、尙苦しいと、査問顔を合はせた時、愚痴を並べたから起つた事です。

全體私湯治に参つた時は、其の数の多い兩側の部屋に、客と言つたら精々二組、三組ぐらゐ。十日ばかり逗留をした間に、湯殿で出會したのは六十餘りの老人一人、其も無口な人物で、言を懸けることもしなかつた、恐く寂れたもので、最も長逗留に適した處ではない、三國港まで海は二里以上行かねばならず、御嶽が目の前に聳えて、木の芽峠中の河内が繋り合つて居ますけれども、手拭を提げて上られる譯ぢやなし、眞個の旅籠の一軒建、村までも十町餘、それさい、生魚一尾ある

のぢやないでせう、通り過ぎると、直に福井の町です。

温泉の四方は残らず田畝です、退屈もするだらうぢやありませんか。

春秋の彼岸詣、御命講、十夜の序なぞに町から日歸り、一夜泊の客は多いですが、夜分は盛時でさ

い寂寥する、殊に私の居たのは五月雨の頃でせう。

随分風変わりなればこそ我慢もしましたが、いや實際大徒然、仰向けに成つて読む書物にも飽いて、

日の中、うとく所在なくに轉寐をするから、夜になると一時を打つても寐られないので始末が悪

い。

灯は暗し、貴方、じとく降續ける、宵から雨戸を閉めるでせう。一件の列車戸だ、凡そ小半時、

がらくがらくがらくがらくと遣るですな、もう其の遠くから繰り込んで来る板の透間の、背開

の空を覗いて、あら、又夜が来ると、歎息をする次第。

(御退屈様)と入つて来る女中でも話相手に成る事か、此の方至極御退屈の寐床を伸べて、匆々に

引退ると、日一日、茶は飲み飽きる、手を敲いて湯沸の用はなく、發着がないから酒は飲まず、呼

び寄せて酌をさせるでもないから、四五人居る女中等、實に御客様を管めた話で、ばったんくと

夜延に機を織るんです。

遠くの方でね。

そら、寐床と同時に行燈を引替だ、四角くツて、圓くツてト判じ物のやうな灯でせう、乗つ、反つ

居ない蛋まで突くやうな氣がして、腹這になつて、薄暗い廣間に一人、目を皿のやうにした工合は

前世の宿業かと思はれます。

其の内煙草の火は消える、老人の客は咳をする、雨は降る、梭の音は陰に籠る、鼠が騒ぐ、天井

を睨め上げると、油皿が圓く薄ぼんやりと一杯に映つて、熟と見て居ると、燈心が二筋、やがて油

がじり／＼といふと、其の影が開いたり、すぼんだり、これが搖々して水が流れるやうに成ると、

又うつる丁子が全然船の形。』

第三

『其は何うも、其處で何か出たですか。』

「否、これは唯徒然の餘りのお話をしただけで、其の燈心の二筋の影が、大きく分れて映る時、天井が口を開たやうな中から、鐵漿を點けた色の蒼い女の顔が出たなどいふのぢやありません。」

と榊原は笑ひながら、

『然し黒天井の燈心も、まんざら縁のない話ぢやないので。さあ、寝るには寝られず、起きてるのはつらし、退屈なり、自分で身體を持餘す、こゝで毎晩同一時刻に、一時毎十二時から始めて、カチ／＼拍子木を撃つて廻るのが甚吾爺。』

其の拍子木の音が、廊下盡の、宿の勝手口と納屋の間と思ふあたりで、チヨンカチ、と聞こえるところから三歩ぐらゐづゝ間を置いちや、カチカチと打ちカチカチと敲きながら、雨戸の外を次第に枕元へ近づいて來るです。

やがて私の部屋の外で、一ツカチ／＼と遣つて通り過ぎる、それから木の音が段々に遠ざかつて、此の廊下はづれへ行つたと思ふと、小さく汗えて、後の森へ響いて聞こえなくなるのですが、毎晩でせう。

又是が一時置きに同一音で、大抵物置の邊からはじめて、森の處で行留まりに聞こえなくなるまで時間も極つて居りませう、寝られなくつて所在無さに困つて居る者の耳には、何れほど便りになつたか知れませんか。

拍子木のカチ／＼とカチ／＼の間々には寢床に匍匐になつて、行燈の灯を熱と頬杖で眺めながら、其の夜巡の歩行つきを考へて見たり、さあ／＼雨の音の聞える時は、蓑笠で居るだらうと思つて見

たり、時とすると、木を合間に時鳥を聞きます。然ういふ時は夜巡が立停つたらうと思つたり、果して雨戸の外でも足を留めたやうな気がするです。

三晩四晩と經つて、例時の刻限、同一時、聞こえるなと思ふと、遙にカチ／＼と言ふ音、さあ歩行出すわ、三歩ばかり、其處でカチリと撃つと言ふ鹽梅ですから、何となく其を聞き／＼寝て居る私自分で夜巡りでもして居るやうな氣になります、然も其時分に成ると、梭の音は勿論、帳場などは謂ふまでもない、他に一組や二組ぐらゐる客はあつても、部屋が遠くに離れて居るから、いかに寂としても煎の聲さへ聞こえない始末、世の中や夜巡の爺と自分ばかりと考へるほど、急に烈しくざつと蓑を洗つて降る時は見て居る行燈の紙が濡れて私身體に、濡かかゝるやうに思はれる、つひ小歌になれば、額を拂つて物と呼吸をつくといふやうな、毎晩夜巡を勤める心持で明け方になると疲れてうと／＼寝入るのが殆ど連夜で。

其の夜巡をする内に、

（何か變つたことはないか、爺さん）つて、もしも夜巡をする内に爺が不思議なものでも見たと言へば、直ぐに其を、自分が見たぐらゐな考で、熱心に尋ねました。丁ど前申す爺と二人で部屋を抜た、何です、然うやつて、雨戸を丁々とする約束をした時です。

正午些と下つた頃、久しぶりで雨が上つたもんですから、いきれの立つ庭前を掃いて居たのを掴んで、まあ、爺といふので縁側へ腰を掛けさせて、茶なんぞ注いで遣ると、甚吾はかさね手に茶碗を乗せて、後背向きに其處ら、夜巡の節、一めぐりする路筋をつらりと眺しながら、

(いやもし、御退屈様で、)といふ。

(退屈は身勝で、言つて見りや榮耀の餅の皮とかいふんだが、爺さん、お前は嘘。毎晩人の寝る時分から大抵な役ではないな。)實際また大抵な役ではありませんまい。』

第四

『先づ老人に喜ばせを言つて、勦ると、額に皺を寄せて、ニヤ／＼して、下唇でびたく／＼と茶のあと口を嘗めたです。』

(いえ、もし世間には權助と名乗りまして、寺の鐘を撞きますやうに、生れたものさいござりますぢや、私、甚吾と申し、温泉宿の夜巡を勤めまするに、屈托も難儀もござりませぬ。

はや、二三年このかた馴れましたで、眠い目も極りがついて、背の口とろりとやりますると、刻限に覺めまする、直ぐに拍子木を持つて納屋から罷出でますが、雨も風も苦になりはいたしませぬ。

一體が盜賊の用心、火の用心にまはりますでござりますが、扱て、夜巡が出ると極つて見れば、氣の利いた盜賊は前方で用心して寄り着きませず、火の用心とても其の通り、豫て人一人使ふほど氣をつけまする主人なれば、過失もござりませずか。

あの拍子木の音さいしますれば、此の親仁は居つても、居りませいで澤山、申さば木を打つ機關親仁、装で出まする雨の夜なぞは、我ながら、全の案山子で脱殻になつた魂は、男部屋に木枕でござりますわ、)

と暢氣なことを言つて、下腹に力を入れてウハ、と笑つたですがね、右の手で、茶碗を片寄せると左の手を前へ支いて肩を落し、面のやうな扁い、愛嬌のある顔を、私胸の處へ差寄せて低聲になりました。

(其の又拍子木が自然に空を飛んで、カチ／＼鳴つて歩行いた日には、百鬼夜行の繪巻物の幕明といふ體で容易な事ではござりませぬ。

其に就いてお尋ねの變つた事があるでござりますよ。御婦人方や何かにはお話の出来ることではござりませぬ、悚

毛をふるふて、匆々當宿をお立退きにでもなりますと寂れました折なり、主人どもに相済みませぬ。

貴方様は然やうな愛慮もござりませぬで申しますが、其のかはり眞個にはなさりますまい。

つひ一昨晚……)

何の此方から好んで聞いたくらのです、眞個にするも爲ないもありません、ぐたりとして身體を揺直して膝を進めました。』

私も榊原の言に就いて、渠に我が膝を進めたのである。

『然も一昨晚と言ふたですもの。得てかやうな事は、話す者の祖父さんが見たとか、伯父さんが聞いたとか、従兄弟の親類が其の朋友から聞いたとか言ふんだのに。』

『ぢやあ其の甚吾といふ夜巡の爺が現在、貴下がお聞きになつた、其の前々日の夜、』

『ですから私氣乗がしたのです。』

(爺さん、疑やしない、可から、譬ひ虚言を言つても眞個にするから話して聞かせな。何か、此の鐵泉に主でも棲んで、夜中に其と出會つたとでもいふのか。)

(然やうなものではござりませぬ、嫌といふほど驚かされたのは一昨日の晩でござりますが、毎度

度膽を抜かれまするは其の晩に限つたのではないのでござりまして。

例年此の五月雨になりますると、五月開と、申上げるまでもござりませぬ、黒白も分かぬ、其は其は暗いでござりまする。其處で敵めが羽を伸ばして酷い目に逢はせるでござりまするよ。

え、手前が好ぢやからと申して、直に其の譬を持出しまするも、をかしうござりまするなれども、入相など、水田の中に、徳利が立つた形に、すぼりと構へて居りまするな、怪體な奴でござりまする。)

(泥籠か、)ツテ私尋ねた。

甚吾爺が、

(青燈でござりませぬ。)

第五

『(御覽ぢやる通、此の邊四方青田で、庄屋の森がござりまする。また森の前に大池がござりまするに因つて、地體いかいこと居りまして……)』

逗留中は降籠められて、つひ居廻へぶら／＼歩きに出掛けることさへしなかつたで、其の時爺

がいふ大池は途中で見ました。鑛泉は丘のやうな處にあります。其の丘をだらりと下りて、立樹を四五本な。

松の高いのを潜ると其處に用水の溜がある、周圍は總體で七八町、北の片隅が深々とした森で、あとは其の樹立の名残が水で流したやうに淺く次第に疎になつて、其の四五本の松といふのも、矢張森の一部なんです、私が通つた時は、水が満々とあつて、實際よりは餘程砂として見えたですよ。

といふのが雨続きで溢れた所爲で、汀には怒るすらく仲びた葉ばかりの菖蒲、田の畔が二條三條水浸りに沈んで、稻葉の伏倒れた上に乗つて、二人釣をして居たのがあります、殊に黄昏だつたら餘計に廣く見えたのでせう。

のみならず、福井の町を離れてから二里不足の間、唯畝々した田畝路で、處々小橋があるばかり、目につくのは、湯の廣告の黒旗と、石地藏と、藁葺にした肥料の溜桶のうしろに、灸點の、これも旗が樹つて居る、それくらゐなものだつたので、池を見た時は宛然別天地へでも出たやうな氣がしたです。

鰻、鯉、などが澤山に釣れるのだと言つて、水浸りの畔にイむだのばかりではない、池の真中に田舟を浮べて、一人頬冠をして釣つて居た奴がある、晩方だから其の形煙のやう、舟はじつとして其まま沈んで行くやうに動かないで、却つて尊蒼の浮葉が、誘ひつれ、風に密と寄つたり、分れたり、淋しい事。

おまけに左手の汀は、寺でもあつた跡と見えて、昔の生えた石燈籠が、茫乎立つて、墓石がすらすらと、其處へも水が溢れて居た。空も池もどんよりして、唯見た處は、町も村も國も爰が行止りで、あとは筒抜けに海のやうな野原で、いもありそゝうな心細い景色が、大に趣があつたですから、しばらく、腕車を留めて眺めましたつけ。

田舟の中の人の形が、舳へつかまつて、俯向けに水を覗いた、其の狀、何の事はない其處から地獄でも覗くやうで、慄然として直ぐに腕車を急がせたです。爺のいふは其の池ですな。

(何が居る、)

(何がとおつしやつて、其の青鯉でござりますて……)

(驚が、)

何するものぞと、思ふと、爺は早く見て取つた、不平らしく、

(驚か一口におつしやりますが、旦那様、彼奴、徳利の形で水に立ちますだけあつて、此の親仁



には酒と一ツに、命取りでござりまする恐い、  
 と舌を巻くです、唇を反らしてな。鯨ではあるまいし、凡そ世の中に、青鯨のために生命を取られるといふがあるかッて聞いたです。  
 甚吾爺手拭を掴んで臂を張つた。

(其ぢやに因つて前にも申しました。え、庄屋殿の森から大池へかけまして、青鯨が巢でござりまして、何時太いこと居りますのが、又此の五月雨頃は春でござりまするわ。  
 や、いづれも名代な奴等、小溝端で蚯蚓を突いて、村の小兒に驚かされたり、川下で鮎を狙ふて、船を見て逃げ出すやうな甘いのぢやござりませぬ。

福井の市へ伸して出て、人死のある棟の上でぎやツと啼いたり、縁切の脊戸でくわツと喚いたり、三國港へ飛び歩いて帆柱を揺つたり、したかなことを、はたかすござりまする。  
 甚吾は苦々しい澁面造りで、

第六

(其の巢が總出で、糧を漁るでござりまするに依つて、夜に成ると、大池の岸は首の押せくで、焚

だらけ。嘴を揃へたら何の事はござりませぬ。鳥の國の兵隊が行列をした體、いや夥い事はお百姓が肥料に取片附けまするので目立たぬのでござりますが、森の中は一夜の内に敵めが焚で、真白に積るのが毎々でござりまする。何奴も、年功を経て居りますゆる、日中は寂莫、羽音もさせず滑んで居まして、夜に入つてから暗中を、ぎやつと言ふては口から吐き出す呼吸を燃いて其の灯で、何と、鰻を鰻吞。

箕で計るやうな大池の魚は、波を立て、近づけるでござりまする。  
 中にもあふれものが腹こなしに出て來まして、親仁が夜巡の路を二間置き三間置き、五ツ六ツ居る事やら、其とも一羽で幾度もするやら、眞の暗の足許から、ばツと羽振をして起ちますわ。咽喉で呼吸を引いてはアとお前様、魂が天上をいたしますると、其ツ切、物音も聞えぬでござりまする。  
 此方は氣が上つりまして、いやはや、身體が宙へ上つたかと思ふと、踏出す足もぶらりと下りさうで、窘んで一歩も動けぬでござりまするよ、)

(成程そりや吃驚だな、)  
 こりや、いかにも驚くでせう。で爺のいふには、(初手に食ひました時は、嘘にも天狗に釣上げられたかと思ふたでござりまする。

氣味の悪い冷汗で、びつしよりになつて、漸々腰を据えた、引いた呼吸をツムと詰めましたなり、恐々歩行き出しますると、五間と出ぬに、又ばツと飛びますわ。

此の術で晩方などは、お百姓が、畔で尻餅を搦くことがござりまするを、豫て聞いて居りましたに因つて、思ひ出して、扱はおでやつた、庄屋の森の脚長殿ぢや。

然やうに心附きましたれば太う恐い事はなくなりましたものの、其時を初めて毎晩、其が又時節になりますと、毎年でござりまする。ちやんと心得て巡回りましても、不意を打たれてはぎよツとせぬ事はござりませぬ。

おのれ見ると、檜の木の用心棒、六尺手ごろな奴を用意しまして、暗の中を透し、此方も夜巡目は馴れて來ましたなり、一本脚を掻拂ふて、胴中ひし折つて下されうと、毎晩のやうに狙ひまするが、如何な其の術をくひますか。

まざくと形を見せて、引寄せて置いて、棒が横なぐれに空を切るを合圖に、立ちざまに耳を拂ふ鼻を弾く、嚏は出ます、

と鼻頭に鍼を寄せて、くすぐつたいのを堪へる顔色、話に乗つて、縁側に胡座を組んで握拳を膝について饒舌つたです。

(これが又毎晩で、馬鹿らしくはありまする、泣くにも泣かれませす腹が立ちまする、をかしさもをかしようござりまするわ、一時は夜討の體で、松明を持つて出たこともござりまするわ、如何様火があれば、敵殿いたづらはしませぬが、片手業で、此の拍子木を打ちまするに、便が悪うござりまするに就いて、又暗やみで歩行く、例物が遊びますぢや。

磨つた揉んだが今年になりました。つひ一昨晩、五日の夜でござりまする。

お節句に就きまして、帳場から一合下されたのでござりまする。三國鯉のぶつ一切で、背めすほどに、けるほどに、とろくと肱枕、一天四海波を打治めたまへばと、一寝入りいたしましたして、酔覺のばツと目が開きますると、お定りの刻限。

お造酒がまはつて景氣はついたり、雨も止んで居りまする、不圖思ひ出して、恠ういふ時ぢや、狐でも來い狸でも來い、人間にかなう事ぢやないぞ。

おのれやれ、見ろ、年來の意趣ばらしと、先づ身仕度をいたしたでござりまする、勢ついで話したですな。』

第七

「甚吾爺は然ういつて、手拭を抜いて寤めた頸へ引掛けたです。」

（ト拍子木を預けたでござります。多時打棄つて置いた用心棒、提灯を點けて参り、物置の隅から引出しまして、あとを閉めて錠を下して、さて、提灯を吹消すと、勝手の知れた臺所の格子窓に引掛けたでござります。其處で一ツ身構をいたして、拍子木は首へかけたなり棒ぐるみ、咽喉を挟んでカチ／＼と進りまして、いよく庭傳ひに繰出しましたわ。

これは此の邊のものでござると先づそろり／＼と参りながら、八方へ目を配つて、丁ど此のお座敷の前を通りまして、やがて七八間歩行きますと、そりや敵めの氣勢がいたしますで、盲目打に一番ヤツと横に拂つたでござります。）

此處で何です、私爺の言い事が一寸受取れなかつたですな、何故と言ふと、先刻お話申した通りで、戸の外を、爺が廻る内は寝たまゝ、自分が、一所に夜巡をするやうな氣になつて、其の足の運び方さい、左から右、右から左とまでに信じて居る前々日の夜中更に變りはなく、拍子木のはじめから聞えなくなるまで知つて居たですけれども、私部屋のさきで氣合を入れて棒を振廻したとは、聊も胸に慙かなかつたぢやありませんか。

（爺さん、話はおもしろいがこしらへたな。）

（旦那）

（嘘をつけ）と極めつけるやうにいつて、私思はず笑ふたですな。

（こりや何うもなりませぬ。こゝまでお聞きなされて、はや、疑はつしやりますやうでは、これから先、其の晩は親仁が勢に乗つて、何處までも追詰めて、せめて、長脚の爪尖など挫いてくりやうと、打ちばづしく、つい浮々と長追して、あの大池の岸まで参つて、どんづまりに水をはぢいた棒で、女の裾を拂ひますると、手答へなく、煙を突いたやうな心地、呀、青鷺に女の裾がと、吃驚して見上げますると、高い處に眞白な長き顔、目もなければ眉もないのが、蒹葭のやうな口を開けて、おはぐろを見せますと、早腰を抜かして這ひました。

天窓の上で別の又しわがれた男の聲で、誰ぢや！と一聲かけられまして、何が泥鰌のやうに脚を曳摺つて、それから一目散に逃げました事を、申上げました處で、根から眞個にはなされますまい。

此處がものござります。何と恠やうなことは、御逗留の、他のお客人に申される義でござりませぬ、内の者にも話されませぬが、お見懸け申してお尋を幸饒舌ります次第。

親仁も不思議でなりましたね、青鷺の、脚を、脚をと狙いました其の脚がつと女の裾になりましたわ地體暗て、葦やら蘆やら、柳の葉やら、裾やら、袂やら見分けのつく譯はござりませぬに、小袖の

襦袢を判然見まして、其れに合はせるものを着たらしく、ふきの蒼いまで明いほどに認めました。其れさへ解せぬでござります、落着いてから考えますと、例の青鷺の吐く呼吸の怪火の光に映つたかとも思はれるでござりますが、さて何も彼も顛倒いたしましたわ。

其とも、夜中に棒を使ふて、青鷺を追かけまする親仁が、現に此處に居ります上は、また何と間違ふて、其の時分大池の邊を歩行く女中が無いにも限らぬでござります。兎もあれ、今一度、確に見届けたうござりますなれど、なかく以て、親仁一人には叶ひませぬ。

御退屈晴しぢや、欺されたと思召して、今夜おつき合ひ下さりませぬか、鷺の義は、親仁が一流の棒を使ひまして、池まで追ひ立て、参りまする何うでござります、旦那様！』

第八

語りつゝあつた榊原は言を更め、

「酷く大人氣ないやうぢやあるですが、其頃私、一人極の勇士でな、後に目が弱いために目的を變へたですが、未だ陸軍士官學校の試験を受けやうと思つて勉強をして居た最中であつたですから、

恐れんです。

否、恐れる恐れんより、のツけから、てんで事實にはしやあせんです、けれども此の剽軽な狂言師が誘ふのだから、よしんば嘘にしても何ぞ趣向があらうと考えたですから、早速承知をしたもの、晝間見てさい物凄いやうに感じた大池の岸を、真夜中に誰が貴方、然も鷺の脚が裾に化るなぞツてお話するもお恥かしい。

ですが……といひかけ、榊原は私の顔を見て又四邊を詢した、時恰も五月にして今宵然る雨瀟々旅店の一室に灯更けて、片明りに旅の同伴の、榊原氏の片暗く、疾しといへる目は却つて美しく輝いたのである。

私は卓子に肘をついて、其の黒き髭ある優しい面さしの濃き眉の間に、或もの、潜めるをうかひひながら、對酌の盃を取り上げたが、酒は満ちて且つ冷くなつて居た。下に置くと、彼方は盃をしてくれやうとして、銚子を持ったが、齊く無意識であるかの如く差置いた、此景此時、酒を交ゆるに違あらず。

渠は直ちに言を繼いで、『ですが事實であつたですよ。』